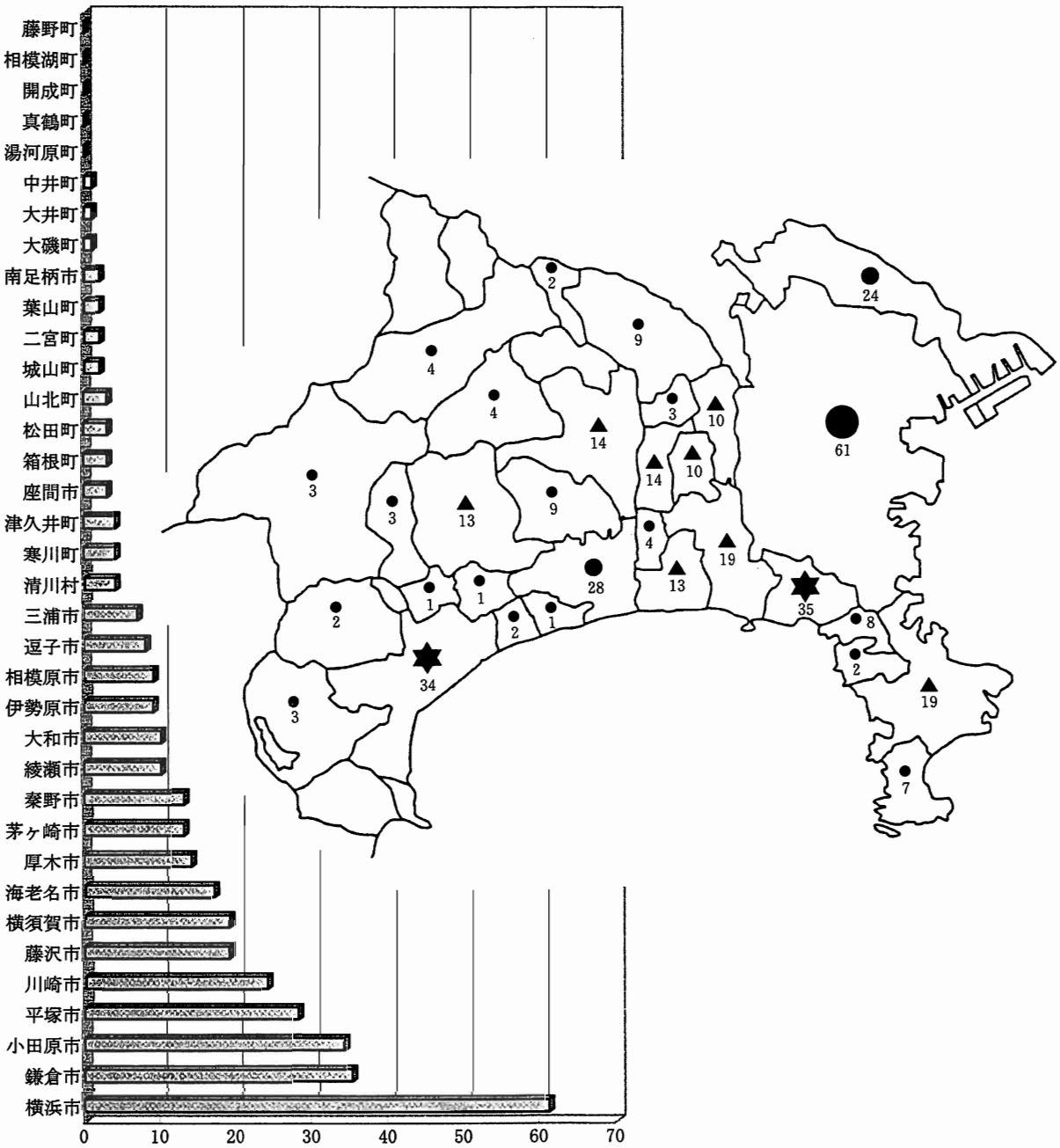
テ　ー　マ　発　表

「神奈川の遺跡調査をめぐる30年」



テーマ発表　神奈川の遺跡調査をめぐる30年　近代

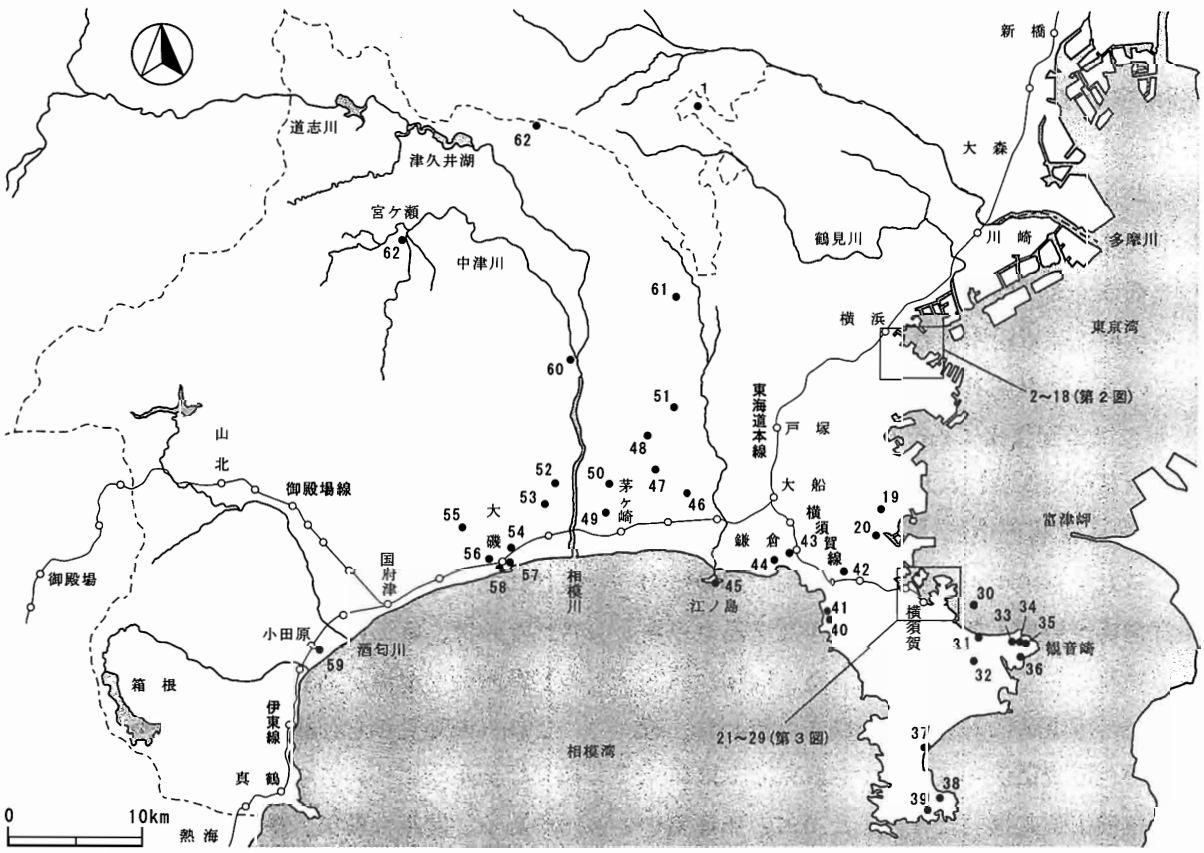
―近代遺跡の調査事例と今後の課題―

野内（やない）　秀明（ひであき）

1．はじめに

文化庁は埋蔵文化財の範囲を「近現代の遺跡については、地域において特に重要なものを対象とすることができる」（文化庁次長通知）としているが、神奈川県では近現代遺跡は埋蔵文化財として取扱われてはいないのが現状である。

しかしながら、近年、いくつかの地域において重要な近現代遺跡が発見され、考古学的な方法に基づく調査事例が増加してきた。過去の工事中にも近代遺構が発見され、不充分ながらも遺物の採集と記録が残されてきたことの積重も含めて、近現代遺跡の調査の必要性が認識され始めている。



1 黒川遺跡群　19 釜利谷遺跡　20 上行寺裏遺跡　30 猿島遺跡群　31 横須賀造船所走水水道関連遺構　32 大塚台遺跡　33 問答ケ原遺跡　34 小原台堡塁跡　35 小原台防空砲台跡　36 鴨居鳥ケ崎地下壕　37 三浦海岸トーチカ跡　38 ヤキバの塚　39 三崎砲台跡　40 木の下遺跡　41 葉山町No.2遺跡　42 池子遺跡群　43 今小路西遺跡　44 長谷観音堂周辺遺跡　45 江ノ島コッキング温室遺構　46 稲荷台地遺跡群　47 南葛野遺跡　48 湘南藤沢キャンパス内遺跡　49 上ノ町遺跡　50 下寺尾西方A遺跡　51 上土棚笹山遺跡　52 道半地遺跡　53 構之内遺跡　54 坊地遺跡　55 高麗山遺跡　56 古屋敷遺跡　57 神明前遺跡　58 大磯小学校遺跡　59 小田原城・城下遺跡群　60 東町二番遺跡　61 下川間旧小倉家住宅主屋・住宅土蔵　62 橋本遺跡　63 宮ケ瀬遺跡群

第1図　神奈川県の主な近代遺構の報告例

2．近代遺跡の調査概観

神奈川県内おいて、近代の遺構が近世以前の時期の発掘調査過程で記録されることはあったが、本格的な発掘調査が行われるようになったのは1980年代後半からである。1986～1989年にかけて行われた川崎市黒川遺跡群の調査では、第２次世界大戦中の陸軍照空隊陣地跡が調査･記録された。

1990年代に入ると、近代の遺構の調査事例は増加した。1990～1991年には清川村宮ケ瀬遺跡群北原遺跡内の長福寺址が調査され、池址・廃棄土坑などから幕末～明治の西洋遺物が出土し注目された。1993年には横須賀市大塚台遺跡で第２次世界大戦中の陸軍高射砲陣地が調査され、同年に行われた横須賀市田戸遺跡の調査では関東大震災の復興造成層、掩蓋式防空壕などが検出された。

1990年代までの近代遺構に対する調査は「埋蔵文化財」の調査と不可分であったが、2000年代になると、近代遺跡だけを対象とした発掘調査も行われるようになっていった。2000年に行われた横須賀市猿島遺跡群の確認調査は旧軍港市転換法に基づく都市公園整備に伴ったものだが、調査の結果、明治期の陸軍沿岸砲台に係る遺構が良好に残されていることが判明した。以降、2002・2003・2006年には公園整備に先行して、猿島砲台跡を対象とした発掘調査が行われた。

2002年には藤沢市江ノ島植物園整備工事中にイギリス人サムエル・コッキングの明治期の植物園温室遺構が発見・調査され、翌年江ノ島コッキング植物苑として保存・公開された。同年、三浦市ヤキバの塚遺跡に対する学術調査が行われ、近代漁村の生活史に係る情報が得られた。2003年には米海軍横須賀基地内に存在した1871年建築の横須賀製鉄所副首長官舎解体に伴い、建築物解体調査と敷地・基礎の発掘調査が行われた。同年に行われた横浜市第二代横浜駅跡の緊急調査も、建築学・考古学両分野での調査であった。

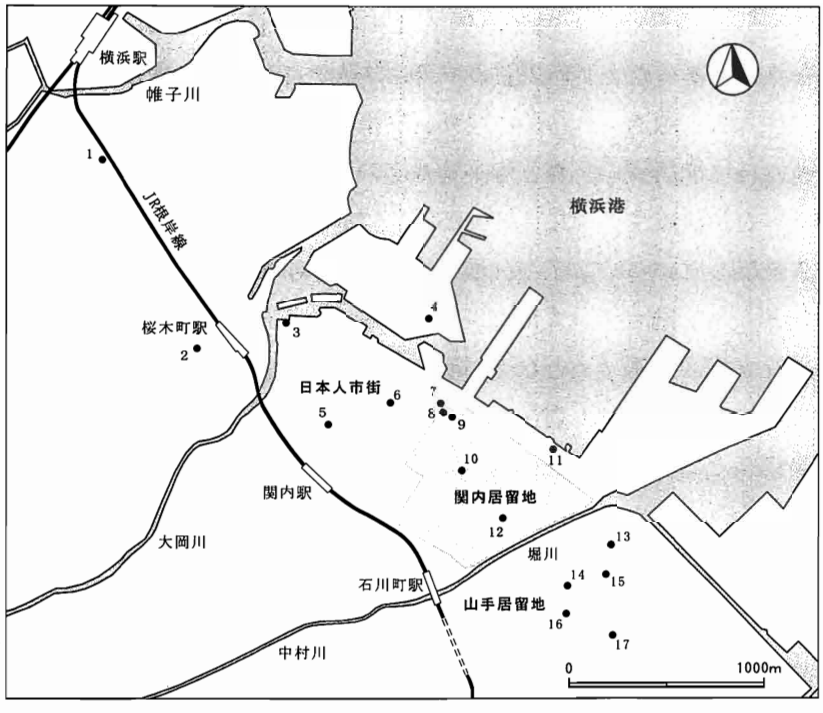
3．居留地・国際商業都市遺跡ー横浜

1858年に締結された安政五カ国条約に基づいて横浜村に造られた外国人の居住地は、1899年の条約改正まで現在の横浜市関内と山手に存在したもので、神奈川県内で最も早く西洋技術を用いた社会基盤が整備されていった地域である。

商業地区であった関内では工事中に居留地の都市基盤に係る遺構が発見されることが多く、横浜市開港資料館、横浜都市発展記念館などによって記録が残されてきた。下水道施設として、1980年に煉瓦造中卵形管（下水管）、1996年に煉瓦造大卵形管、1982・2001年にこれらを繋ぐ煉瓦造マンホールが発見された。これらは1881年以降に日本人技術者によって改修されたものだが、2001年にはそれ以前にイギリス人ブラントンによって敷設された陶管製下水管も発見されている。また、2001・2004年に道路舗装面、1983・1986・2002年には1872年に開業し、日本最古のガス灯を点灯させた横浜瓦斯会社に係る遺構などが発見され、記録が残されている。

居住地区の山手では、1983年に住宅跡として山手80番館遺跡、1978年に娯楽施設・公会堂としての山手ゲーテ座跡、2003年にフランス領事公邸跡などが発見され、調査されている。前２例は考古学的方法ではないが、発掘調査が行われたもので、他の多くの事例は遺物の採集と簡単な記録が残されているに過ぎない。考古学的な方法で調査されたのは、第二代横浜駅跡・横浜共同電灯会社の発電所関連遺構が初めてであった。

これらの知見から、居留地の基盤整備、居住形態、社会組織についての物質的な資料が蓄積されつつある。関東大震災、横浜大空襲で居留地時代あるいはその後の国際的な商業都市の建造物は多くが消失したことから、これら地下に存在する遺構は横浜市だけではなく、神奈川県の近代史を考える上できわめて重要なものと思われる。

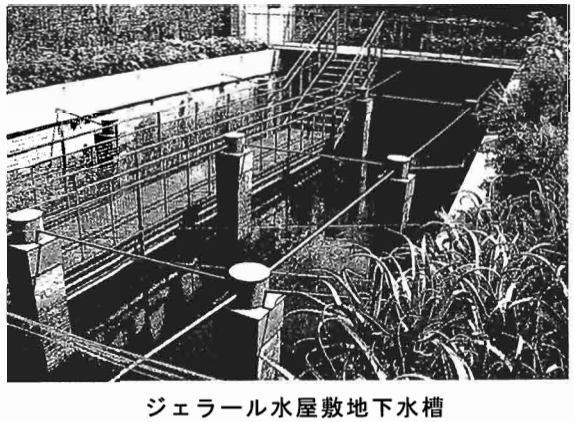


1　第二代横浜駅跡・発電所跡
2　横浜瓦斯会社跡
3　灯台寮第二代試験灯台跡
4　横浜税関新港埠頭事務所跡
5～9 居留地下水道関連遺構
5　（馬車道地点）
6　（本町１丁目交差点地点）
7　（税関前地点）
8　（開港資料館地点）
9　（開港広場地点）
10　居留地 91 番地遺跡
11　フランス波止場跡
12　清国領事館跡
13　フランス領事公邸跡
14　ジェラール水屋敷地下貯水槽跡
15　山手ゲーテ座跡
16　山手 80 番館遺跡
17　山手天沼ビール工場跡

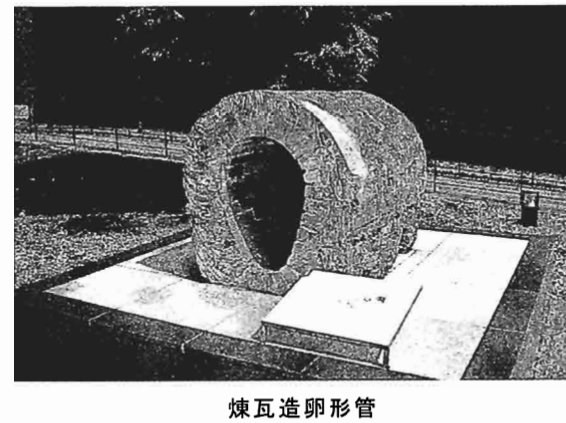
第２図　横浜市関内周辺の主な近代遺跡の調査例

山手80番館遺跡

山手80番館遺跡



ジェラール水屋敷地下水槽



煉瓦造卵形管

写真１　山手 80 番館遺跡・ジェラール水屋敷地下貯水所・レンガ造卵形管

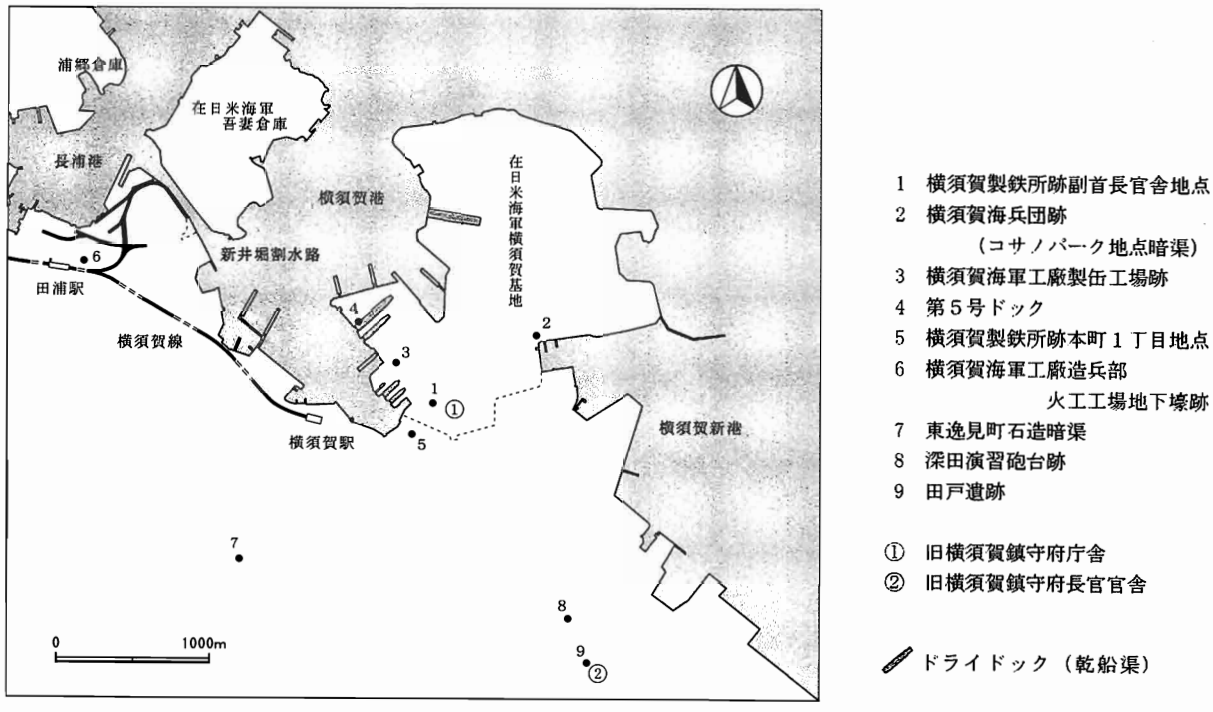
４．陸海軍の軍事都市遺跡－横須賀

横須賀村も横浜村と同様の小さな漁村であったが、1865 年の横須賀製鉄所の建設によって、急速に都市化していった。横須賀製鉄所は後に横須賀海軍工廠となり、1884 年に横須賀鎮守府が設置され、横須賀・長浦両港は軍港として発展していった。一方で、1880 年に陸軍の観音崎第１・２砲台建設に始まる東京湾要塞の整備・拡充と横須賀重砲兵連隊、東京湾要塞司令部設置などにより、横須賀は日本最大規模の陸海軍の軍事都市となっていった。第２次世界大戦で大きな空襲を受けなかった横須賀では、これら幕末以降終戦までの軍事都市遺構が多く残されている。

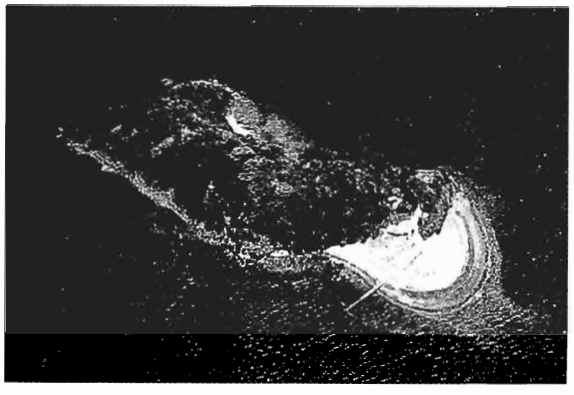
横須賀製鉄所に係る遺構としては、1989 年に横須賀市本町３丁目において大型店舗建設工事中に鉄釘と鉄輪のジョイント部を持つ丸太杭と安山岩製間知石が多数出土し、横須賀市自然・人文博物館によって採集され、横須賀製鉄所の造船台部材であることが確認された。

2003 年には米海軍横須賀基地内に横須賀製鉄所副首長フランス人ティボディエ官舎の存在が明らかになり、移築復元を目的として建築物解体調査と建築物基礎の発掘調査が行われた。調査の結果、「YOKOSUKA」刻印耐火煉瓦、「ミカホ」刻印タイル、「横須賀製鋳所」刻印普通煉瓦などが出土し、また火災による建築物の部分的な修復があったことなどが明らかになった。同年に基地内の近代化遺産・近代遺跡の分布調査が行われ、横須賀製鉄所時代のフランス人技術者居住区が旧地形を残していることなどが確認された。

東京湾要塞関連では、猿島砲台跡で現存する 1895 年竣工の煉瓦造発電所の建造物調査も含めて、2000～2006 年の間４次の発掘調査が行われ、明治前期の沿岸砲台の構造が有機的に把握された。他に 2003 年小原台堡塁跡、2006 年深田台演習砲台跡の調査などが行われたが、これらの調査により幕末～明治を中心とした時期の土木・建築技術にかかわる知見が得られた。

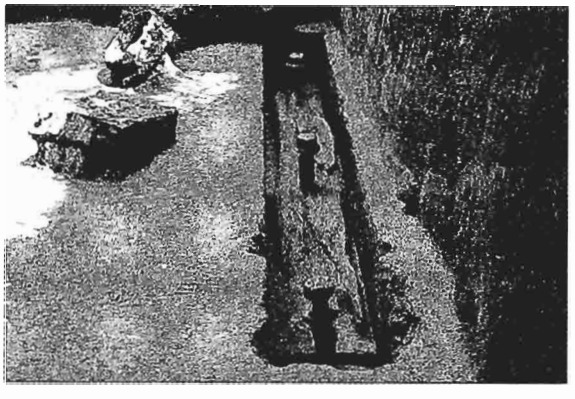


第３図　横須賀市中央地区周辺の主な近代遺跡の調査例



猿島砲台跡航空写真

猿島砲台跡煉瓦造蒸気機関発電所



猿島砲台跡第２砲台第４砲座

猿島砲台跡擁壁石積崩壊跡

解体前の横須賀製鉄所福首長官舎

解体後の建物基礎・間仕切基礎

建物基礎の構築構造

横須賀製鉄所跡（副首長官舎地点）出土陶磁器

写真２　猿島砲台・横須賀製鉄所跡(副首長官舎地点)の調査

5．保養地・避暑地遺跡ー宮ケ瀬・大磯・藤沢

鎌倉、江ノ島、宮ケ瀬などは景勝地として、幕末から横浜居留地の外国人が旅行した保養地・避暑地であった。また、1887 年に横浜ー国府津間の鉄道が開業すると、大磯は保養地として注目され山県有朋など政府要人の別荘が多く建設された。

1990～1991 年にかけて発掘調査された宮ケ瀬遺跡群北原遺跡内の長福寺址では、池址・廃棄土坑などから幕末～明治にかけての陶磁器・ガラス製品が出土した。そのガラス製品が安政五カ国条約を締結したイギリス・フランスなどの西洋遺物であることから、居留地の外国人が景勝地としての宮ケ瀬を訪れていたことが実証された。

2002 年には藤沢市江ノ島で横浜居留地に輸入貿易商社を経営していたコッキングによって、明治中期に建設された温室遺構が調査された。温室遺構は温室、地下水槽、貯炭庫、ボイラー室が池の回りに配され、防風壁で囲まれた構造で、当時有数の規模の洋式温室建築と評価されている。

別荘地大磯では 1991 年に伊藤博文関連の土地であった古屋敷遺跡の調査が行われ、大磯で初めて近代遺構として廃棄土坑が検出され、「朝鮮総督府専売」の陽刻を持つガラス容器が出土している。1992 年には旧佐土原藩主、貴族院議員島津忠寛別荘跡の神明前遺跡の調査で溝、煉瓦構造物が検出され、庭園遺構の可能性が指摘されている。

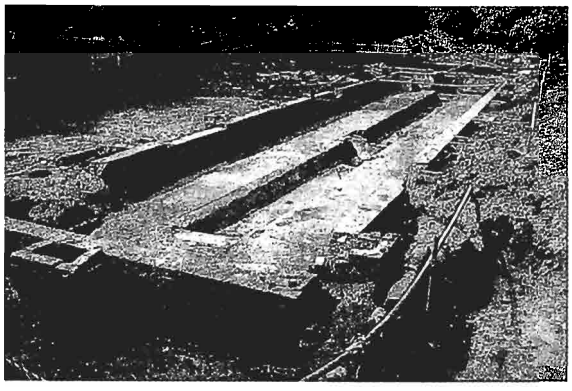


写真３　江ノ島コッキング温室遺構

6．戦跡・戦災・震災の痕跡ー茅ヶ崎・平塚

昭和期の戦争遺跡としては、川崎市黒川遺跡群の陸軍照空隊陣地跡、横須賀市大塚台遺跡の陸軍高射砲陣地跡、横須賀市猿島遺跡群の高角砲を配備した海軍の猿島防空砲台跡などの他に、1998 年に横浜市上行寺裏遺跡で高射機関砲台座跡、2006 年に横須賀市鳥ケ崎地下壕、同市横須賀海軍工廠造兵部火工工場地下壕などが調査されている。

戦災の跡として茅ヶ崎市内の多数の遺跡からは焼夷弾が発見されているが、市民がどのように戦争に直面したかという視点でこれらの記録の必要性が指摘されている。同様な視点から 1986 年に茅ヶ崎市下寺尾西方 A 遺跡、1988 年に綾瀬市上土棚笹山遺跡などで防空壕跡の調査が行われた。平塚市構之内遺跡、大磯町高麗山遺跡、坊地遺跡でも焼夷弾が発見され、坊地遺跡では空襲による火災層の可能性のある焼土層も検出されている。

また、戦災の跡ではないが、猿島砲台中央の切通しでは護岸石積の崩壊跡が検出された。ここからは、きわめて多数の高角砲弾の弾頭・薬莢の破片と 300 を超える高角砲弾の弾頭が出土したが、破裂していない弾頭もすべて外圧を受けていること、石積の崩落石材中から当時の道路面まで変化なく出土したことなどから、石積の崩落の原因は終戦直後の連合軍による武装解除に伴う爆破処理と考えられた。

関東大震災の痕跡は地割れ痕や噴砂痕以外に震災による火災層と考えられているものと横須賀市田戸遺跡で発見された地すべりなどの復旧造成層がある。田戸遺跡は横須賀鎮守府長官官舎の入口に隣接した土地で、復興造成層上で掩蓋式防空壕、復興造成層下で建物跡が検出された。前者は昭和期の遺構で、後者は震災前に存在した大正期以前の衛兵詰所にかかわる建物跡と考えられた。これらの空襲、震災による焼土層、震災復興層は近代遺跡における鍵層として有効である。

7．近代遺跡の今後の課題

神奈川県内の近代遺跡の発掘調査例は多くはないが、過去の立会調査などによる記録の積重ね、近年のいくつかの発掘調査によって、横浜、横須賀をはじめ、県内各地域で特徴ある近代遺構、遺物に対する知見が蓄積されつつある。

本格的な近代化の始まりは地域によって異なり、それぞれに特色があり、それは現在に至る各地域の地域形成史に他ならない。近代化の過程における交通網の発達、電信事業の開始、大震災、戦争など地域を超えた歴史事象と絡まりながら各地域の近代化事象が統合されたものが近代神奈川の形成史になるものと思われる。

震災・戦災、戦後の開発などで地上構造物が失われたものは「埋蔵文化財」として考古学的調査が必要なのは言うまでもないが、近代化遺産として認識される建築物・土木構造物など有形文化財に関しても「これらのものと一体をなしてその価値を形成している土地その他の物件を含む」ものであることから、その基礎や工法については考古学的方法による調査が必要である。

文化財保護行政に携わるもの、発掘調査に従事するもの、考古学を学ぶものにとって近代遺跡を埋蔵文化財としてのみとらえがちだが、より広い文化財の概念の中で位置付け、保護・調査・活用を考えるべきではないだろうか。

（紙面の都合上、謝辞・文献については省略しました。ご教示いただいた方々に感謝いたします。）

第２表　神奈川県における主な近代遺構の報告例（２）

県央部（藤沢市・茅ヶ崎市・平塚市・綾瀬市・相模原市・大磯町）

市町村	遺跡名	調査年	時代	検出遺構等	出土遺物
藤沢市	南葛野遺跡	1992～1993	昭和	防空壕。土坑	ガラス製品他
藤沢市	湘南藤沢キャンパス内遺跡	1988～1990	昭和	防空壕	ガラス製品・銭貨他
藤沢市	江ノ島コッキング温室遺構	2002	明治～大正	造園遺構	普通煉瓦・スレート・セメント塊
藤沢市	稲荷台地遺跡群	2006	昭和	藤沢海軍航空隊跡	ガラス製品・鉄製品他
茅ヶ崎市	下寺尾西方Ａ遺跡	1986	昭和	防空壕	
茅ヶ崎市	上ノ町遺跡	1991～1995	明治～大正	溝状遺構・硬化面他	普通煉瓦・陶磁器・西洋遺物他
綾瀬市	上土棚笹山遺跡	1998	昭和	防空壕	
厚木市	東町二番遺跡	1991～1992	明治～大正	建物址、排水施設他	陶磁器・土管・石杭・ガラス製品
大磯町	古屋敷遺跡	1991	明治～昭和	伊藤博文邸関連地	ガラス容器（朝鮮総督府専売局）
大磯町	神明前遺跡	1992	明治	島津忠寛別荘跡	普通煉瓦・耐火煉瓦・汽車土瓶他
大磯町	坊地遺跡（竹縄遺跡Ⅱ地点）	1993	昭和	戦災跡	焼夷弾
大磯町	坊地遺跡（竹縄遺跡Ⅲ地点）	1995	昭和	空襲被火災層	普通煉瓦・ガラス製品
大磯町	大磯小学校遺跡（町屋遺跡）	1997	昭和	別荘地跡	普通煉瓦・統制磁器・ガラス製品
大磯町	坊地遺跡	2000	昭和	防空壕・土坑	陶磁器
大磯町	高麗山遺跡	2001	昭和	軍事施設・戦災跡	焼夷弾・ガラス製品

県西部（小田原市・清川村）

市町村	遺跡名	調査年	時代	検出遺構等	出土遺物
小田原市	大久保雅楽介邸跡（第Ⅳ地点）	1989～1990	明治～	廃棄土坑・石組水路他	陶磁器
小田原市	大久保雅楽介邸跡（第Ⅴ地点）	1990～1993	明治～大正	水路他	陶磁器・土器
小田原市	本町遺跡（第Ⅰ地点）	1991～1992	明治～	井戸・石組	陶磁器
小田原市	大久保雅楽介邸跡（第Ⅱ地点）	1991～1992	明治～大正	水路他	陶磁器
小田原市	三の丸南掘（第Ⅳ地点）	1993	明治～	礎石列・井戸	陶磁器・土管
小田原市	筋違橋町遺跡（第Ⅱ地点）	1998	明治～昭和	建物址・石組遺構他	陶磁器・土器
小田原市	天神下跡（第Ⅱ地点）	1999	明治～	石組水路・土坑	陶磁器
小田原市	三の丸南掘（第Ⅶ地点）	2002～2003	明治～	石列・集石遺構他	陶磁器・木製品
清川村	北原遺跡・長福寺址	1989	明治～昭和	保養地跡	陶磁器・ガラス製品・西洋遺物他
清川村	南（No.2）遺跡	1989	明治～昭和	土坑	陶磁器・鉄製品・銭貨他
清川村	馬場（No.3）遺跡	1991～1992	明治～昭和	土坑	陶磁器
清川村	馬場（No.7）遺跡	1991～1994	明治～昭和	集落跡	陶磁器・ガラス製品・銭貨他

第１表　神奈川県における主な近代遺構の報告例（１）

県東部（川崎市・横浜市）

市町村	遺跡名	調査年	時代	検出遺構等	出土遺物
川崎市	宮添遺跡	1986	昭和	照空隊陣地跡	統制磁器・銭貨・金属製品他
川崎市	黒川遺跡群 No. 29 遺跡	1989	昭和	照空中隊本部跡	陶磁器・ガラス製品・碍子他
横浜市	釜利谷遺跡	1974～1976	昭和	高射砲陣地跡	高射砲弾蒼
横浜市	山手ゲーテ座跡	1978	明治	関内居留地遺構	普通煉瓦・ジェラール瓦他
横浜市	居留地下水道(開港資料館地点)	1980	明治	中下水卵形管	
横浜市	居留地下水道(開港ひろば地点)	1982	明治	煉瓦造マンホール	普通煉瓦（分銅刻印）
横浜市	横浜瓦斯会社跡	1983	明治	傾斜式レトルト窯跡	普通煉瓦・耐火煉瓦・鉄滓煉瓦他
横浜市	山手 80 番館遺跡	1984	明治	山手居留地遺構	有孔煉瓦・ジェラール瓦他
横浜市	ジェラール水屋敷地下貯水槽	1985	明治	居留地遺構	
横浜市	横浜瓦斯会社跡	1986	明治	ガス製造所基礎	普通煉瓦・耐火煉瓦他
横浜市	居留地下水道(馬車道地点)	1987	明治	石造下水道	
横浜市	横浜税関新港埠頭事務所跡	1994	大正	港湾遺構	普通煉瓦
横浜市	居留地下水道(本町１丁目地点)	1996	明治	大下水卵形管	
横浜市	居留地下水道(税関前地点)	1996	明治	大下水卵形管	
横浜市	山手ビール工場跡	1998	明治	工場建築物基礎	普通煉瓦・耐火煉瓦・スレート他
横浜市	上行寺裏遺跡	1998	昭和	高射機関砲台座	
横浜市	清国領事館跡	2000	明治～大正	関内居留地遺構	ジェラール瓦・中国製陶磁器他
横浜市	フランス波止場跡	2000	幕末～明治	階段状石組	
横浜市	横浜市居留地 91 番地遺跡	2001	明治	煉瓦塀	普通煉瓦・ジェラール瓦他
横浜市	旧灯台寮試験灯台跡	2001	明治	試験灯台基礎	
横浜市	居留地下水道(日本大通地点)	2001	明治	煉瓦造マンホール	円筒土管・マンホール鉄蓋他
横浜市	居留地道路舗装遺構	2001	明治	道路舗装面	
横浜市	横浜瓦斯会社跡	2002	明治	送ガス管	イギリス製鋳鉄ガス管他
横浜市	フランス領事公邸跡	2003	明治	揚水用風車基礎	普通煉瓦・ジェラール瓦他
横浜市	第二代目横浜駅跡・発電所跡	2003	明治～大正	鉄道遺構他	双頭レール・汽車土瓶・タイル他
横浜市	居留地道路舗装遺構	2004	明治	道路舗装面	ジェラール瓦・和瓦他

三浦地区（横須賀市・三浦市・逗子市・鎌倉市・葉山町）

市町村	遺跡名	調査年	時代	検出遺構等	出土遺物
横須賀市	横須賀造船所走水水道遺構	1970	明治	水道遺構	陶製水道管
横須賀市	横須賀製鉄所跡(本町３丁目地点)	1989	明治	港湾施設	松製丸太杭・閖知石・裏込石
横須賀市	大塚台遺跡	1993	昭和	大津山高角砲台跡	機械類・陶磁器・ガラス製品他
横須賀市	田戸遺跡	1993	大正～昭和	防空壕・震災復興層他	普通煉瓦・陶磁器・和瓦他
横須賀市	問答ケ原遺跡	1996	昭和	軍事施設	小銃弾薬莢・碁石・賽他
横須賀市	東逸見町石造暗渠	1998	明治～昭和	下水道遺構	陶磁器・汽車土瓶他
横須賀市	猿島砲台跡	2000	明治～昭和	沿岸砲台・防空砲台跡	普通煉瓦・耐火煉瓦・吸収缶他
横須賀市	猿島砲台跡	2002	明治～昭和	沿岸砲台・防空砲台跡	高角砲弾弾頭・砲弾状木製品他
横須賀市	横須賀製鉄跡（副首長官舎地点）	2003	明治～昭和	建築物跡・煉瓦排水路	普通煉瓦・ジェラール瓦・和瓦他
横須賀市	猿島砲台跡	2003	明治～昭和	沿岸砲台・防空砲台跡	羽釜・硬質陶器・銭貨・洋瓦他
横須賀市	小原台堡塁跡	2003	明治～大正	堡塁跡	普通煉瓦・裏込打割煉瓦他
横須賀市	横須賀製鉄跡（副首長官舎地点）	2003	明治～昭和	建築物跡	普通煉瓦・耐火煉瓦・タイル他
横須賀市	横須賀基地内近代遺跡分布調査	2003	幕末～昭和		普通煉瓦他
横須賀市	小原台防空砲台跡	2005	昭和	防空砲台跡	軍用食器・統制磁器・ガラス製品
横須賀市	横須賀海軍工廠第５号ドック	2005	大正	石積擁壁裏込	
横須賀市	鳥ケ崎地下壕跡	2006	昭和	軍事施設	
横須賀市	猿島砲台跡	2006	明治～昭和	沿岸砲台・防空砲台跡	陶磁器・洋瓦・ガラス製品
横須賀市	観音崎砲台遺構分布調査	2006	明治～昭和		普通煉瓦
横須賀市	横須賀海軍工廠火工工場地下壕跡	2006	昭和	軍事施設	測量器材の一部
横須賀市	深田演習砲台跡	2006	明治～昭和	演習砲台	普通煉瓦・ガラス製品
三浦市	三崎砲台跡	1996	大正～昭和	沿岸砲台跡	
三浦市	三浦市内戦跡遺跡分布調査	2001	大正～昭和		
三浦市	三浦海岸トーチカ跡	2002	昭和	軍事施設	ワイン瓶・ランプ・鉄製品
三浦市	ヤキバの塚	2002	明治～大正	塚・貝層	陶磁器・ガラス製品・鉄製釣針他
逗子市	池子遺跡群 No. 1-C 地点	1989	明治～昭和	集落跡	陶磁器他
逗子市	池子遺跡群 No. 5 地点	1991	明治～昭和	集落跡	陶磁器他
逗子市	池子遺跡群 No. 7 地点	1991	明治～昭和	集落跡	陶磁器他
逗子市	池子遺跡群 No. 1-E 地点	1993	明治～昭和	集落跡	陶磁器他
鎌倉市	今小路西遺跡	1984～1985	明治～大正	御用邸跡	陶磁器・襖の引手金具・和瓦他
鎌倉市	長谷小路周辺遺跡	1994	明治～大正	土坑	陶磁器他
葉山町	木の下遺跡	1992	昭和	防空壕	陶磁器・軟質陶器・メダル
葉山町	葉山町 No. 2 遺跡	1998	昭和	土坑	陶磁器・ガラス製品

テーマ発表　神奈川の遺跡調査をめぐる30年　近世

―近世考古学の幕開けと発展―

山口　剛志

1．はじめに

近世を対象とした発掘調査は、昭和44年(1969)の中川成夫・加藤晋平による「近世考古学の提唱」（中川・加藤1969）以降、本格的に実施されるようになった分野で、考古学としての歴史は比較的新しい。神奈川では、1970年代初めからようやく小田原城を中心に行われるようになった。

さて、東国における近世の幕開けは、天正18年（1590）の豊臣秀吉による小田原攻めによって小田原北条氏が滅亡した以降とするのが通説である。ここでは、この時期区分に従って神奈川における近世の考古学的成果について、この30年を振り返ってみたいが、小田原北条氏に関連する16世紀代の城郭についても若干触れてみたい。

2．小田原城関連遺跡

小田原城は、昭和13年（1938）に国指定史跡となり、その後三次にわたる追加指定を受けている。現在は、本丸・二の丸の大部分と三の丸・総構の一部が国史跡指定地となっている。

小田原城関連遺跡の発掘調査は、昭和46年（1971）に史跡整備を目的とした試掘調査（小田原市教育委員会1972）が本丸・二の丸で実施された以降、現在までに大小200例以上行われた。

(1) 本丸・二の丸

本丸・二の丸は、二の丸弁財天曲輪の発掘調査（金子1980ａ）など一部を除けば、その多くが史跡整備に伴う発掘調査である。

昭和46年（1971）最初の試掘調査が実施された以降は、散発的な発掘調査が続いたが、昭和57年（1982）に実施された御用米曲輪の試掘調査は約2,600㎡という広い面積が対象となり、小田原城における最初の本格的な発掘調査となった（塚田ほか1984）。ここでは、16～19世紀の遺構・遺物が多くの生活面と盛土層から確認され、以後の本丸・二の丸発掘調査に多くの影響を与えた。

この翌年以降には、二の丸中堀（住吉堀）（塚田ほか1985・1989・1997、大島1993～95）、二の丸御殿（大島1999）、馬屋曲輪（大島2003）、馬出門（諏訪間2005）など、相次いで史跡整備に伴う発掘調査が実施された。そして、銅門・中堀（住吉堀）は近世の姿に復元され、現在は発掘調査を継続しつつ馬出門・馬屋曲輪を復元中である。

(2) 三の丸

近世三の丸は主として低地部に展開し、藩の家老屋敷や役所などが置かれていたところである。

ここでは、箱根口跡第Ⅱ地点（諏訪間1987、諏訪間ほか1992）と藩校集成館跡第Ⅲ地点（戸田ほか1995、小林2002）で城絵図に描かれてない16世紀末～17世紀初頭の箱根口３号堀が検出された。３号堀がロームブロックによる人為的な堆積であったことから、慶長19年(1614)大久保忠隣改易に伴う徳川家康・秀忠の小田原城破却で埋められた堀と推定された。歴史的事象を裏付ける考古資料として注目される。

遺物では、藩校集成館跡第Ⅲ地点64号土坑とその周辺から鍋島焼が出土した（第１図）。この製品は、18世紀前半の盛期鍋島に相当する色絵皿・染付皿・青磁染付皿・青磁皿で、このほかに1750年代を中心とした遺物が出土した。出土状況から判断して1750～70年代に発生した災害によって廃棄された遺物と推定される。

鍋島焼は、肥前鍋島藩が将軍家・大名家などへの献上・贈答品として精巧な磁器を藩直営で焼いたもので、江戸以外では小田原からの出土も多い。これは、幕府の重職を代々勤めた大久保氏が藩主であったことと関係するのであろう。また、鍋島藩から陶器などが贈られたとの記録もあり（神奈川県立博物館 1987)、考古資料が文献史料によって裏付けられた事例として注目される。

小田原城以外の神奈川で出土した鍋島焼は、伊勢原市上粕屋・上尾崎遺跡での 18 世紀後半～19 世紀前半の後期鍋島１点が認められる（宍戸ほか 1999)。このような農村地帯への流通は、鍋島焼の性格の変化を考える上で非常に重要である。

(3) 三の丸堀

大手門に面した三の丸東堀第Ⅰ地点の発掘調査では、石垣を伴う三の丸堀が初めて確認された（戸田ほか 1994)。石垣は、松材の胴木二本の上に切石の石垣が三段に積まれていた。このように三の丸東堀は、17 世紀中葉の近世化工事によって石垣が構築されていたことが明らかとなった。

また、三の丸東堀第Ⅱ地点では、近世化工事によって構築された切石石垣の下から玉石積みの石垣が検出された（第２図）（戸田ほか 1994、小林ほか 1995)。石垣は、河原石による野面積みで総数九段積まれており、屈曲部には算木積みの技法が採用されていた。出土遺物から 16 世紀末～17 世紀初頭に構築されたと推定される。この玉石石垣については、現在最古の城絵図である「加藤図」（1614～1631 年頃）と年代や屈曲する形態が一致することから、これまで記載内容の信憑性が問われていた「加藤図」を再評価する資料ともなった。

なお、三の丸東堀以外では、三の丸南堀第Ⅴ～Ⅶ地点においても同様な石垣が検出された（佐々木ほか 2002・2005)。一方、三の丸北堀・元蔵堀では、現在石垣が確認されておらず、16 世紀以来の障子堀の形態を呈する（小林 2005・吉田 2005)。

(4) 総構

総構は、天正 18 年（1590）の豊臣秀吉による小田原攻めに備えて小田原北条氏が構築したもので、城内はもとより城下町をも堀と土塁によって取り囲んだ周囲約９kmもの大遺構である。

伝肇寺西第Ⅰ地点の発掘調査では、堀幅 16.5m、深さ 10.0mという大規模な障子堀が確認され、総構の堀と土塁の全容が初めて明らかにされた（山口 2002、山口ほか 2004)。障子堀は、小田原北条氏が積極的に取り入れた築城法のひとつであるが、秀吉に対抗した小田原北条氏の並々ならぬ姿勢が本地点の堀と土塁から見て取れる。

(5) 城下

城下では、昭和 51 年（1976）調査の香沼屋敷跡第Ⅰ地点が最初であるが（金子ほか 1977・金子 1980ｂ)、転機となったのは昭和 62 年（1987）調査の欄干橋町遺跡第Ⅱ地点である（諏訪間 1988、諏訪間ほか 1993)。本遺跡は、東海道に面した城下町・宿場町にあたり、調査地点は現在も存続する中世以来の有力商人の敷地である。ここでは、検出された多くの遺構・遺物を検討した結果、16～18 世紀の遺物が五時期に大きく変遷することが確認された。この基準資料の確立により、小田原城における陶磁器編年の構築が可能となった。

欄干橋町遺跡第Ⅱ地点の西側に隣接する第Ⅳ地点は、平成６年（1994）に発掘調査が実施され、東海道に面した表側に屋敷、奥側にゴミ処理用の土坑が構築された庭であったことが推定されており、東海道沿いの城下の土地利用形態を考える上での指針を示した（山口 1996、山口ほか 1998)。

さらに、平成８年（1997）調査の欄干橋町遺跡第Ⅴ地点では、ガラス製簪・笄の破片が 77 点も出土した（諏訪間ほか 1997・1999)。出土した陶磁器の年代から 18 世紀末～19 世紀中葉に廃棄されたと推定された。本地点は、天保３年(1832) 以降が竹本屋幸右衛門の旅籠で、飯盛女を置いて

大いに繁盛していたという。飯盛女とは、旅籠で宿泊客の食膳接待をする仲居のほか、娼婦としても働いていた。多量に出土したガラス製簪・笄は、年代的に飯盛女が置かれた時期とも重なることから、彼女らが使用していたものと推定された。

中宿町遺跡第Ⅱ地点は、平成5年（1993）に発掘調査が実施された（青木ほか 1994）。ここでは、17世紀中葉を境にこれより古い遺構の主軸が東西ー南北方向であるのに対し、17世紀中葉以降の主軸は南北軸から少し西に振れて東海道や三の丸南堀に直交するように変化していることが明らかにされた。このような屋敷割の変更理由としては、近世化工事によって中宿町の屋敷割が東海道を基準に変更された結果と推定された。

最後に、筋違橋町遺跡第Ⅲ地点は、平成14年（2002）に発掘調査が実施され、17世紀前葉の東海道と推定される道路硬化面が検出された（齋木ほか 2005）。道路は、幅 5.6m以上を測り、厚さ90cm の範囲に少なくとも六枚の砂利を硬く叩き締めた層が確認された。また、道路北側には、幅1.8m、深さ1.5mの玉石積水路が伴っていた。小田原城下で検出された初の近世東海道である。

3．小田原北条氏関連城郭

鎌倉市玉縄城跡は、永正9年(1512)に伊勢宗瑞（北条早雲）が築いた相模東部における重要拠点であった。天正18年（1590）の豊臣秀吉による小田原攻めでは、城主北条氏勝が4月21日に不戦開城した。昭和62年（1987）の玉縄城中心部南東隅における発掘調査では、堀・土塁のほか井戸・掘立柱建物跡などの居住空間も確認された（大河内 1988、大河内ほか 1994）。

山北町河村城跡は、平成8年（1996）に神奈川県指定史跡となっており、小田原北条時代には直轄の城として甲斐武田氏に対する守りを新城とともに担っていた。発掘調査は、平成元年（1989）から継続して実施され、障子堀によって区画された曲輪などが検出された城郭部や、館跡などが検出された根小屋の状況が明らかにされており、現在史跡整備が進行中である（石丸ほか 1992a・1992b・1996、安藤 1995・2004）。

相模原市津久井城跡は、甲斐武田氏の国境付近の重要な場所に位置し、16世紀には内藤氏が城主であった。豊臣秀吉による小田原攻めの際には、徳川家康によって攻撃され、6月25日までには開城したとされる。発掘調査は、公園整備を契機として平成6年（1994）から継続的に実施され、小田原北条時代の16世紀から近世初頭の17世紀前葉にかけて機能していたことが明らかとなった（近藤ほか 1999・2002・2003・2005a・2005b）。

このほか、16世紀まで機能した城郭では、藤沢市大庭城跡（寺田ほか 1985）、松田町松田城跡（杉山ほか 1987、安藤文一 1989）、三浦市新井城跡（武藤 1993・1997）、平塚市真田城跡（若林 1999、上原ほか 2000、河合ほか 2003）、伊勢原市丸山城跡（香川 1999、河合ほか 2002）などが調査された。

4．神奈川の近世遺跡

(1) 宿場町

厚木市東町二番遺跡は、近世に大山詣で賑わった旧矢倉沢往還沿いに発展した厚木宿に位置し、調査地は近世の豪商の屋敷跡にあたる（平本 1992、平本ほか 1995・1996）。ここでは、平成3年（1991）に発掘調査が実施され、16世紀の中世から近・現代までの屋敷の変遷が明らかにされた。とくに、近世に街道沿いの表側に店、奥側に土蔵が構築されたことは、宿場町の土地利用を考える上で非常に重要である。

(2) 村落跡

綾瀬市宮久保遺跡は、昭和56～59年(1981～84)に発掘調査が実施された（國平 1983、國平ほか 1988）。ここでは、オモヤ・ナヤなどの掘立柱建物

跡群と段切りを基本として、井戸・土坑・竪穴状遺構・柱穴などのいずれかの遺構が伴う９箇所の遺構群が検出された（第３図）。この遺構群は屋敷跡と推定されており、17 世紀後半～19 世紀前半の村落の変遷が明らかにされた。この成果は、その後の村落跡の発掘調査に大きな指針を与えた。

その後、清川村宮ヶ瀬遺跡群北原（№９）遺跡（市川ほか 1993）・表の屋敷遺跡（近野ほか 1993・1997）や、逗子市池子遺跡群№７地点（山本ほか 1997）などからも近世村落が検出された。

(3) 寺院跡

清川村宮ヶ瀬遺跡群北原（№９）遺跡内長福寺址では、四面の遺構面からなる近世の寺院跡が検出された（市川ほか 1991・1993）。ここでは、第１面から検出された遺構を基にして 18 世紀後半～19 世紀の伽藍配置復元が試みられた。また、第２面直下からは、梵鐘鋳造遺構が検出された（第４図）。18 世紀前半の陶磁器が出土したことから、『新編相模風土記稿』にある元文５年（1740）銘の梵鐘をこの地で鋳造した可能性が高いという。近世に属する梵鐘鋳造遺構の検出は、全国的にも非常に珍しい。

(4) 生産遺跡

まず、炭を生産するための炭焼窯は、清川村宮ヶ瀬遺跡群のナラサス北遺跡（上田ほか 1991）で 36 基、北原（№９）遺跡（市川ほか 1993）で 15 基がそれぞれ検出された。いずれも、斜面地をトンネル状に掘った横穴式土窯の形態である。炭は、重要な燃料として庶民の生活必需品であったが、これだけの数の炭焼窯が存在したことは炭を商品として流通させていたことを窺わせよう。

次に、酒造関連遺構と推定される竈跡は、清川村宮ヶ瀬遺跡群馬場（№６）遺跡で検出された（鈴木ほか 1995）。18 世紀後半～19 世紀代の竈跡と考えられる 50 号土坑は、長さ 2.8m、幅 1.8mを測り、近世に酒造が盛んであった兵庫県伊丹市伊丹郷町遺跡の酒米を蒸すための大形竈との類似性が指摘された（小長谷ほか 1996）。また、相模原市津久井城根小屋地区遺跡群でも長さ 4.3m、幅 3.6mを測る大形竈が検出された（池田ほか 2004）。18 世紀後半以降と推定される４号竈跡は、円形の竈（燃焼室）に方形の焚口を伴う半地下式の形態で、同じく伊丹郷町遺跡の大形竈と類似する（第５図）。さらに、周辺から検出された特殊竪穴・井戸・土蔵造り建物跡・礎石建物跡によって酒蔵を構成していた可能性が指摘された。

海老名市四大縄遺跡では、中・近世の水田跡が発掘調査された（瀬田 1996、齋木ほか 1997・1998）。水田跡は、第１～３・４Ａ・４Ｂ面の総数五面が検出され、東西道路（大畦畔）によって形成された大区画の中に畦畔で区割された水田跡が細かく分布し、第２面では田植時の横歩きした足跡と推定される窪みも検出された。水田跡の時期は、第１面が 18 世紀～大正末、第２面が 17 世紀、第３面が中世後期～近世初頭と推定されている。

最後に、茅ヶ崎市上ノ町・広町遺跡では、焼継された陶磁器が多量に出土した（冨永ほか 1996、大村ほか 1997）。焼継とは、白玉と呼ばれるガラス質の接着剤を熱で溶かし破損した陶磁器を修復する技法で、18 世紀末以降に普及した。焼継師が陶磁器を預かって修復するため、焼継された陶磁器の高台内には所有者の地名と人名が朱書きされている（第６図）。このため、同一名の焼継資料が集中して出土することが多いが、上ノ町・広町遺跡では非常に多くの種類の地名と人名が確認された。このことは、焼継師が預かって修復した陶磁器を何らかの理由で作業場の周辺に廃棄したと推定される。商売の活動範囲など焼継師の実像にせまる上で貴重な資料である。

(5) 墓地

墓地の発掘調査は、横須賀市向井将監正方夫妻墓がある（中三川 2001、中三川ほか 2005）。知行

2,000 石の旗本であった向井将監正方は延宝２年（1674）没、その妻は寛文 10 年（1670）没という埋葬人物と没年が特定できる貴重な事例である。夫妻の墓は、輝石安山岩製の墓標の下に甕棺を木槨内に納めた木槨甕棺墓であり、この形態の出現期を示す資料として重要である。副葬品としては、正方墓で日本刀・煙管、正方室墓で漆椀・磁器碗・寛永通宝７枚からなる六道銭などが注目される。

また、逗子市池子遺跡群第７地点北側調査区では、中世～近代の墓地が発掘調査された（山本ほか 1997）。15 世紀代の墓坑１基のほかは、17 世紀後半～近代の墓坑 51 基が検出された。このうち、近世墓については、方形と長方形を呈する平面形は新しい時期ほど方形優位から長方形優位に変化、18 世紀後半以降は墓坑が大形化、木棺は遅くとも 19 世紀代に使用、火葬は 18～19 世紀代に行われた可能性、などが指摘された。

秦野市東開戸遺跡では、積石塚が発掘調査された（安藤 1992）。この積石塚は、直径約７m、幅約１m、深さ 60 cmを測る周溝が円形に巡り、その内部に高さ約 1.6mの積石がなされ、積石下部の中央付近には小片化した焼人骨が検出された。宝永４年（1707）の富士山噴火に伴う宝永スコリアが周溝内に堆積していたことから、宝永４年（1707）以前の構築であることが判明した。

(6) 街道

街道の発掘調査としては、箱根町箱根旧街道で昭和 55・63 年（1980・1988）に試掘調査が実施された（伊藤 1984・1990、伊藤ほか 1987）。このうち昭和 63 年（1988）の試掘調査では、国指定史跡を含む 15 箇所のトレンチのうち 12 箇所から石畳が検出され、石畳が思いのほか遺存していることが明らかとなった。

このほか、小田原城下筋違橋町遺跡第Ⅲ地点で 17 世紀前葉の旧東海道の道路硬化面が検出されたことは、すでに紹介した（齋木ほか 2005）。

また、旧東海道には、慶長９年（1604）に江戸日本橋を起点とした一里塚が整備されたが、箱根町箱根旧街道畑宿一里塚では平成 10 年（1998）に発掘調査が実施された（伊藤ほか 1999、伊藤 1999）。その結果、二基の一里塚は、直径約 30 尺（９m）の塚の下部周囲に石を円形に積み、その内部に礫を充填した上で塚全体に盛土していたことが判明した。このように、一里塚の構造を明らかにし得た貴重な発掘調査となった。

５．現状と今後の課題

以上のように、神奈川における近世の考古学的成果について、この 30 年を振り返ってみた。最後に、近世遺跡が直面している現状と今後の課題を検討し、おわりとしたい。

神奈川における近世遺跡の発掘調査は、1980 年代後半から急速に進展を遂げた。それは、清川村宮ヶ瀬遺跡群や逗子市池子遺跡群に代表されるような大規模開発に伴う発掘調査によって、村落跡・寺院跡・生産遺跡・墓地などといった様々な性格の資料が蓄積されたためである。

しかし、平成 10 年（1998）に文化庁が提言した発掘調査対象としての時代は、おおむね中世までは対象とし、近世遺跡は地域において必要なものを対象とすることができると規定された。これを受けて、平成 11 年（1999）神奈川県でもほぼ同様な取扱基準が示された。これにより、近世遺跡は、必ずしも発掘調査する必要がなくなったことになり、近世遺跡の将来は決して良好とはいえない。

このような現状を打破するためには、近世遺跡を地域に欠かせない歴史的資料となるよう、地域史への位置付けをより一層進めることが要求されている。これには、考古学的手法だけでなく、文献・地籍図などの史料も加えて近世遺跡を総合的に検討する方法が今後さらに求められよう。近世遺跡は、今重要な転機を迎えているといえよう。

引用文献

青木豊ほか　1994『小田原城下中宿町遺跡第Ⅱ地点』

安藤文一　1989『松田城址』

安藤文一　1992「秦野市東開戸遺跡の調査」『第 16 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

安藤文一　1995「山北町河村城関連遺跡」『第 19 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

安藤文一　2004「山北町県史跡河村城跡」『第 28 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

池田治ほか　2004『津久井城根小屋地区遺跡群』かながわ考古学財団調査報告 166

石丸熙ほか　1992 a『河村城跡』

石丸熙ほか　1992 b「山北町河村城跡の調査」『第 16 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

石丸熙ほか　1996『河村城関連遺跡』

市川正史ほか　1991「愛甲郡清川村宮ヶ瀬遺跡群北原（No.９）遺跡長福寺址」『第 15 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

市川正史ほか　1993『宮ヶ瀬遺跡群』Ⅲ、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 21

伊藤潤　1984「箱根旧街道石畳埋蔵確認調査報告」『箱根町文化財研究紀要』第 15 号

伊藤潤　1990「箱根旧街道Ⅱ」『箱根町文化財研究紀要』第 20 号

伊藤潤　1999「箱根町箱根旧街道畑宿一里塚」『第 23 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

伊藤潤ほか　1987「箱根旧街道」『箱根町文化財研究紀要』第 18 号

伊藤潤ほか　1999『箱根旧街道畑宿一里塚保存整備事業報告書』

上田薫ほか　1991『宮ヶ瀬遺跡群』Ⅱ、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 21

上原正人ほか　2000「平塚市真田・北金目遺跡群」『第 24 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

大河内勉　1988「鎌倉市玉縄城跡の調査」『第 12 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

大河内勉ほか　1994『玉縄城跡発掘調査報告書』

大島慎一　1993『史跡小田原城跡二の丸中堀』Ⅰ、小田原市文化財調査報告書第 45 集

大島慎一　1994『史跡小田原城跡二の丸中堀』Ⅱ、小田原市文化財調査報告書第 48 集

大島慎一　1995『史跡小田原城跡二の丸中堀』Ⅲ、小田原市文化財調査報告書第 57 集

大島慎一　1999『史跡小田原城跡二の丸御殿跡試掘調査の概要』小田原市文化財調査報告書第 76 集

大島慎一　2003「小田原市史跡小田原城跡馬屋曲輪」『第９回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

大村浩司ほか　1997『上ノ町・広町遺跡』

小田原市教育委員会　1972『第一次小田原城址発掘調査について』

小長谷正治ほか　1996「伊丹郷町の酒造業」『関西近世考古学研究』Ⅳ

香川達郎　1999「伊勢原市成瀬第二地区遺跡群」『第 23 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

神奈川県立博物館　1987『鍋島一藩窯から現代まで』

金子皓彦　1980 a「小田原市小田原城評定所曲輪跡の調査」『第４回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

金子皓彦　1980 b『小田原城香沼屋敷』

金子皓彦ほか　1977「小田原市小田原城香沼屋敷址の調査」『第１回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

河合英夫ほか　2002『成瀬第二地区遺跡群下糟屋Ｃ地区第１地点，下糟屋Ｄ地区，丸山Ｅ地区発掘調査報告書』

河合英夫ほか　2003『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書』４

國平健三　1983「綾瀬市宮久保遺跡の調査」『第７回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

國平健三夫ほか　1988『宮久保遺跡』Ⅱ、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 15

小林義典　2002『小田原城三の丸藩校集成館跡第Ⅲ・第Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第 100 集

小林義典　2005『小田原城三の丸元蔵堀第Ⅶ地点』

小林義典ほか　1995『小田原城三の丸東堀第２地点発掘調査報告書』

近藤英夫ほか　1999「津久井町津久井城址御屋敷跡」『第 23 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

近藤英夫ほか　2002「津久井城跡」『第 26 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

近藤英夫ほか　2003『津久井城の調査』

近藤英夫ほか　2005 a「津久井町津久井城跡」『第 29 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

近藤英夫ほか　2005 b『津久井城の調査２』

齋木秀雄ほか　1997『四大縄遺跡』

齋木秀雄ほか　1998『四大縄遺跡』

齋木秀雄ほか　2005『神奈川県小田原市筋違橋町遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』

佐々木健策ほか　2002『小田原城三の丸東堀第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ地点』小田原市文化財調査報告書第 93 集

佐々木健策ほか　2005『小田原城三の丸東堀第Ⅶ地点』小田原市文化財調査報告書第 129 集

宍戸信悟ほか　1999『上粕屋・上尾崎遺跡（No.10）上粕屋・〆引北遺跡（No.11）上粕屋・〆引西遺跡（No.12 東）』かながわ考古学財団調査報告 56

杉山幾一ほか　1987「松田城址の調査」『第 11 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

鈴木次郎ほか　1995『宮ヶ瀬遺跡群』Ⅴ、かながわ考古学財団調査報告４

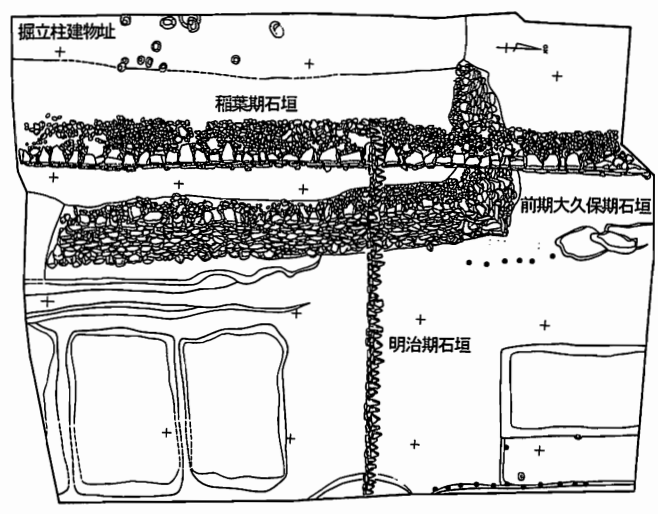
諏訪間順　1987「小田原城三の丸（大蓮寺排水路改良工事内）の調査」『第 11 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

諏訪間順　1988「小田原城下・欄干橋町遺跡（外郎邸）の調査」『第 12 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

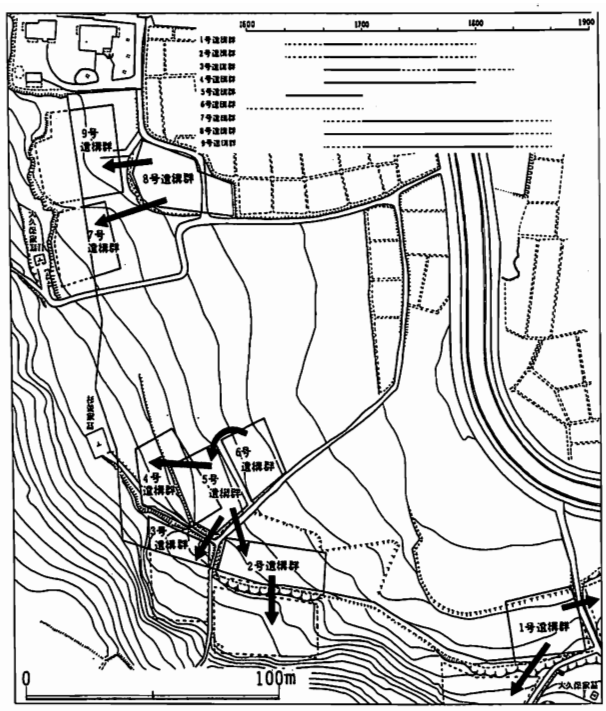
諏訪間順　2005「史跡小田原城跡馬出門跡」『平成 17 年小田

原市遺跡調査発表会発表要旨』
諏訪間順ほか　1992『小田原城三の丸箱根口跡』小田原市文化財調査報告書第37集
諏訪間順ほか　1993『小田原城下欄干橋町遺跡』小田原市文化財調査報告書第42集
諏訪間順ほか　1997「小田原市小田原城下町遺跡」『第21回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
諏訪間順ほか　1999『小田原城下欄干橋町遺跡第Ⅴ地点』小田原市文化財調査報告書第71集
瀬田哲夫　1996「海老名市№47遺跡」『第20回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
近野正幸ほか　1993「清川村宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷遺跡の調査」『第17回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
近野正幸ほか　1997『宮ヶ瀬遺跡群』XⅢ、かながわ考古学財団調査報告19
塚田順正ほか　1984『史跡小田原城跡城米曲輪』小田原市文化財調査報告書第15集
塚田順正ほか　1985「史跡小田原城跡二の丸中堀の調査」『第9回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
塚田順正ほか　1989「史跡小田原城跡二の丸中堀の調査」『第13回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
塚田順正ほか　1997「史跡小田原城跡二の丸住吉堀の調査・整備事業」『第21回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
寺田兼方ほか　1985「藤沢市大庭城址公園内遺跡の調査」『第9回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
戸田哲也ほか　1994「小田原市本町小田原城三の丸堀の調査」『第18回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
戸田哲也ほか　1995「小田原市三の丸小学校内遺跡（小田原城三の丸・藩校集成館跡）」『第19回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
冨永富士雄ほか　1996「茅ヶ崎市西久保遺跡群」『第20回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
中川成夫・加藤晋平　1969「近世考古学の提唱」『日本考古学協会第36回総会研究発表要旨』
中三川昇　2001「横須賀市向井将監正方夫妻の墓」『第25回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
中三川昇ほか　2005『向井将監正方夫妻墓調査報告』横須賀市文化財調査報告書第41集
平本元一　1992「厚木市東町遺跡」『第16回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
平本元一ほか　1995『東町二番』Ⅰ
平本元一ほか　1996『東町二番』Ⅱ
武藤康弘　1993「三浦市新井城址」『第17回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
武藤康弘　1997「新井城跡」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
山口剛志　1996「小田原城下・欄干橋町遺跡第Ⅳ地点」『第20回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
山口剛志　2002「小田原城総構伝肇寺西第Ⅰ地点」『第26回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
山口剛志ほか　1998『小田原城下欄干橋町遺跡第Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第67集
山口剛志ほか　2004『小田原城総構伝肇寺西第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第118集
山本暉久ほか　1997『池子遺跡群』Ⅳ、かながわ考古学財団調査報告26
吉田浩明　2005「小田原市小田原城三の丸元蔵堀第Ⅶ地点」『第29回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
若林勝司　1999「平塚市真田・北金目遺跡群」『第23回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

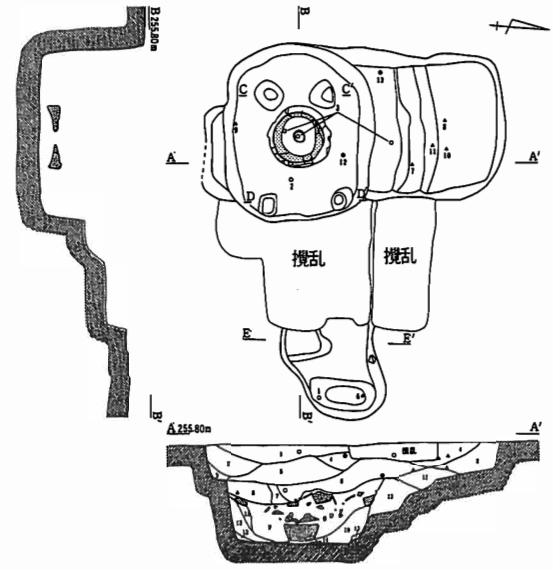
第１図　小田原城三の丸藩校集成館跡第Ⅲ地点



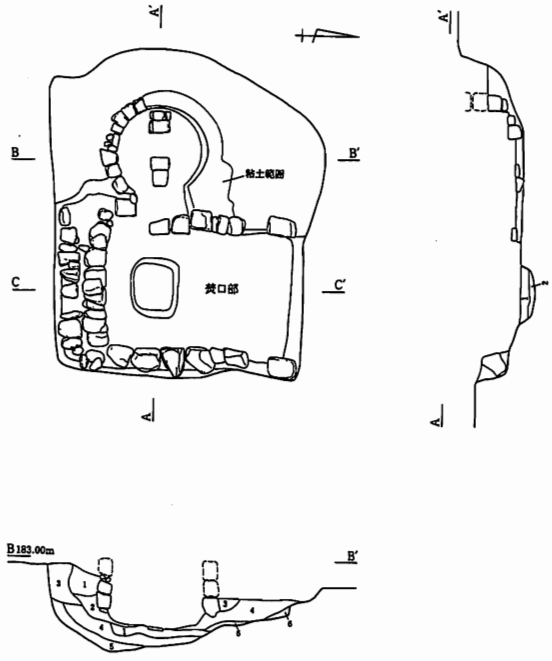
第２図　小田原城三の丸東堀第Ⅱ地点遺構全体図(1/300)(小林ほか 1995)



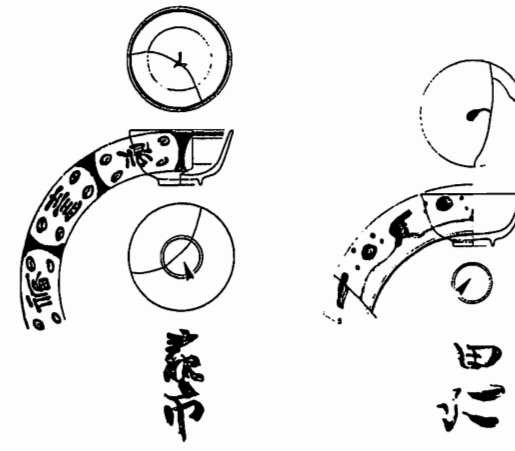
第３図　宮久保遺跡近世遺構群変遷図(1/3,000)(國平ほか 1988)



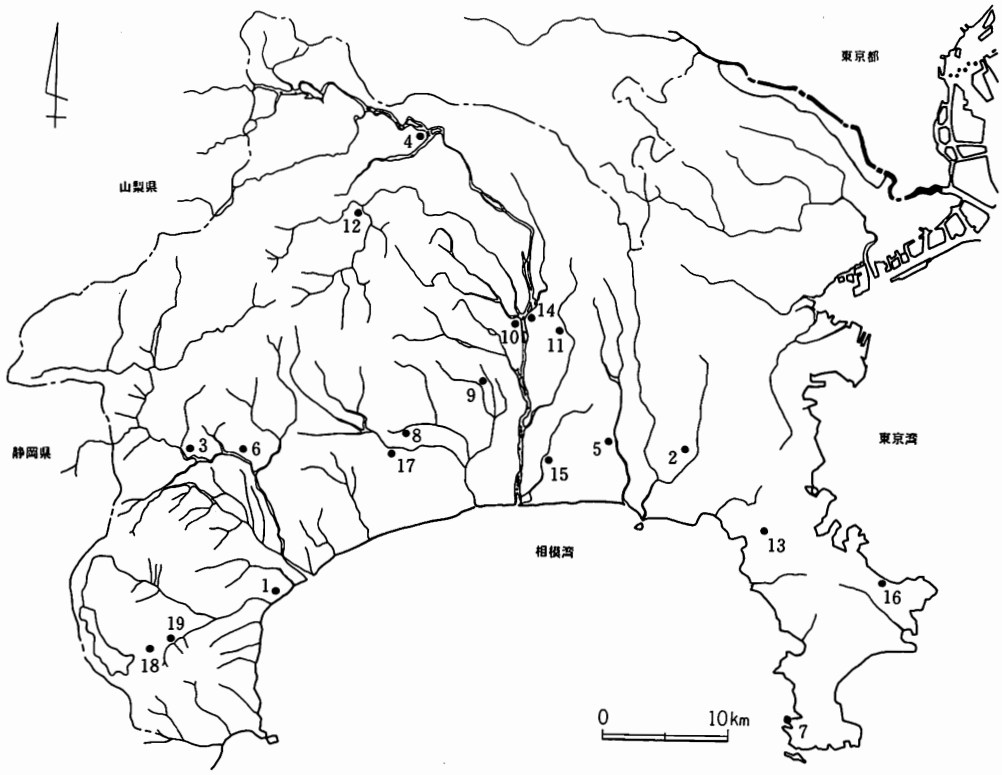
第４図　宮ヶ瀬遺跡群北原（№９）遺跡内長福寺址梵鐘鋳造遺構(1/100)(市川ほか 1991)



第５図　津久井城根小屋地区遺跡群４号竈(1/100)(池田ほか 2004)



第６図　上ノ町・広町遺跡出土焼継資料(1/6)(大村ほか 1997)



第７図　遺跡の位置

1．小田原市小田原城関連遺跡
2．鎌倉市玉縄城跡
3．山北町河村城跡
4．相模原市津久井城跡・津久井城根小屋地区遺跡群
5．藤沢市大庭城跡
6．松田町松田城跡
7．三浦市新井城跡
8．平塚市真田城跡
9．伊勢原市丸山城跡
10．厚木市東町二番遺跡
11．綾瀬市宮久保遺跡
12．清川村宮ヶ瀬遺跡群
13．逗子市池子遺跡群
14．海老名市四大縄遺跡
15．茅ヶ崎市上ノ町・広町遺跡
16．横須賀市向井将監正方夫妻墓
17．秦野市東開戸遺跡
18．箱根町箱根旧街道
19．箱根町箱根旧街道畑宿一里塚

テーマ発表　神奈川の遺跡調査をめぐる30年　中世

―中世の遺跡と調査の歩み―

小林（こばやし）　康幸（やすゆき）

1．はじめに

この30年間（1977～2006：昭和52年～平成18年）における神奈川県下での中世の遺跡調査及び考古学研究には非常に大きな発展があり、中世の遺跡や遺物が私たちに与えてくれた情報がその歴史像そのものを大きく塗り替えたと言っても過言ではない。

ここではこの30年間に神奈川県遺跡調査・研究発表会において取り上げられた中世の遺跡を再度、通観するとともに、この間の中世考古学の研究動向についても概観してみたい。

2．遺跡調査・研究発表会で取り上げられた調査

過去29回の遺跡調査・研究発表会で取り上げられた中世の遺跡は48件（うち鎌倉市内の中世遺跡は30件）で、これは全発表（報告）遺跡353件の13.6%（8.4%）にあたる。

鎌倉は中世前期（鎌倉時代）に日本の政権所在地であったことから、神奈川県内のみならず全国でも屈指の中世遺跡が調査されている地域である。以下、遺跡の種類（性格）ごとに主要な遺跡を瞥見してみることとしたい。

（1）都市遺跡

南御門遺跡（鎌倉市：第5回／昭和56年）、千葉地遺跡（鎌倉市：第6回／昭和57年）、蔵屋敷遺跡（鎌倉市：第7回／昭和58年）、長谷小路南遺跡（鎌倉市：第10回／昭和61年）、下馬周辺遺跡（鎌倉市：第14回／平成元年）、今小路西遺跡（鎌倉市：第16回／平成3年）、大倉幕府周辺遺跡群（鎌倉市：第16回／平成3年）、若宮大路周辺遺跡群（鎌倉市：第18回／平成6年）、北条小町邸跡（鎌倉市：第20回／平成8年）、若宮大路周辺遺跡群（鎌倉市：第22回／平成10年）、宇津宮辻子幕府跡（鎌倉市：第22回／平成10年）、北条小町邸跡（鎌倉市：第24回／平成12年）

（2）城館跡・居館跡

新作小高台遺跡（川崎市：第4回・昭和55年）、宮久保遺跡（綾瀬市：第8回／昭和59年）、今小路西遺跡（鎌倉市：第10回／昭和61年）、玉縄城跡（鎌倉市：第12回／昭和63年）、河村城跡（山北町：第16・28回・平成3・16年）、河村城跡関連遺跡（山北町：第19回／平成7年）、東田原中丸遺跡（秦野市：第25回／平成13年）、津久井城跡（津久井町：第26・29回・平成14・17年）

（3）集落遺跡

西久保上ノ町遺跡（茅ヶ崎市：第8回／昭和59年）

（4）寺院跡・神社跡

極楽寺旧境内遺跡（第4回／昭和55年）、裏八幡西谷遺跡（鎌倉市：第6回／昭和57年）、山王堂遺跡（鎌倉市：第11回／昭和62年）、金沢文庫遺跡（横浜市：第12回／昭和62年）、史跡永福寺跡（鎌倉市：第13・19回／昭和63・平成7年）、史跡東勝寺跡（鎌倉市：第22回／平成10年）、大芝遺跡（箱根町：第24回・平成12年）、鎌倉大仏周辺遺跡（鎌倉市：第25回／平成13年）、史跡建長寺境内（鎌倉市：第25回／平成13年）、史跡称名寺境内旧伽藍跡（横浜市：第26回／平成14年）、無量寺跡（鎌倉市：第27回／平成15年）、五合桝遺跡・仏法寺跡（鎌倉市：第27回／平成15年）、

北条義時法華堂跡（鎌倉市：第29回／平成17年）

（5）墓地遺跡等

上行寺東やぐら群（横浜市：第9回／昭和60年）、由比ヶ浜中世集団墓地遺跡（鎌倉市：第11・15回・昭和62・平成2年）、上台の山遺跡（横浜市：第12回・昭和63年）、元箱根石仏群（箱根町：第15回／平成2年）、由比ガ浜南遺跡（鎌倉市：第21回／平成9年）

（6）その他

史跡旧相模川橋脚（茅ヶ崎市：第26回・平成14年）

以上に列記した調査がこの30年間に実施された中世遺跡の調査である。1980年代に入り、全国的にも中世の遺跡が発掘調査の対象と認知され、確実に市民権をえたと言えよう。ただ単に調査の対象になっただけではなく、顕著な調査成果が注目され、大きな遺跡の保存運動にまで発展した事例として上行寺東やぐら群（横浜市）、今小路西遺跡（鎌倉市）はまだ記憶に新しいところである。

3．中世考古学の研究動向

この30年間で中世遺跡の発掘調査事例が増加したことによって、中世考古学の研究も確実に進展をみた。

一例として、神奈川県考古学会の会誌『考古論叢神奈河』において中世を対象とした研究がどれくらい発表されたかを見てみると、既刊14冊の会誌に掲載された全77本の論文等のなかで9本（11.7%）にすぎない。この数字だけを見るとまだまだ研究は低調であるとみられかねないが、県内だけに限っても各研究団体が発行する学術雑誌にはかなりの数の中世を扱った研究論文が掲載されている。

神奈川県考古学会が主催した考古学講座では平成13年度に「かながわの中世—鎌倉から小田原へ—」が、また平成17年度には「神奈川の城館跡」がそれぞれ開催され、タイムリーに研究の到達点が示されている。

土器、陶磁器に関する研究としては、神奈川考古同人会が1986（昭和61）年に古代末期～中世における在地系土器の諸問題をテーマにシンポジウムを開催している。全国的にみても当該期を対象とした土器編年を扱ったシンポジウムは、当時、画期的なものであり多くの参加者のあったことを記憶している。食器について取り上げた服部実喜氏による一連の研究は、南武蔵及び相模を地域的な範囲として中世全般を通じた土器・陶磁器の年代観と機種構成を明らかにしている。

神奈川県立埋蔵文化財センターとかながわ考古財団のプロジェクト研究では、神奈川県下の中世遺構、かわらけ、やぐらの集成がそれぞれ行われている。調査件数の増加に裏付けられてなされた基礎的な集成作業として評価できよう。

4．おわりに

これまでの神奈川県遺跡調査・研究発表会で取り上げられた中世遺跡の調査を振り返って、30年間の調査・研究をごく簡単ではあるが検証してみた。これらは中世遺跡に対する調査・研究のごく一部でしかなく、ここに紹介しきれなかった多くの成果が数多くあることは言うまでもない。

鎌倉市内に突出して多かった中世遺跡の調査も県内に広くみられるようになり、各地域の歴史を考える上で重要な成果を提示している調査も少なくない。さらなる調査・研究の発展が望まれるところである

〔引用・参考文献〕

極楽寺旧境内遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会 1980『極楽寺旧境内遺跡』

今小路西遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会　1990

『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』

今小路西遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会　1993『今小路西遺跡（御成小学校内）第５次発掘調査概報』

鎌倉市教育委員会　1993「由比ガ浜中世集団墓地遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』９・第１分冊

鎌倉市教育委員会　1994「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10・第３分冊

鎌倉市教育委員会　1988『東勝寺跡―第３・４次遺構確認調査報告書―』

鎌倉市教育委員会　2001・2002『鎌倉大仏周辺発掘調査報告書』

鎌倉市教育委員会　2002『史跡永福寺跡発掘調査報告書―遺物編・考察編―』

茅ヶ崎市教育委員会　2002『国指定史跡旧相模川橋脚』

上行寺東やぐら群遺跡発掘調査団　2002『上行寺東やぐら群遺跡発掘調査報告書』

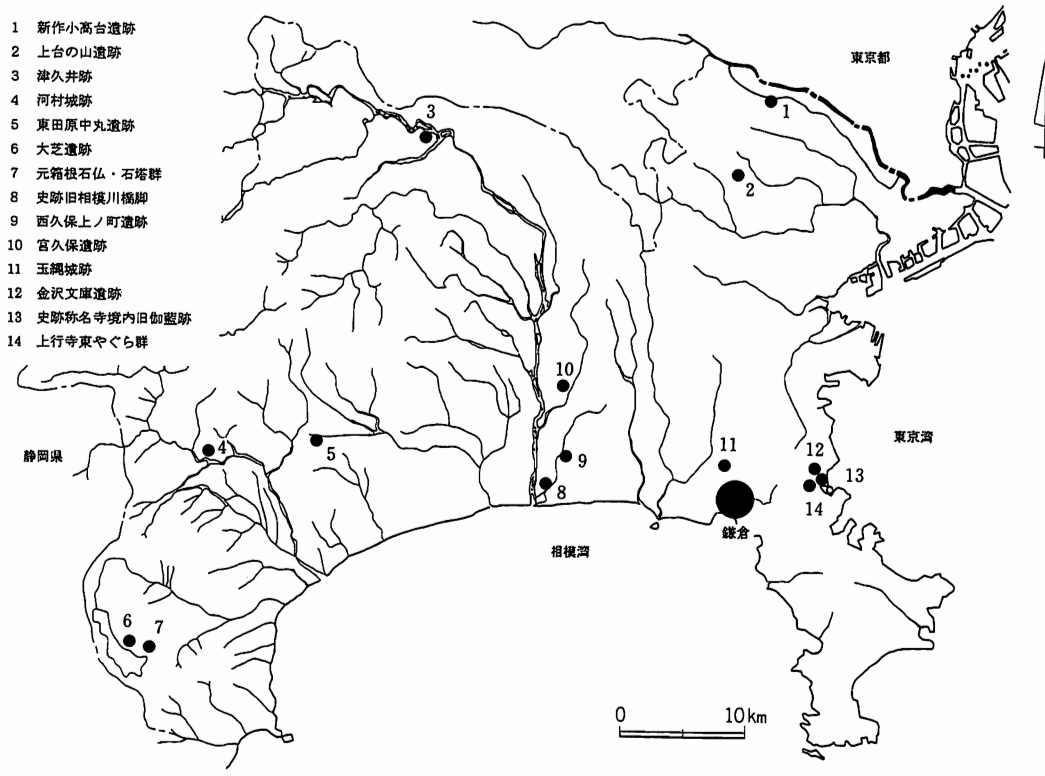
横浜市教育委員会　2003『史跡称名寺境内旧伽藍跡確認調査報告書』

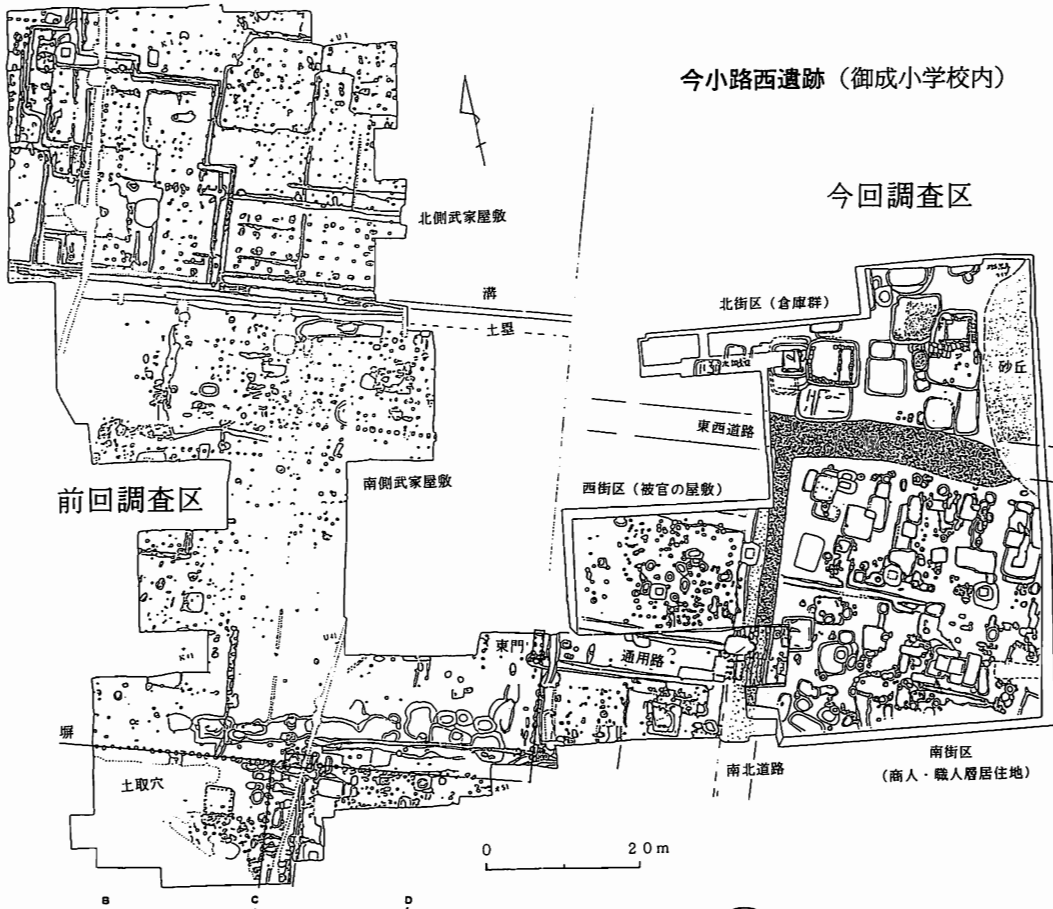
服部実喜　1992・2002「南武蔵・相模における中世の食器様相（１）～（５）」『神奈川考古』第 28・30・31・32・34 号

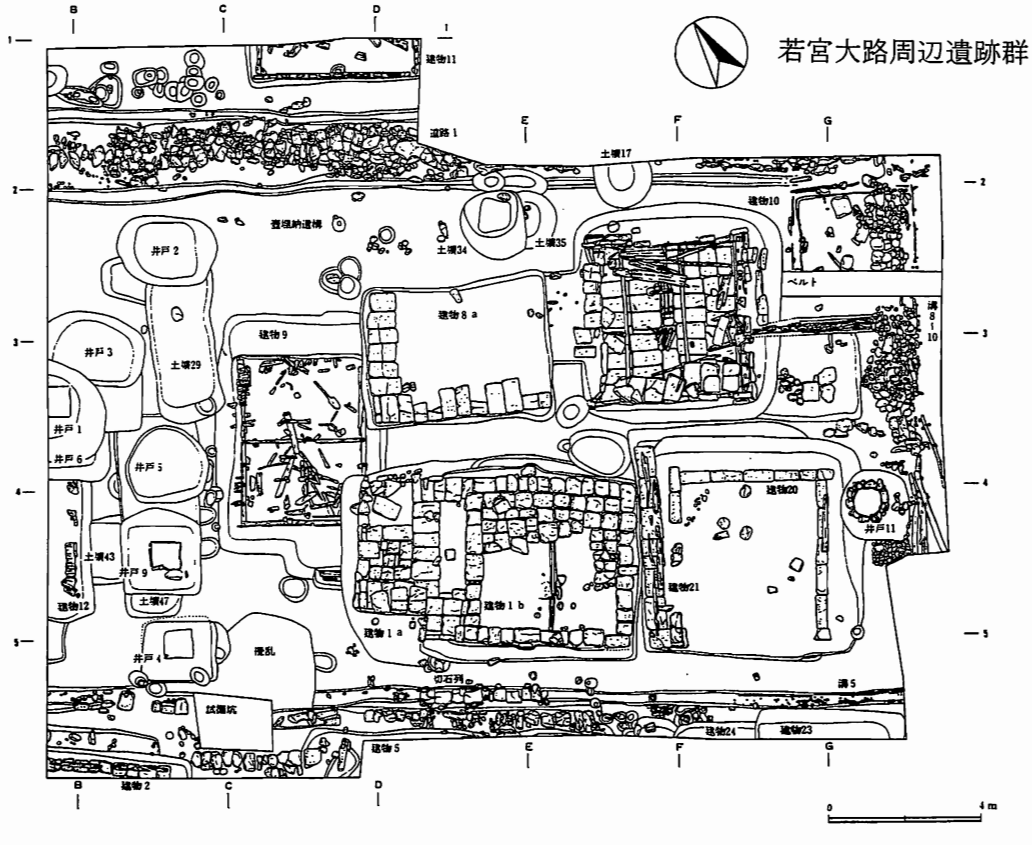
神奈川県立埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団　1996「かながわ県下における中世遺構の研究（２）」『研究紀要１・かながわの考古学』

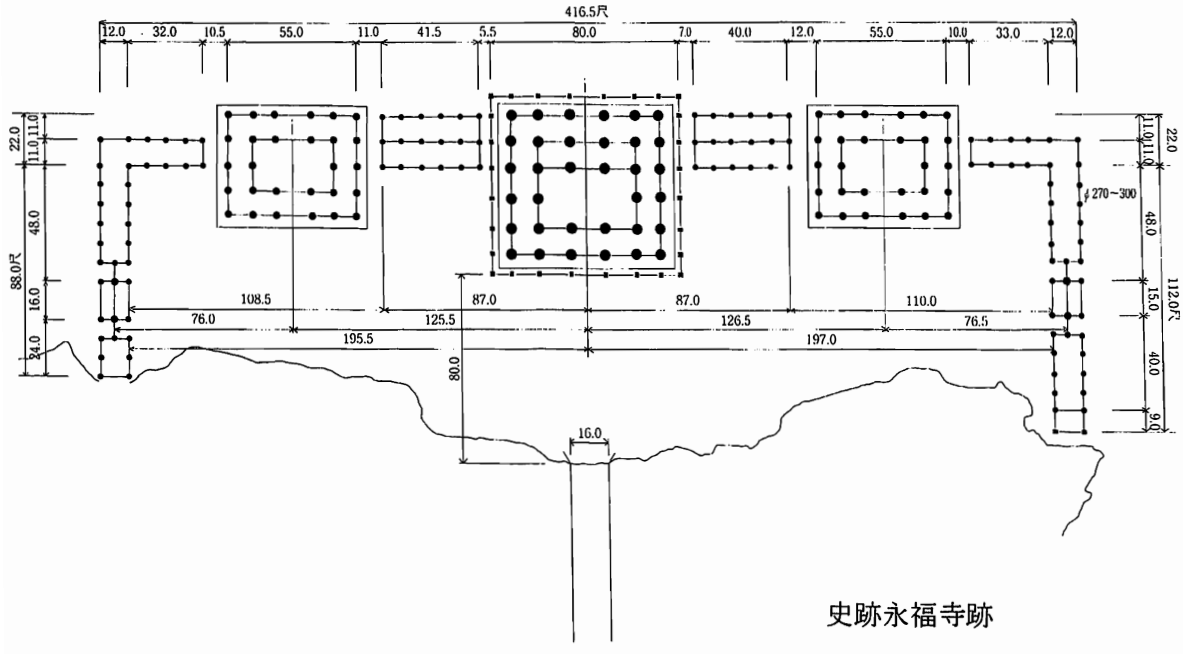
神奈川県立埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団　1997～2002「神奈川県内の「かわらけ」集成（１）～（６）」『研究紀要２～７・かながわの考古学』

かながわ考古学財団　2003～2006「神奈川県内の「やぐら」集成（１）～（４）」『研究紀要８～11・かながわの考古学』

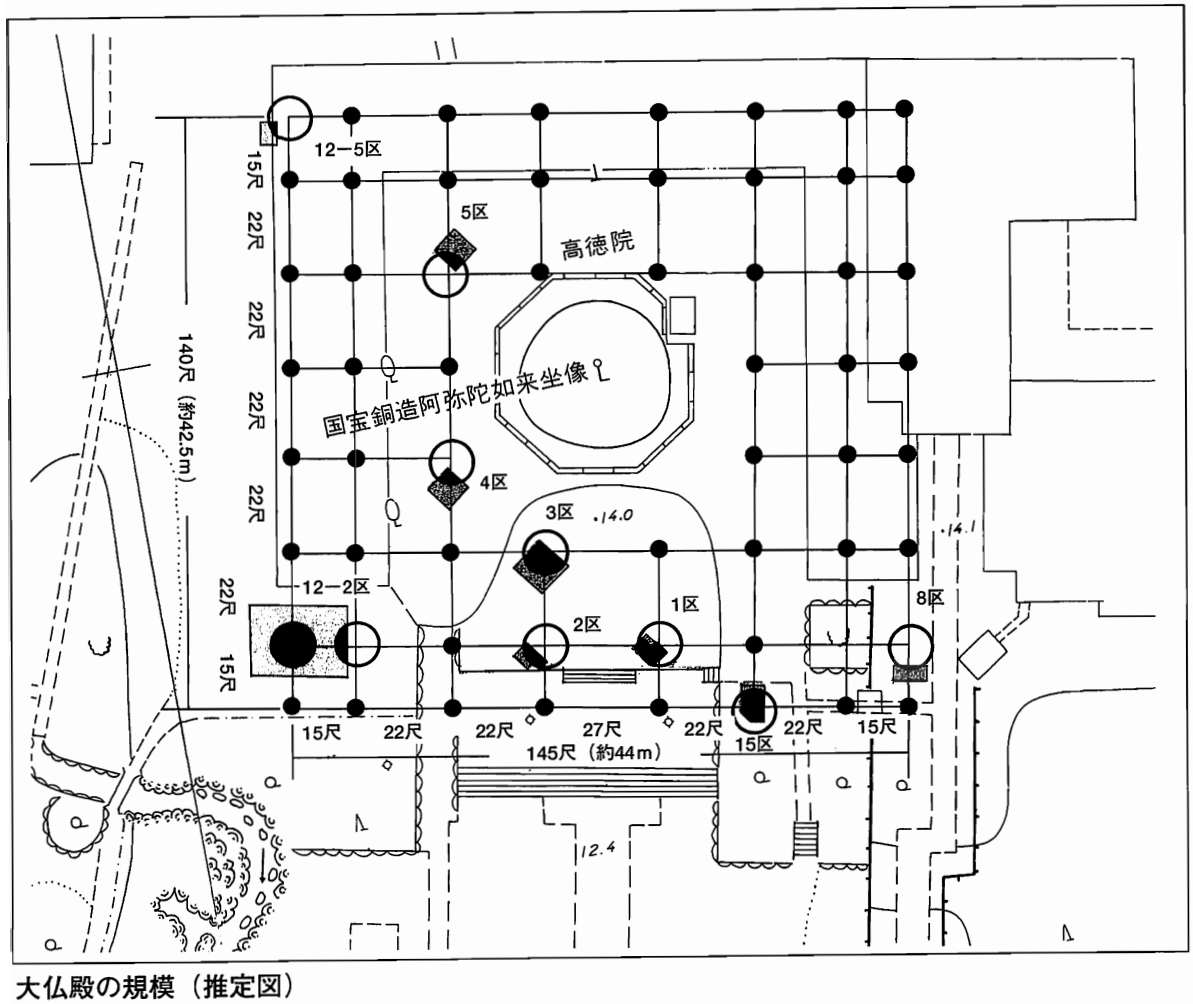



今小路西遺跡（御成小学校内）
今回調査区
北側武家屋敷
溝
土塁
北街区（倉庫群）
砂丘
東西道路
前回調査区
南側武家屋敷
西街区（被官の屋敷）
東門
通用路
塀
土取穴
南北道路
南街区
（商人・職人層居住地）
0
20m

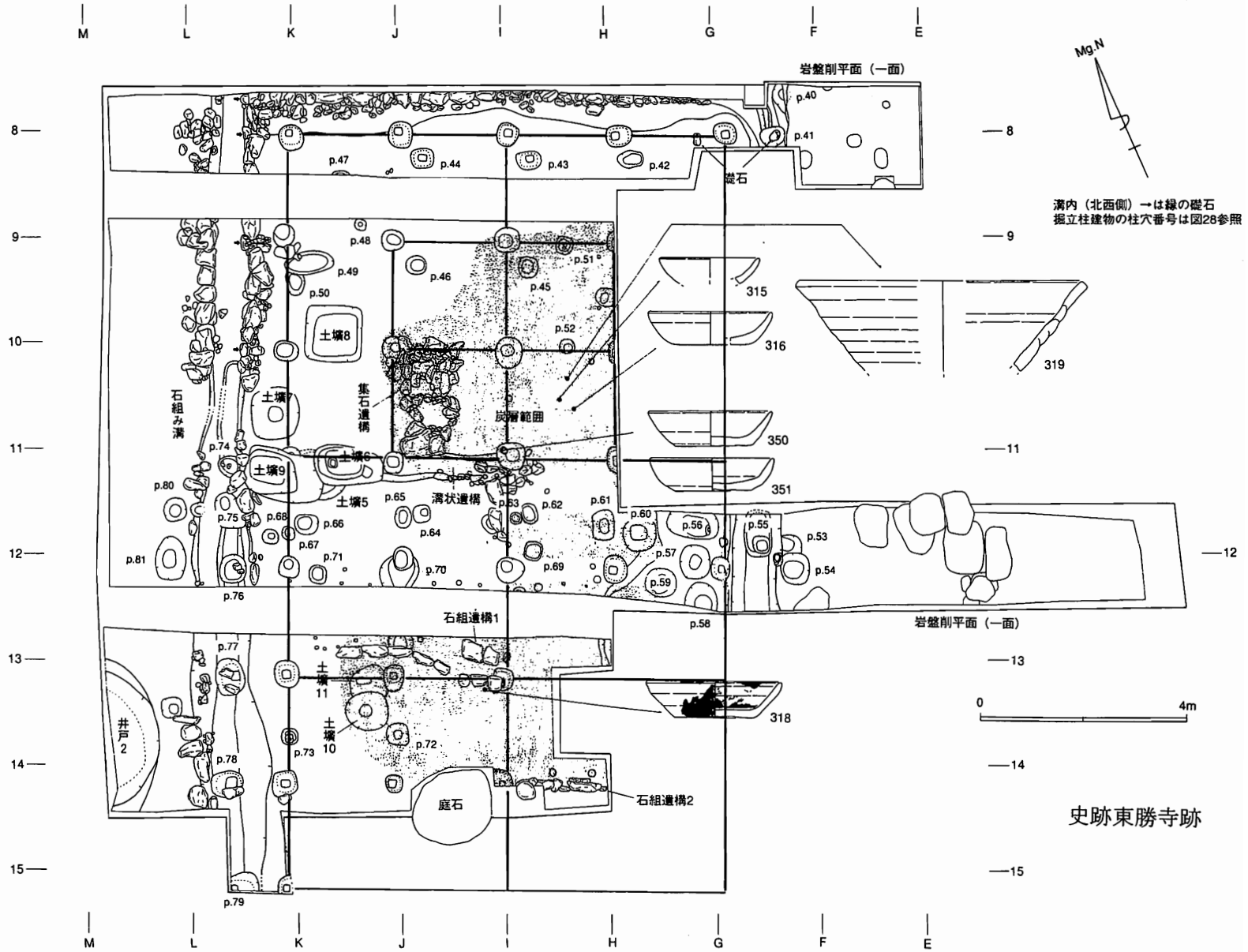

若宮大路周辺遺跡群
建物11
道路1
土壙17
建物10
井戸2
土壙34
土壙35
ベルト
建物8 a
井戸3
土壙29
建物9
井戸1
井戸6
井戸5
建物20
井戸11
土壙43
井戸9
土壙47
建物12
建物21
建物1 b
建物1 a
井戸4
撹乱
切石列
溝5
試掘坑
建物24
建物23
建物5
建物2
0
4m



史跡永福寺跡

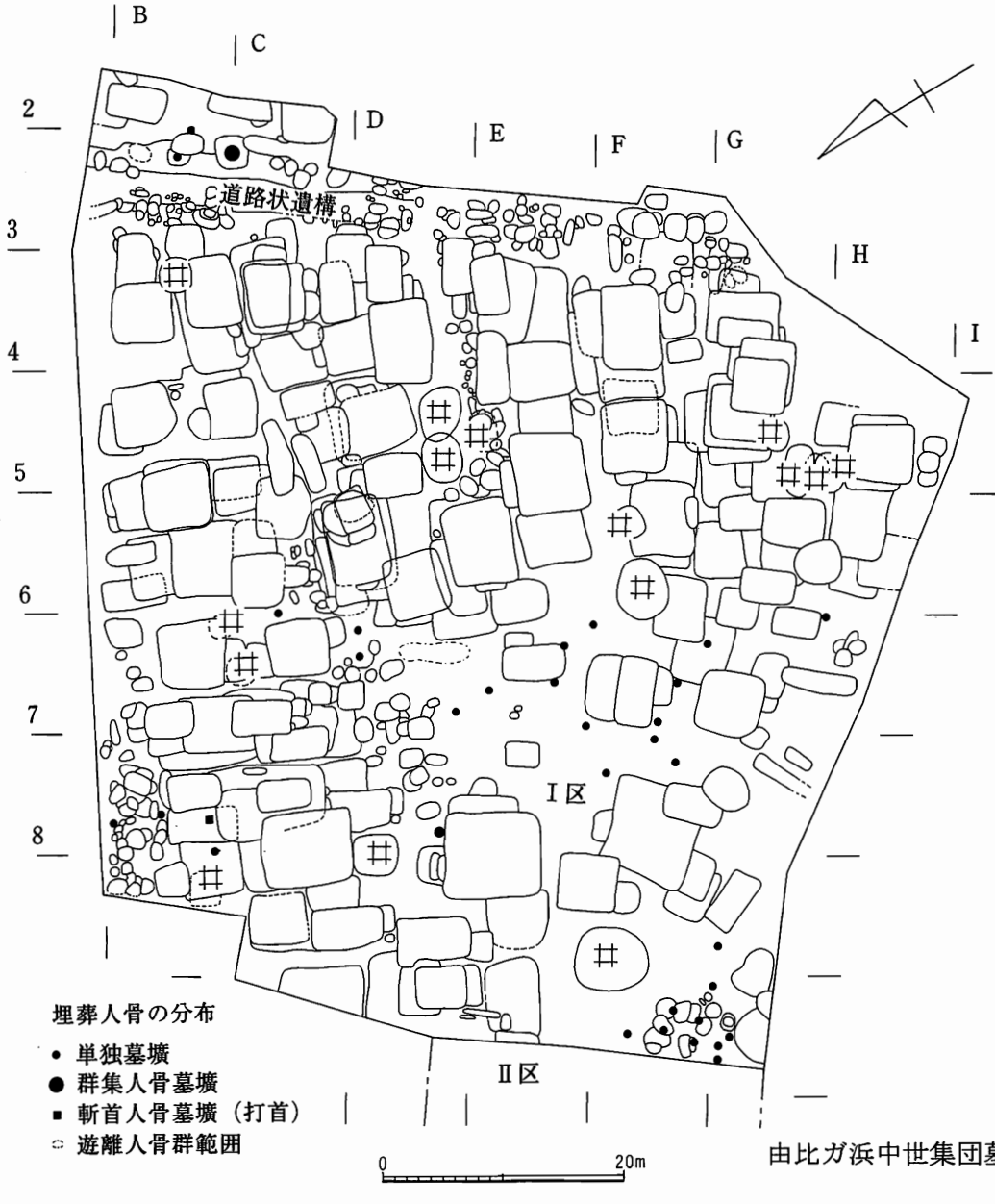


大仏殿の規模（推定図）


M
L
K
J
I
H
G
F
E
8
9
10
11
12
13
14
15
Mg.N
岩盤削平面（一面）
礎石
溝内（北西側）→は縁の礎石
掘立柱建物の柱穴番号は図28参照
p.40
p.41
p.42
p.43
p.44
p.45
p.46
p.47
p.48
p.49
p.50
p.51
p.52
p.53
p.54
p.55
p.56
p.57
p.58
p.59
p.60
p.61
p.62
p.63
p.64
p.65
p.66
p.67
p.68
p.69
p.70
p.71
p.72
p.73
p.74
p.75
p.76
p.77
p.78
p.79
p.80
p.81
315
316
319
350
351
318
土壙8
土壙7
土壙6
土壙5
土壙9
土壙11
土壙10
集石遺構
炭層範囲
溝状遺構
石組み溝
石組遺構1
石組遺構2
井戸2
庭石
0
4m

史跡東勝寺跡

上行寺東やぐら群
〔凡　例〕
数字　やぐら（44基）
建　建物址（9棟）
池　池　址（1基）
井　井戸址（3基）
穴　土坑群（18基）
火　火葬墓（1基）
土　土　坑（2基）
道　切り通し道址（1条）
上段
中段北東側
中段東側
中段南側
下段東側
下段南東側
下段南側
0
20m



由比ガ浜中世集団墓地遺跡

テーマ発表　神奈川の遺跡調査をめぐる30年　古代

―官衙・国分寺・集落の調査成果と課題―

大上　周三

1．はじめに

1977年の第1回から今回までの30年間に、この発表会で発表された古代遺跡は、130遺跡余りに上る。この中で発表のメイン、準メインとして取り上げられた古代遺跡は90弱に達する。これらを大別すると、国府（関連）遺跡12件、国分僧尼寺（関連遺跡）6件、郡衙（関連）遺跡13件、集落遺跡（郡衙とも一般集落ともいえないものも含む）54件、その他窯跡1件となっており、集落遺跡が6割強を占める。

それでは、この30年間に積み重ねられてきた発掘調査と研究の成果、それに伴い生じた新たな課題について述べる。

2．国府（関連）遺跡

国府研究は、1970年代までは文献史学、歴史地理学がリードし、高座国府、大住国府、余綾国府、足柄国府などの所在地説に、幾通りもの変遷案が絡み複雑な状況を呈していたが、1980年代から調査成果を拠り所に、考古学が研究を牽引し、前期国府については大住国府、その所在地も平塚市内の四之宮付近に収斂し、合わせて史料記載の余綾国府への移転という二遷説に落ち着いてきている。

1980年の第2回に平塚市神明久保遺跡の調査と、砂丘上の坪ノ内遺跡ほかの確認調査報告が、1980年の第4回に諏訪前遺跡の調査報告がされた。この時点ではまだ集落遺跡として捉えられていたようだ。翌1981年の第5回において、平塚市四之宮下郷・上郷（第3図1（以下『第3図』を省略））の調査報告で、小島氏が灰釉陶器・緑釉陶器の継続的搬入、石製・青銅製腰帯具の複数出土、さらに竪穴建物、掘立柱建物、土坑、井戸、ピットが一定のまとまりをもち重複するなど、遺構・遺物の密度の高さから、国府関連の「マチ型」の集落の可能性が強いと、初めて考古学成果に基づき相模国府に言及した。今日言われている国府域に当たる。1985年の第9回ではそれまでの調査成果をまとめる形で『平塚市四之宮・真土地区における最近の考古学成果と墨書土器』と題した発表が行われた。これ以降当該地域の調査報告書が毎年刊行され、国府所在地を予感させる遺物が着実に増加していった。例えば、十七ノ域遺跡の鳥形硯、林B遺跡の多量の緑釉陶器、神明久保遺跡の蝉の意匠をもつ鍍金（銀）の施された銅製の錠前牡金具、稲荷前A遺跡の「国厨」の墨書土器、天神前遺跡の「郡厨」の墨書土器（第1図2）、山王A遺跡の佐波理製の匙（1993年第17回報告）といった特異な遺物が次々と発見され、国府の存在を年毎に強く印象づけていった。

一方で、1995年の第19回、2001年の第25回では構之内遺跡で、両側に側溝をもつ道路幅9.7mの古東海道が発見されたことが報告された。その後も山王B遺跡、山王A遺跡、東中原E遺跡でその延長が確認された。また、2004年の第28回では官衙で検出されることの多い連房式鍛冶工房が六ノ域遺跡で発見されたことが報告された。同様の遺構は1995年に坪ノ内遺跡でも確認されており、遺構面でも状況的証拠が少しずつ積み上げられ、研究者の認識は次第に予感から確信へと変わり、大住国府への期待は益々高まった。

そして2005年の第29回において坪ノ内遺跡で庇をもつ桁行9間以上×梁行3間の長大な南北棟の掘立柱建物（第1図1）が発見されたとの報告

がなされた。この建物は郡衙政庁を構成する建物と比較しても格段に大きいもので、国庁を構成する建物にふさわしいものである。また、柱穴からの出土土器には８世紀前半代のものを含んでおり、初期相模国府政庁の一部である可能性が高い。

３．国分僧尼寺（関連遺跡）

大正 10 年に国の史跡に指定された海老名市相模国分寺跡（２）は、1966 年に初の本格調査が実施され、主要伽藍建物がほぼ明らかにされたが、調査報告書はいまだ刊行されず、その後の国分寺研究に与えた影響は大きかった。20 年後の 1986 年から両寺周辺の開発事業に伴う緊急調査、或いは範囲確認調査、史跡整備のための学術調査が重ねられた。1990 年の第 14 回で尼寺跡（３）の金堂の調査報告がなされた。基壇上の金堂は四面庇付の桁行５間×梁行４間の礎石建物が、史料記載に合うように９世紀後半に掘立柱建物に代わったことが報告された。1992 年の第 16 回から 1997 年の第 21 回までに４回の僧寺・尼寺の報告があった。尼寺の調査では回廊、築地、経蔵が確認され、伽藍中軸線上に中門・金堂・講堂が並び、金堂と講堂の間の東西に鐘楼・経蔵が配される国分寺式に類似した伽藍配置と発表された。尼寺北方での調査では、掘立柱建物と共に、「法華寺」の墨書土器が出土し、尼寺との関連が指摘された。僧寺の調査では僧坊は推定約 125mの長大な建物で、西寄りの８坊は、各１坊の規模が桁行３間（11 尺）×梁行２間（10 尺）であることが判明した。塔跡の調査では塔心礎は長径 2.5m、短径 2m程の規模で、塔は１ないし２回の修理が行なわれていたと報告された。2005 年の第 29 回では、僧寺の鐘楼跡と寺院地北辺部の調査が報告された。北辺部の調査で推定桁行７間×梁行３間の長大な東西棟の側柱建物（第１図４）が発見された。柱掘り方も一辺 2.5～3.0mの方形で類をみない大型のものであった。この建物については政所院や太衆院の可能性が指摘された。

４．郡衙（関連）遺跡

1980 年の第４回において県内初の郡（評）衙の報告がなされた。それは武蔵国都筑（つづき）郡（評）衙（４）の一部で、総柱式の掘立柱建物や基壇建物を主体とする正倉に相当するものであった。ただ当時はまだ郡衙の調査事例も少なかったため、発見遺構を郡（評）衙と判断できなかったようだが、その異様さから集落遺跡でないとの認識の元、調査は遂行された。翌年にはその全容が発表された。東側の企画的配置の長大な掘立柱建物群、西側の総柱建物を主体とする倉庫群から、官衙跡と判断された。当然郡衙が念頭にあったものと思われる。

1986 年の第 10 回では県下で２例目となる鎌倉（かまくら）郡衙（５）が報告され、政庁と正倉の存在が明らかになった。1992 年の第 16 回では、正倉がさらに東側にも展開することが明らかになった。

1997 年の 21 回では、高津区千年（ちとせ）の台地上で東西方向に並ぶ４棟の３間×３間の総柱建物が報告された。建物規模、計画的配置から橘樹（たちばな）郡衙正倉（同６）と判断され、付近に展開するであろう郡庁・館・厨家の諸施設の確認が課題となり、その後確認調査が重ねられた。2000 年の第 24 回、2005 年の第 29 回でその後の成果（第２図１）が発表された。ただ目的の一つであった郡庁の発見には至らなかったが、正倉の建物群の発見例が蓄積され、構造、変遷の大要が明らかにされた。

一方、高座郡衙（７）での調査は上記郡衙とは異なる歩みをみせ、郡衙周辺寺院である下寺尾（しもてらお）廃寺や周辺の調査が先行した。下寺尾廃寺では伽藍確認のための確認調査が断続的に行なわれ、伽藍を区画するとされる柱穴列・溝は確認されたが、主要伽藍の確認にはたどりついていない。周辺調査のうち下寺尾廃寺南側の北（きた）遺跡Ｂ地点の成果が 2000 年の第 24 回で報告された。旧河道から多量の木製品、墨（刻）書土器、漆紙文書、木簡、人

面墨書土器、円面硯、浄瓶など多彩な遺物が出土し、下寺尾廃寺に関連した水辺の祭祀と推定された。こうした郡衙周辺域での調査成果が上がる中で、2003 年の第 27 回に高座郡衙の発見が報告され、初期の郡庁、正倉、館、雑舎が確認（第１図５）された。

５．集落遺跡

1970 年代まで東国の古代集落は竪穴建物により構成されているというのが通説であった。ところが 1970 年代前半に調査された厚木市鳶尾遺跡、海老名市上浜田遺跡などの集落遺跡において竪穴建物とともに掘立柱建物がごく普通に検出されだした。そして、1979 年の第３回に報告された平塚市尚原遺跡（８）の発掘調査で、竪穴建物 187 棟と共に掘立柱建物が 161 棟確認されたことにより、東国とりわけ神奈川においては、掘立柱建物も集落を構成する主要な建物であることを確実にした。また、掘立柱建物の中に大型のものが少数ながら存在することが明らかになり、合わせて小型化する竪穴建物の中に存在する大型の竪穴建物も注目されることになった。加えて、大型の竪穴建物と掘立柱建物でもって建物群が構成される傾向にあることを知らしめた遺跡でもある。

1986 年の第 10 回で報告された秦野市草山遺跡（９）の集落構造は他に例を見ないもので、幅 10m 前後の東西南北に伸びる空白帯（区画施設）により複数の居住ブロックが設定されていた。この居住ブロックは、一辺一町（約 109m）の規模で、方形を呈する。さらに居住ブロックを観察すると、その内部は概ね大小２段階の屋敷地が存在する。そして大型の竪穴建物と掘立柱建物からなる建物群は、一辺約 50m 四方の大きな屋敷地に占地する（第２図４）。

草山遺跡で観察された一辺一町規模で居住ブロックをなす例は、相模原市田名塩田原遺跡、同田名稲荷山遺跡、大和市台山遺跡などにみられる。居住ブロックの意味するところは、未だ明らかになっていない。

片や集落遺跡と大きく括られているものの中には、郡衙とも一般集落とも趣を異にする遺構・遺物が確認された遺跡がある。

海老名市本郷遺跡(10)の最初の報告が 1977 年の第１回にあった。灰釉陶器、緑釉陶器、墨書土器、それに鏃・刀子・鎌・穂摘み具・斧・紡錘車など 60 点に及ぶ鉄製品、鞘金具・皇朝十二銭といった青銅製品の出土に発表者は注目した。その後の調査においても検出遺構・遺物は多彩で、1978 年の第２回には灰釉陶器、緑釉陶器、鉄製品（鎌・鏃など）、青銅製・石製の腰帯具等の出土、1981 年の第５回でも青銅製・石製の腰帯具、灰釉陶器、緑釉陶器、多数の墨書土器の出土、1986 年の第 10 回では７世紀後半とされる桁行９間以上×梁行２間の布掘で長大な南北棟の側柱建物が報告された。さらに 1988 年の第 12 回においては、調査区の一画で桁行５間×梁行３間、桁行３間×梁行３間、桁行９間の大型の掘立柱建物、それに一辺８ｍにも達する竪穴建物など複数の大型竪穴建物の発見（第１図３）が報告された。加えて、穂摘み具・鋤・鉋・錠前・鍋脚・鏃・刀子・車軸頭形鉄製品、灰釉陶器、緑釉陶器等が出土した。またこの時点までに墨書土器の出土総数は 550 点に達していた。ますます通常の集落とは隔絶した様相を呈してきた。発表者は 1986 年報告の掘立柱建物については、官衙の脇殿に相当する建物、また、1988 年報告の大型建物群については、本郷遺跡の中心的一画を担い、それは単に本郷遺跡にとどまらず周辺地域においてもきわだった存在であると、その特異性を指摘した。筆者は、前者を高倉評の評衙、後者を高座郡の郡司である壬生氏の居宅と推定している。

1980 年の第４回に報告された横浜市東耕地遺跡(11)は、北の主屋を中心に南に開く「コ」字形

配置の大型建物群（第２図３）で、「一般的な集落とは異なった屋敷的構造を示す」とされた。同時に報告された横浜市神隠丸山遺跡(12)の建物群は、一辺約 50mの方形区画の溝の内部に、「コ」字形を呈する特異な大型の掘立柱建物(第２図２)を中心とするもので、発表者は「官衙や寺院というよりむしろ館址とよんだ方がふさわしい」とコメントした。1984 年の第８回に報告された綾瀬市宮久保遺跡(13)は、木簡を出土したことで一躍有名になった遺跡で、木簡記載内容の分析等から国衙関連遺跡、郡衙関連遺跡、官衙関連遺跡、あるいは国衙周辺の行政村落といった性格が取りざたされた。遺跡の構造、建物規模に特段の特徴は見いだしがたいが、鎌倉郡からの稲に付されていた木簡、玉砂利敷きの木枠組井戸、河川階段施設、護岸施設に着目するなら、河川交通に関わる遺跡の可能性も検討の俎上に上げられよう。1985 年の第９回に報告された川崎市山口台遺跡群上台遺跡(14)では、建物に大型の掘立柱建物は少ないが、南に開く「コ」字形配置の建物群が検出された。1986 年の第 10 回で報告された藤沢市南鍛冶山遺跡(15)は県内有数の遺跡の一つである。ここからは集落遺跡では稀な２点の人面墨書土器をはじめ、多数の墨書土器、腰帯具などが出土し注目を集めた。その後のシンポジウムで郷家、郡衙の出先機関、大庭郷の中枢集落、郡司が居住していた集落、といった考えが出された。1993 年の第 17 回に報告された横須賀市小荷谷遺跡(16)は、古墳時代末～奈良時代前葉の大型のものはないが掘立柱建物が主体の遺跡である。地理的環境、立地、歴史背景から、古東海道の東京湾渡海の海上交通施設が想定された。2002 年の第 26 回に報告された逗子市延命寺遺跡(17)では桁行７間×梁行２間の側柱式や３間×３間の総柱式の掘立柱建物が検出された。発表者は竪穴建物がないこと、出土土器に煮炊き用の土師器甕が少ないことから、富豪層の居宅というより官衙の可能性が高いとした。

６．まとめ

1981 年の四之宮下郷・上郷の報告から 25 年、初期国衙政庁脇殿と思われる建物の一部が確認され、相模国府研究はようやく大きな成果を手にした。これにより、①大住国府は国衙を中心にどのような構造体をなしていたのか。これまでに蓄積された発掘調査成果を元に議論することは十分可能だろう。②脇殿相当の建物が確認されたことにより、国庁の構造解明への期待が高まったが、これについては今後の発掘調査を待つことになろう。③かねてより問われていた国分寺との距離的隔たりについての説明が求められよう。国衙造営地の決定は、中央政府の政治的判断、交通・流通政策、在地勢力の政治・経済的理由、存立基盤など、総合的判断の元、決定されたことと思われる。国府が国分寺のある相模川東岸の海老名市ではなく、西岸の平塚市に造営されたのは、合わせて交通・流通上国内最大の相模川の存在(気候状況により、時に交通・流通を遮断する存在）も考慮されたことも考えられる。④大住国府から余綾国府への移転の理由などが、今後の課題であろう。

国分僧尼寺については、主要堂塔を明らかにすることに関心が向けられていたが、「日本の国分寺制度を評価するにあたり、華々しい堂塔の規模や伽藍配置も重要ではあるが、国分寺の機能を支える運営面での実態がどこまで整備されていたのかを冷静に評価することは、さらに重要であると考える」との須田氏の提言が全てを語っていよう。また、相模国分寺の推定復元図をよく目にするが、いずれも全面瓦葺きに描かれている。しかし、これまでの調査では、瓦の出土量は少なく、全面瓦葺きには疑問が発せられている。相模国分寺像を語る上で、全面瓦葺きか否かは大きな問題である。

郡衙については、個別的には都筑郡衙については、何を置いても早期の調査報告書の刊行を望み

たい。橘樹郡衙については政庁の確認を、鎌倉郡衙については周辺寺院の確認、高座郡衙については、周辺寺院の下寺尾廃寺の主要伽藍の確認と構造解明、西方Ａ遺跡以後の郡庁の行方、などが課題である。総体的には、初期、前期郡庁の構造は判明しているが、その後の郡庁の構造はどうなのか。また、郡衙は政務・儀式・饗宴のほか、多機能に及ぶことが指摘されているが、具体的にどのような機能を担っていたのか。また、郡衙の運営を支えた郡衙集落とも呼ばれるものの実態は。これらに関してはほとんど議論がなされていない。

集落については、ここで取り上げたものだけを比較しても、どれ一つとして同じ集落がないことは明らかである。①立地面でみると広い水稲耕作域を控えた台地上の集落、水稲耕作域を広く確保できない、例えば相模野台地上の集落、山間部の集落、海岸部の集落とさまざまである。拠って立つ基盤がそれぞれ異なっていることは明らかで、その視点からの議論も望まれる。②また、集落の建物構成・規模をみても、それぞれ異なっている。これは、集落構成員の階層の違い、あるいは在地への権力の関わりの度合いの違いを反映していることが考えられる。③それから集落研究上避けて通れない最も基本的なこととして、最小の建物（群）に何人が生活していたかという問いである。これには竪穴建物、掘立柱建物の機能の解明という厄介な問題が立ちはだかっている。竪穴建物と掘立柱建物で構成される建物群のそれぞれの建物の機能をどう特定するか。竪穴建物については、竈屋とする考え、あるいは床面に炉を有する竪穴建物の場合は、鍛冶工房あるいは養蚕・絹生産工房の想定も可能である。一方、掘立柱建物の場合は、規模・形態から居住用、納屋、倉庫、さらには仏堂の可能性など様々な機能が想定できる。④郡衙でも一般集落でもない遺跡の性格の究明も、在地と支配機構との複雑な社会関係を明らかにすることができ、重要である。これについてはいろんな選択肢を用意した上で、歴史背景、自然・人文立地、建物構造の分析でもって、地道に検討を重ねることが肝要である。

そのほか、祭祀、墓、生産跡、生業、食料などへの関心を払うことも、集落研究上欠かせないものである。

★主要遺跡の発掘調査報告書一覧

神田・大野遺跡発掘調査団　1984『四之宮下郷』

平塚市　2003『平塚市史　11下　別編考古（2）』

平塚市遺跡調査会　2000『構之内遺跡発掘調査報告書』

鎌倉市教育委員会　1990『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』

財団法人かながわ考古学財団　2003『下寺尾西方Ａ遺跡』

香川・下寺尾遺跡群発掘調査団　2005『香川・下寺尾遺跡群　北Ｂ地区・下寺尾廃寺地区・篠谷地区　発掘調査報告書』

茅ヶ崎市教育委員会　2004『下寺尾七堂伽藍跡確認調査概報』

川崎市教育委員会　2005『千年伊勢山台遺跡』

神奈川県教育委員会　1982・83『向原遺跡』

神奈川県立埋蔵文化財センター　1988・89・90『草山遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』

日本窯業史研究所　1987『山口台遺跡群』

神奈川県立埋蔵文化財センター　1986『東耕地遺跡』

横浜市埋蔵文化財センター　1990「神隠丸山遺跡（ル1・2）」『全遺跡調査概要』

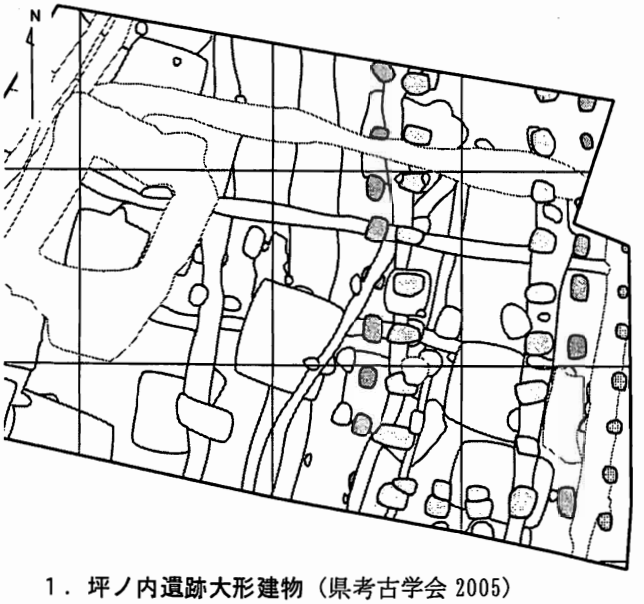
神奈川県立埋蔵文化財センター　1990『宮久保遺跡Ⅲ』

藤沢市文書館　1991「南鍛冶山遺跡を考えるシンポジウム記録」『藤沢市史研究』第24号

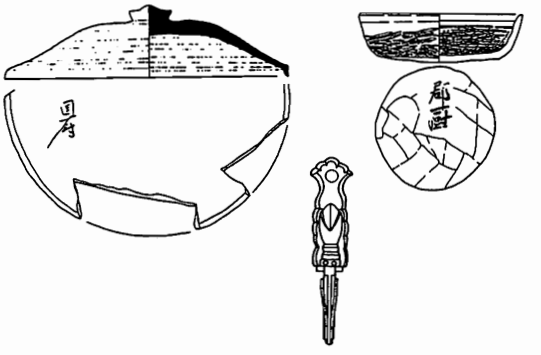
横須賀市教育委員会　1994『小荷谷遺跡』

本郷遺跡調査団　1989・91『海老名本郷（Ⅶ）・（Ⅷ）』

延命寺遺跡（逗子市№110遺跡）発掘調査団　2003『延命寺遺跡（逗子市№110遺跡）発掘調査報告書』

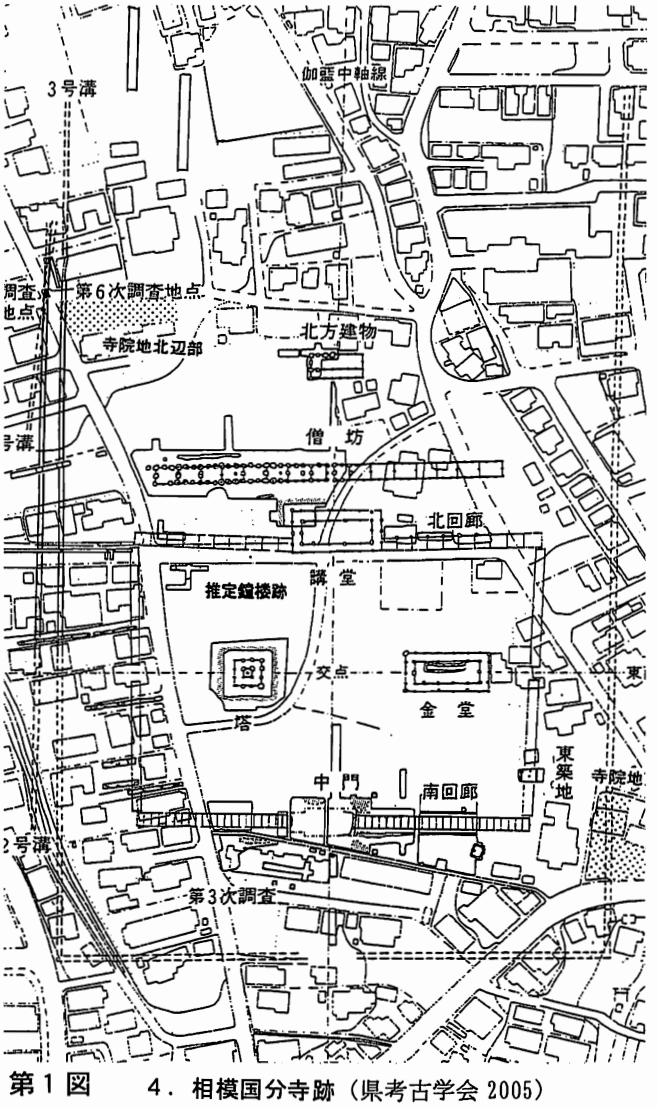


1．坪ノ内遺跡大形建物（県考古学会 2005）

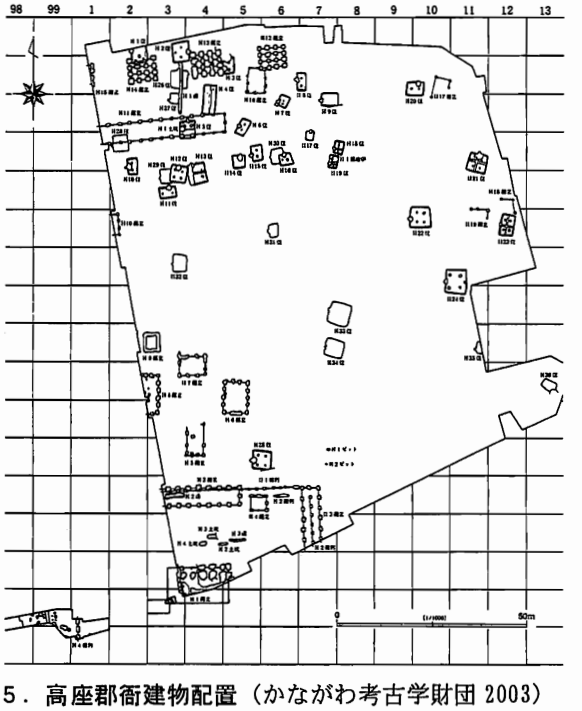


2．稲荷前Ａ、神明久保、天神前遺跡出土遺物
（平塚市 2003）

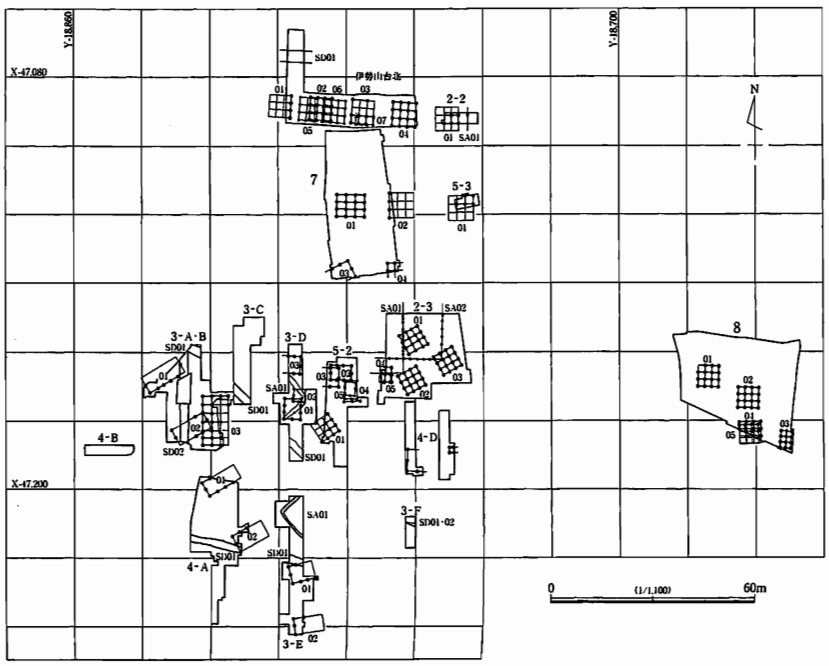
3．本郷遺跡大形建物（本郷遺跡調査団 1991）



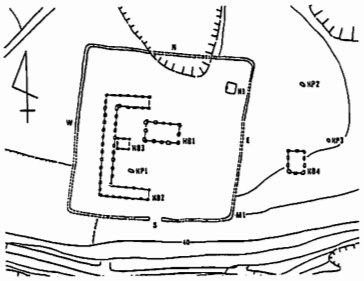
第１図　4．相模国分寺跡（県考古学会 2005）



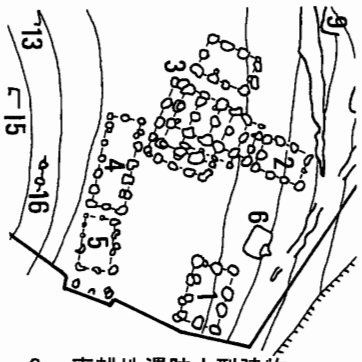
5．高座郡衙建物配置（かながわ考古学財団 2003）



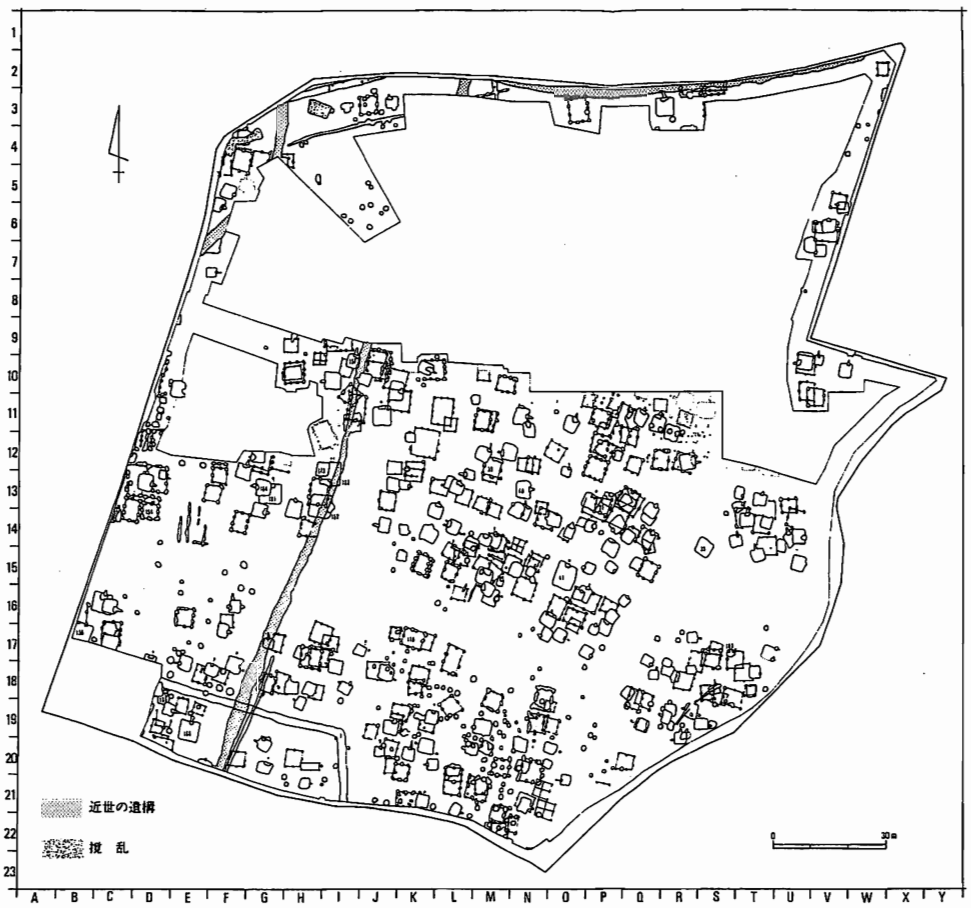
1．橘樹郡衙建物配置（川崎市教委 2005）



2．神隠丸山遺跡大形建物
（横浜市埋文C 1990）

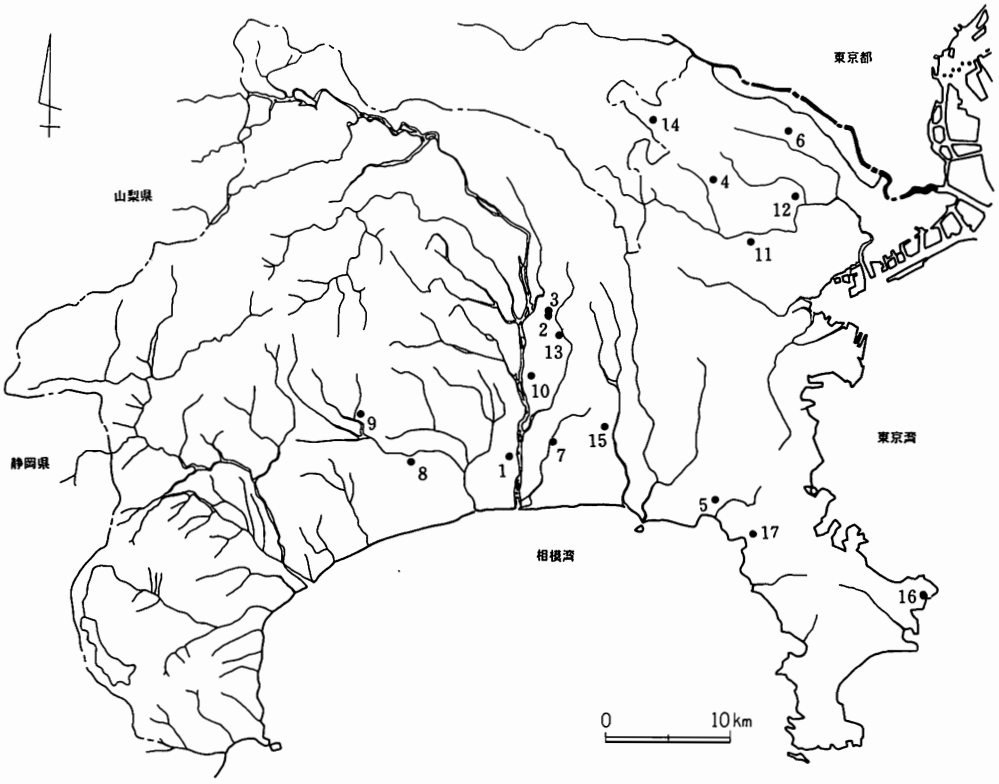


3．東耕地遺跡大型建物
（県考古学会 1980）



4．草山遺跡建物配置（県考古学会 1986）

第２図



第３図　遺跡の位置

1．平塚市四之宮下郷・上郷
2．海老名市相模国分寺跡
3．尼寺跡
4．武蔵国都筑郡（評）衙
5．鎌倉郡衙
6．橘樹郡衙正倉
7．高座郡衙
8．平塚市向原遺跡
9．秦野市草山遺跡
10．海老名市本郷遺跡
11．横浜市東耕地遺跡
12．横浜市神隠丸山遺跡
13．綾瀬市宮久保遺跡
14．川崎市山口台遺跡群上台遺跡
15．藤沢市南鍛冶山遺跡
16．横須賀市小荷谷遺跡
17．逗子市延命寺遺跡

テーマ発表　神奈川の遺跡調査をめぐる30年　古墳時代

―代表的な高塚古墳の調査成果と位置づけ―

明石（あかし）　新（あらた）

1．はじめに

今年は遺跡調査･研究発表会が30回を迎えるという大きな節目の年になりました。発足した当時は高度経済成長の波に乗り、全国各地で凄まじいほどに発掘調査が行われていた時でした。各県・市町村にも専門職員が採用され、時の流れの中で一生懸命現場で汗を流し、頑張っていたと思います。神奈川県においても行政をはじめ、多くの民間・個人が調査をこなし、官民一体となって調査が進められた時代であったと思います。

その経済が翳りを見せた平成５年頃から、調査件数も少なくなり、調査を担当する者にとって、多難な時代に突入しているのが現在の状況かと思います。

そうした状況の中で研究者に求められているのは、地域の歴史をどのように再評価し構築していくかだろうと思います。その意味において、今回の企画が､各時代別に30年間の考古学的成果と今後の課題をテーマとしたことは大きな意義があるものと思います。門外漢で役者不足ですが、神奈川県の代表的な高塚古墳を取り上げ、それぞれの成果と評価を考えてみたいと思います

2．前期古墳

前期古墳として海老名市の秋葉山古墳群と逗子市・葉山町の長柄・桜山古墳を取り上げます。

秋葉山古墳群は1920年（大正９）の中山毎吉氏の学術調査を嚆矢として、10回の測量・発掘調査が行われています。本会で発表されたのは 2001年（平成13）の第25回です。海老名市で1997年（平成９）～2000年（平成12）にかけて秋葉山古墳群の保存整備に向けての確認調査が行われ、その成果の一部が翌年の学会で概要として報告されています。その年代観について１号墳は４世紀代、２号墳は４世紀初頭、３号墳は３世紀後半と報告されました。

その翌年の2002年（平成14）には『秋葉山古墳群第１・２・３号墳発掘調査報告書』が刊行されました。１号墳は４世紀前半～中葉、２号墳は３世紀末～４世紀初頭、３号墳は前方後円墳で３世紀後半の年代が呈示されました。この年代は墳形の形状や出土土器から導かれています。その年代観から、３号墳は神奈川県最古の古墳として位置づけされています。特に、３号墳は「定型化した古墳出現以前の墳墓」と位置づけし、また秋葉山古墳群は「東海以東では千葉県の神戸３・４号墳と併行する前方後円墳を呈する最古級の墳墓の一群である」と評価しています。さらに、「箸墓古墳を最古の古墳と位置づけ、定点とする考えに立てば、秋葉山古墳群の築造開始は弥生時代終末期に遡るものであり、弥生時代終末期から古墳時代に首長系譜が継続する全国的にも稀有な事例」と

述べられている点が注目されます。つまり、従来の定型化した古墳の定義そのものを再検討する必要性を指摘しています。この他にも多くの問題・課題を取り上げ、単に神奈川県だけの問題ではなく、全国的な視野から秋葉山古墳群を見つめ直す方向性を示しています。

同年の 12 月 15 日には海老名市教育委員会主催によるシンポジウム『墳丘墓から古墳へ - 秋葉山古墳群の築造 - 』が開催され、多くの市民が参加し、歴史的重要性が再確認されました。また、多くの市民の熱意により 2005 年（平成 17）７月に国指定史蹟になりました。このことは行政の不断の努力の結果と評価すべきものと考えます。

長柄・桜山１・２号墳は逗子市と葉山町にまたがる通称「桜山丘陵」にあります。１号墳は東京湾～房総半島を、２号墳は相模湾～江ノ島、伊豆半島、富士山を眺望できる場所に造られています。発見の経緯は皆さんご存じのように本会員の方が 1999 年（平成 11）３月に発見されたものです。県・市・町の教育委員会の素速い対応で、三浦半島で初めての前方後円墳であることが分かりました。半年後の 1999 年９月、第 23 回の本会で概要が発表されました。その内容として①２基の古墳は前方後円墳で１号墳は全長約 90m、２号墳は約 80m。②壺形埴輪と思われる破片が１号墳で採集され、２号墳で出土しているが、県下の前期古墳では埴輪を伴う数少ない例。③出土した壺形埴輪片から４世紀後半の前期古墳。④２号墳の葺石は県下初めて、と報告されています。

2001 年（平成 13）３月に『長柄・桜山第１・２号墳測量調査・範囲確認調査報告書』が刊行され、墳形・規模・遺物が明らかにされました。１号墳は前方後円墳で全長 90m、２号墳は前方後円墳で全長 88mを測り、土師器・壺形埴輪・朝顔形円筒埴輪が出土し、両古墳とも岩盤を一部造成して造り、２号墳には葺石を伴っていたことが明らかにされました。

その成果のまとめとして、①前期の定型化した前方後円墳が神奈川県で初めて発見され、しかも三浦半島で発見されたこと。②神奈川県最大級の古墳であること。③後円部と前方部の比率は６：４となり、市原市釈迦山古墳をはじめ東京湾東岸の大型前期古墳に採用されていることから房総との関連が指摘されていること。④壺形埴輪は在地での土器作りの伝統の上に他地方の要素を取り入れて成立したことも想定されること。⑤埴輪や土器から２号墳が先行する、と指摘されました。

また、「長柄・桜山第１・２号墳が構築された時期での碧玉製品、銅鏃、土器や鉄資源などの物流ネットワークからは、陸路・海路いずれにおいても当該地域の重要性は高く、一つには東京湾を結ぶ拠点であり、関東地方に定型化した前方後円墳の嚆矢として注目され、ひいては畿内勢力の東方への勢力伸長を考える上でも重要な位置を占める。」と評価しています。

その翌年、2002 年（平成 14）12 月 15 日には、逗子市と葉山町の主催でシンポジウム「前期古墳を考える - 長柄・桜山の地から - 」が開催され、基調講演を行った川西宏幸氏は「①被葬者が海上交通に長じていたことは疑いないし、畿内政権による東国の版図の伸張と結びつけるのは魅力的な説。②高句麗が南下を策したのは４世紀後半と５世紀後半の時期。朝鮮半島の情勢が緊迫している中で、倭が半島に軍を進めた時期に、東北地方で

大型古墳が出現していることと重なる。③東国に政治地図を描く場合に、国際的な契機を重視すべき。」と提言した上で「海上交通に長じていた長柄・桜山古墳の被葬者の活動が、どのような国際的な契機に連なっていたか。」と問題を提起しています。国際的な視野から見た課題として受け留めたいと思います。

この二つの前期古墳が同年の12月19日付で国指定史蹟になったことは大変嬉しいことで、その陰で支えてこられた大勢の方に敬意を表したいと思います。

3．中期古墳

厚木市の吾妻坂古墳の調査は1986年（昭和61）11月に実施されました。1988年（昭和63）6月に『調査概報』が刊行され、3か月後の9月、第4回遺跡調査・研究発表会に登場します。その後、1993年(平成5)に本報告書が刊行されています。さらに厚木市教育委員会が「吾妻坂古墳出土資料研究委員会」を組織し、2004年（平成16）に『吾妻坂古墳出土資料調査報告』が刊行され、研究委員の一人であった西川修一氏が翌年の2005年(平成17)、第29回遺跡調査・研究発表会でその成果と課題を報告しています。

1988年の『調査概報』では、半径約45mの円墳で高さは約6m、主体部は墳丘面に5基、袖部テラスに1基の計6基が確認され、出土した遺物は径19.5㎝の斜縁四獣鏡の青銅鏡1面の他に櫛2本、鉄剣・矛・刀・鉄鏃、勾玉・管玉・小玉、鉄製儀鏡や五領期の土師器が出土したと報告されました。また、主体部は割竹形木棺直葬で主軸は南北と指摘し、前期古墳と報告されています。周辺の前期古墳の中で、対岸の秋葉山古墳については3世紀と位置づけています。

1993年の本報告書では、主体部の認定を「木棺の痕跡をもち、棺底より埋葬に伴う遺物の出土があるもの」と規定し、再度検討した上で3基に変更され、2号主体部は1号主体部（割竹形木棺）、3・6号主体部は2号主体部（割竹形木棺）、5号主体部は3号主体部（組合形木棺）、1号主体部は2号土壙、4号主体部は3号土壙となり、新たに1号土壙が認定されました。

吾妻坂古墳をまとめた北川吉明氏は、①版築と周溝の位置から直径55m程度の円墳と推定し、前方後円墳であったならば全長100m規模を想定。②古墳の年代は周辺遺跡の海綿状粗質火山灰の事例と土器の分析から、4世紀末～5世紀初頭と推定。③相模川流域の4世紀段階は円墳での中首長墓の形成、5世紀段階では大首長の前方後円墳の築造との発展過程を示されました。なお、本書にはガラスの科学組成、1・2号主体部内土壌のPH値、遺物の保存修復、植物性出土品の材質分析が納められています。

2004年の『吾妻坂古墳出土資料調査報告』は11人の専門研究者と1企業の共同調査・研究により、様々な角度から検討され、質が高く、内容の濃い報告がされています。

その内容は2005年の第29回遺跡調査・研究発表会で分かりやすく発表されていますので割愛させて頂きますが、発表者は「吾妻坂古墳の副葬品の優秀さに注視するのではなく、相模川水系の地域的特殊性という観点から、今後も歴史性を追求することが必要。」と総括されています。

4．今後の展望と課題

従来は関東の古墳時代の中で、神奈川県は蚊帳の外に置かれた状況であったと言えます。その前期・中期古墳についても大きな注目を浴びてこなかったのが現状ですが、ここ10年の秋葉山古墳群、長柄・桜山１・２号墳、吾妻坂古墳の調査成果で見方が変わったかと思います。

神奈川県は古墳の規模と出土遺物等から、大首長が未発達で小首長が点々と展開する、ある意味で「どうにでもなる地域」と捉えられてきました。逆にこれを裏返せば、「どうにでもなる地域 - 神奈川 - 」は大和王権にとって、是非とも押さえなければならない「重要な地域」として認識されたのではないでしょうか。

大和王権は広大な関東平野を経済的基盤として視野に入れ、王権を支える重要地域として支配することを最大の目標にしていたと考えます。つまり、東国は王権の維持に必要不可欠な地域であったと言えます。そのために王権は必要に応じて、東国の入り口である神奈川の首長とのネットワークを通じ、首長に必要な「威信財・情報」を繰り返し提供したと考えます。

一方、在地首長は王権とのつながりを利用して在地支配を遂行しました。持ちつ持たれつの関係が王権と在地首長との間で繰り返し行われ続けたのではないでしょうか。当然、在地の首長層の間にも、同じことが繰り返されたものと思います。

このように、最近の成果から、王権は東国の入り口である神奈川を、「総」・「毛」という巨大な首長国を見据えての前進基地的な場と捉えていたと考えられる状況になっていると思います。

前置きが長すぎましたが、海老名市の前期～中期の秋葉山古墳群の当面の課題として、①相模川左岸の狭隘な台地に造営された理由を考える必要があるかと考えます。②ほぼ前方後方墳の可能性が高い４号墳の年代がまだはっきりしていませんが、前方後方墳であるならば、秋葉山古墳群の中での位置づけが課題となります。そのためにも、４号墳の再調査が望まれます。③距離を置いて造られた６号墳は円墳と推定され、時期等は不明とされています。これらの課題の解明に加え、今までの成果を生かし、古墳群を生み出した集落の母胎を具体的にどこに求めるか、古墳群を分解して一つ一つの特性を導き出し、総体として位置づけること、東国における位置づけと王権との関係をどう捉えるかが今後の課題と考えます。

1998年２月（平成９）２月に神奈川県考古学会主催で「神奈川の古墳 - その出現と展開 - 」と題して考古学入門講座が開催されました。その報告の中で東相模を担当した服部みはる氏は①秋葉山古墳群を通して古墳築造の基盤となる集落は、古墳に接近した場所にはあまり確認されていないことから、東相模南部地域との関係が注目される。②地域の首長であることをアピールするために、支配領域や生産基盤となる土地を見下ろす、あえて集落から離れた場所を選び古墳（群）をつくった。③相模川中流域は河川交通及び陸路の要所で、交通の要に古墳を造ることが、支配域を主張し、物流、情報伝達を独占的に掌握することの象徴であると展開し、古墳と集落の関係の一つの方向性を提示されました。そうした状況の中で、ここ数年、かながわ考古学財団によって「一般国道 468号（さがみ縦貫道路）建設事業に伴う調査」が行われ、左岸の自然堤防（寒川町・海老名市）から

古墳や集落の発見が続いていますので、新たな展開を期待したいと思います。

次に第長柄・桜山１・２号墳についてですが、史蹟整備に伴う確認調査が今年の８～９月に行われました。新たな見解が出るかもしれませんが、いくつかの課題を挙げてみました。まず、①東京湾をはさんで、対岸の房総や多摩川流域を見据えての位置関係から、どのような経緯で造られたか。②長胴の壺形埴輪の出自の解明。③古墳の被葬者が大和から派遣された人物（派遣将軍）だとしたら、その出自である集団は何か。③長柄・桜山古墳以後の三浦半島の動向と神奈川の中での歴史的位置づけ、と様々な課題が想定されます。

中期の吾妻坂古墳については概報・報告書・出土資料調査報告と３冊が世に出て、その評価が高まっています。やはり、考古学・科学の進歩の成果であり、その時は頑張って勉強してまとめますが、資料の増加と研究の深化によって、その遺跡の評価は変わります。また、その一つ一つの積み重ねが新たな地域史の実像に近づくものと考えます。私たちは今後とも遺跡の再検証・再評価を進めていくことを吾妻坂古墳から学びました。

今後の課題として、前期と比べると中期に古墳や集落が極端に少なくなることの解明があげられます。その原因として、寒冷化や地震等の自然災害とする考え方もありますが、それだけでは大きな理由になるとは考えられません。その中で沖積低地で発見された海老名市の中野桜野遺跡は大きな意義をもっており、課題を解明する一つの方向性が示されたものと考えます。

今日の行政は市民との協働・参画が叫ばれています。行政を動かすのは市民・県民です。文化財保護の原点に戻り、『文化財は地域の人が守る・活用する』と自らの意識を高めて頂き、行政に対して積極的な参画をお願いしたいと思います。

一方で、本会が果たす役割は、市民力の底上げ、地域力を上げることと考えます。神奈川県考古学会の果たす役割はますます高まっていると考えています。そのためにも、普及・啓蒙活動を推進し、さらなる「会員による、会員のための活動」を展開する時代に来ていると思います。今後とも皆さんの積極的な参画をお願い申し上げます。

◆発表に関連した報告書等

１．秋葉山古墳群

海老名市教育委員会　1998『海老名市史　1　資料編　原始・古代』

神奈川県考古学会　1998　考古学入門講座『神奈川の古墳 - その出現と展開 - 』

神奈川県考古学会　2001　第25回遺跡調査・研究発表会『秋葉山古墳群第１～３号墳』

海老名市教育委員会　2002　『秋葉山古墳群第１・２・３号墳発掘調査報告書 - 第５次～９次調査 - 』

海老名市教育委員会　2002　『墳丘墓から古墳へ - 秋葉山古墳群の築造 - 』

海老名市教育委員会　2003『海老名市史　6　通史 編原始・古代・中世』

２．長柄・桜山第１・２号墳

神奈川県考古学会　1999　第23回遺跡調査・研究発表会『長柄・桜山第１・２号墳』

神奈川県教育委員会　2001　『長柄・桜山１・２号墳測量調査・範囲確認調査報告書』

逗子市・葉山町教育委員会　2002　『シンポジウム 前期古墳を考える - 長柄・桜山の地から - 』

３．吾妻坂古墳

厚木市吾妻坂古墳遺跡調査団　1988 年(昭和 63 年)『吾妻坂古墳 - 前期古墳の調査概報 - 』

神奈川県考古学会　1988　第４回遺跡調査・研究発表会『吾妻坂古墳』

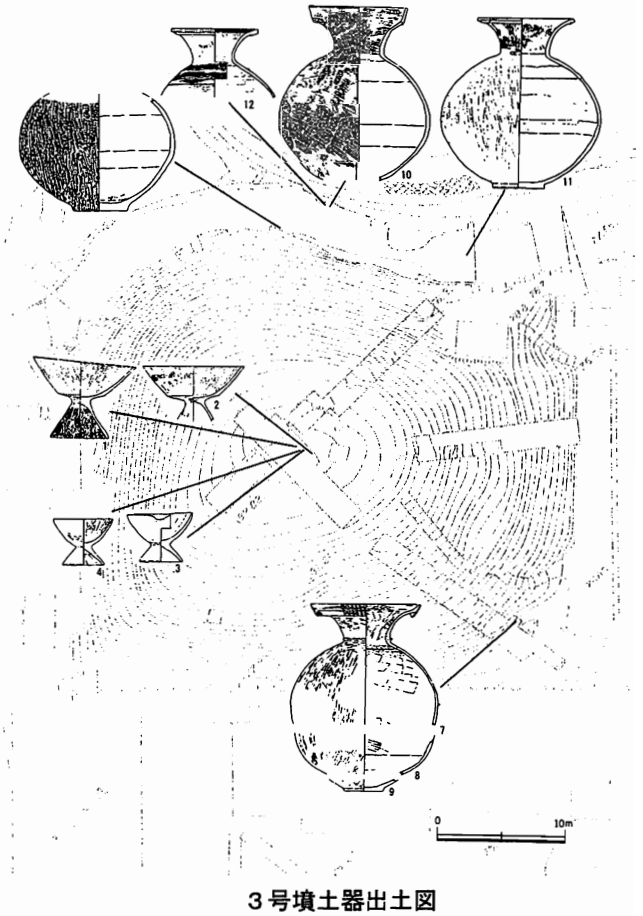
厚木市教育委員会　1993 年（平成５年)『吾妻坂古墳』

厚木市教育委員会　2004 年（平成 16 年)『吾妻坂古墳出土資料調査報告』

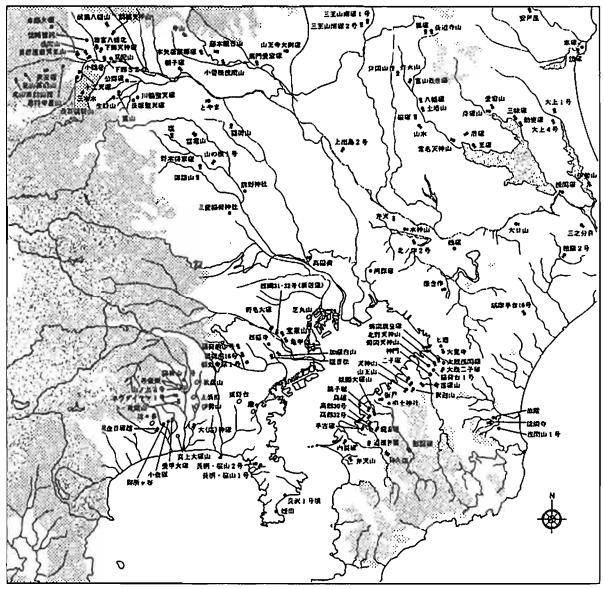
神奈川県考古学会　2005　第 29 回遺跡調査・研究発表会『吾妻坂古墳』

＊律令制以前の相武国の古墳については平塚市博物館『相武国の古墳 - 相模川流域の古墳時代 - 』(2001）が全体を概観できます。その中で、秋葉山古墳群と吾妻坂古墳についても触れられています。また、寒川町の大（応）神塚古墳から出土した小型鏡をＸ線透視写真で撮影した結果、国産の内行花文鏡であることが判明し、５世紀前葉以前に位置づけされる可能性があると報告されています。

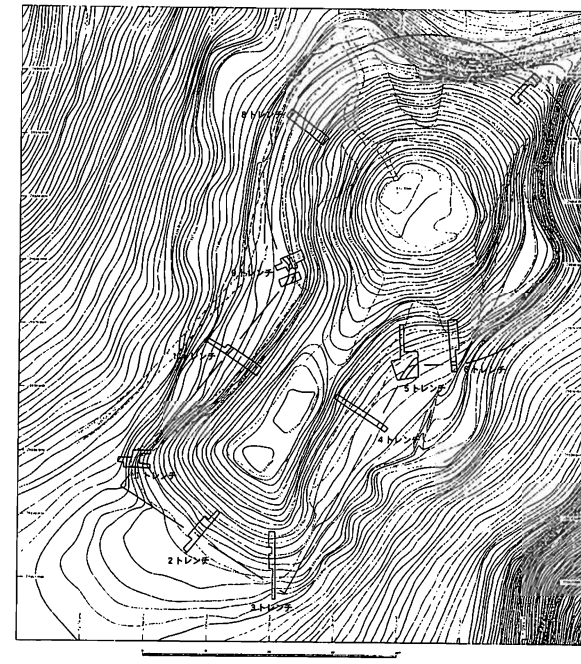
秋葉山古墳群配置図



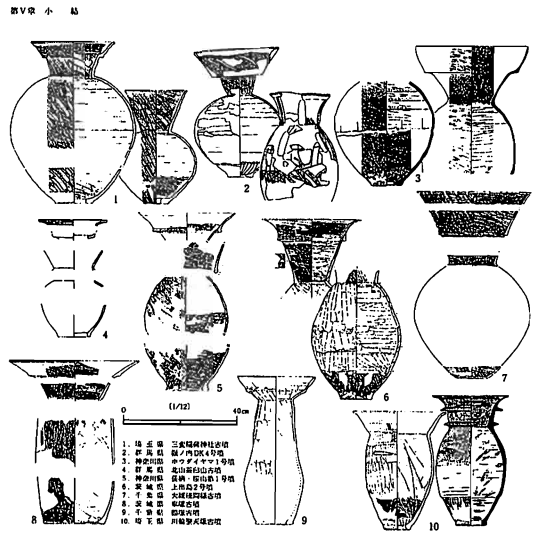
３号墳土器出土図



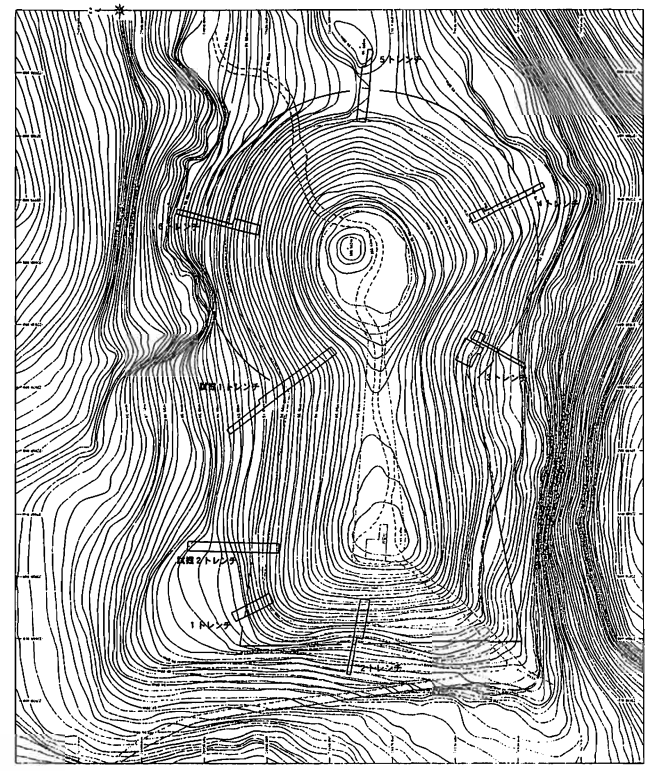
関東地方主要前半期古墳位置図



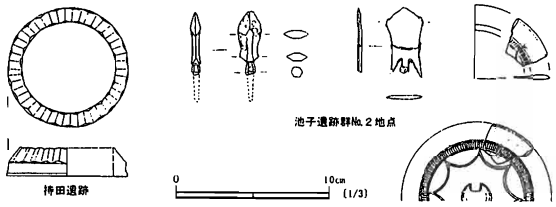
第１号墳墳丘推定及びトレンチ配置図



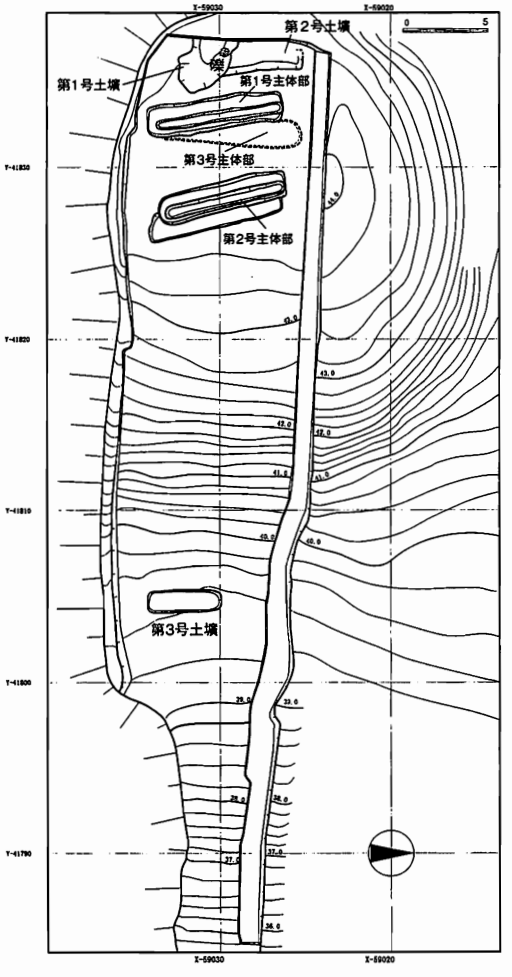
関東地方古墳出土壺形埴輪（長胴）



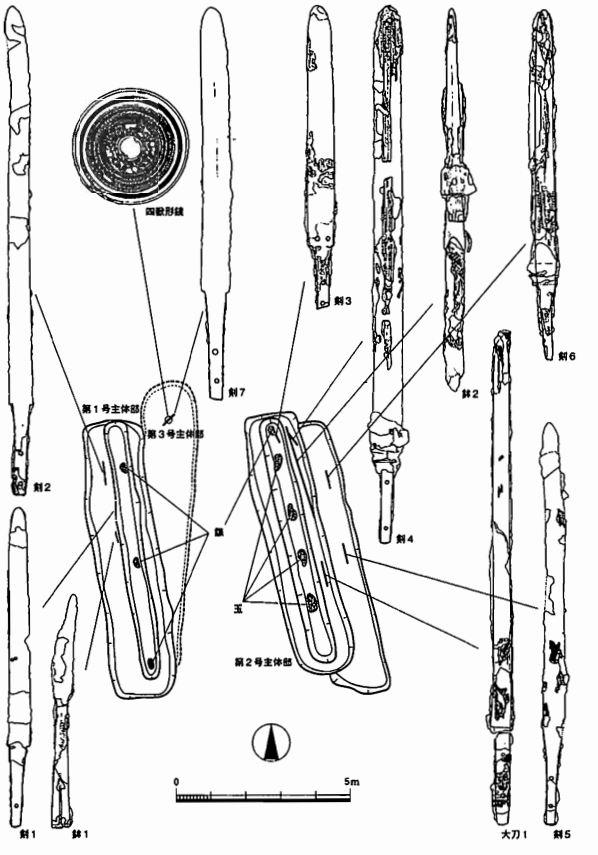
第２号墳墳丘推定及びトレンチ配置図



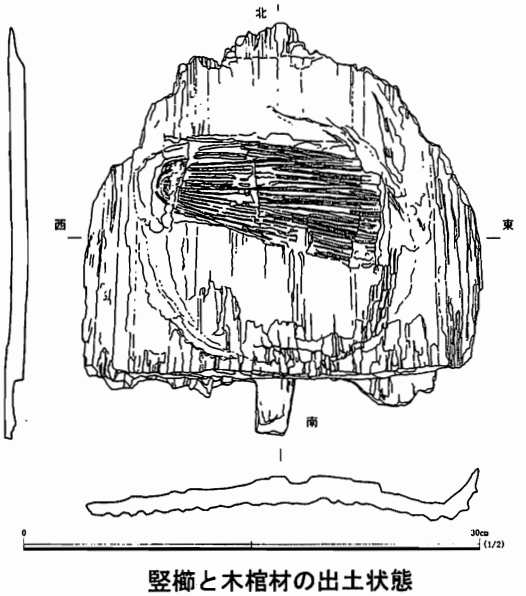
周辺集落出土主要遺物



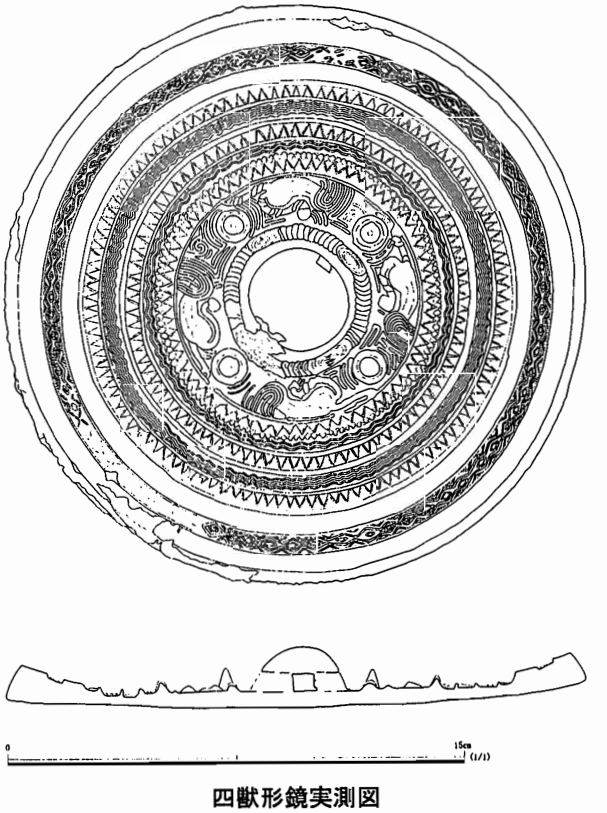
吾妻坂古墳全体図



第１～３号主体部　主な遺物出土状況概念図



竪櫛と木棺材の出土状態



四獣形鏡実測図

テーマ発表　神奈川の遺跡調査をめぐる30年　弥生時代

—神奈川県西部地域を中心とした弥生時代後期の土器研究—

立花（たちばな）　実（みのる）

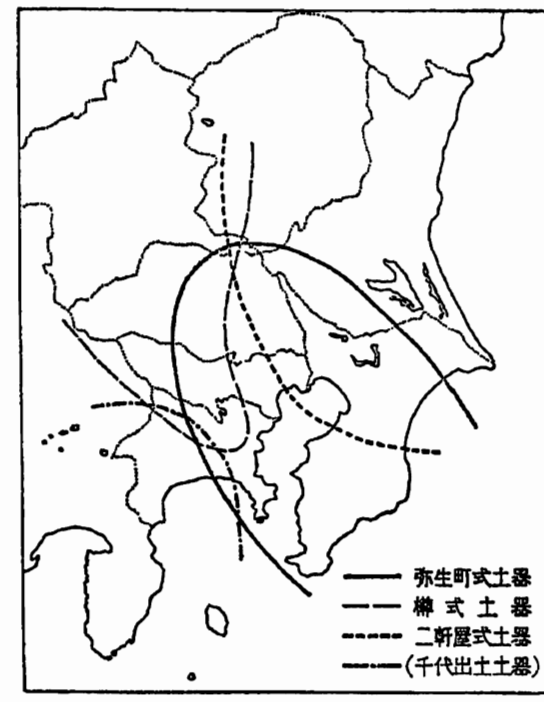
1．はじめに

この 30 年間に神奈川県の遺跡をめぐる環境は大きく変化した。その変化が必ずしもプラスだけではなかったことは、今まさに顕在化しつつあるさまざまな歪みが物語っている。しかし、そうした積み残した課題がある一方で、新たな歴史的事実を解明してきたことも事実である。弥生時代研究についても、多くの遺跡の調査により、直ちに分析、評価が難しいほどの膨大な資料が蓄積されている。それらをまとめることは、いわば、「新版神奈川県史弥生時代編」を編集すると言うのに等しい。それは私の能力を超えているし、誰であれ個人で成しえる仕事でもない。したがって、ここでは過去にこの「発表会」で取り上げられた遺跡を中心としながらも総体的な解説とはせず、テーマを絞った個別研究を紹介することにしたい。

従来より、神奈川県の弥生時代研究といえば広大な発掘調査が繰り返された港北ニュータウン地域を中心とした中期後半の研究が著名である。そこで今回は、あえて目を神奈川県西部地域に向け、時期も弥生時代後期を取り上げる。この地の研究は未だ総合的研究の域には達していないが、第一義的課題である土器研究においても、非常に興味深い知見が得られている。将来への期待を含め、その 20 年間の軌跡をたどってみたい。

2．南関東地方における土器研究略史

神奈川県西部地域を取り上げる前に、その基礎となる南関東地方を舞台とした土器研究の歩みについて簡単に触れておこう。第１表にその大まかな流れを示した。弥生土器の研究は、明治 17 (1884) 年の本郷弥生町での壺の発見に始まるが、全国的規模で具体的な比較検討が可能となったのは昭和 13・14 (1938・39) 年の『弥生式土器聚成図録』(文献 1) の刊行を出発点とする。ここで「相模」は駿河湾地方に組み込まれていることが興味深い。南関東地方よりも駿河地方との親縁性を評価してのことと思われる。その後南関東では杉原荘介氏による南関東編年が確立されていくが (文献 2・4)、そうしたなかで赤星直忠氏、神沢勇一氏が神奈川県の地域性について言及している (文献 3・5)。特に神沢氏は、南関東、北関東とは別に相模湾北西部という地域を設定して神奈川県西部地域の独自性を取り上げた (第１図)。弥生時代後期については、高坏等に東海地方の強い影響がみられることを指摘し、背後に海路による交流を



後期中葉における小文化圏

第１図　神沢勇一による関東の小文化圏(文献５)

第１表　南関東地方における弥生時代後期を中心とした土器研究史

年	出　来　事	内　　容	文献
昭和 13・14年 (1938・9)	森本六爾・小林行雄『弥生式土器聚成図録』刊行	第１～第４様式に分類。前期はなし。 第１様式：駿河と同一、第２様式：久ケ原、第３様式：弥生町、第４様式：無文　**〈初の広域編年、相模は駿河湾地方〉**	1
昭和17年 (1942)	杉原荘介、関東の弥生土器編年を提示	前期はなし。中期２型式、後期３型式。須和田―宮ノ台―久ケ原―弥生町―前野町　**〈南関東杉原編年の確立〉**	2
昭和30年 (1955)	赤星直忠『日本考古学講座４　弥生文化』刊行	前期はなし。 神奈川県地域の地域性について言及。	3
昭和33年 (1958～)	小林行雄・杉原荘介『弥生式土器集成』刊行	前期はなし。中期３型式、後期３型式。 南関東：須和田―小田原―宮ノ台―久ケ原―弥生町―前野町	4
昭和41年 (1966)	和島誠一編『日本の考古学　３　弥生時代』刊行	神沢勇一、関東を３地域に区分（南関東、北関東、相模湾北西部） 前期はなし。中期３型式、後期３型式。 南関東：三ヶ木―須和田―宮ノ台―久ケ原―弥生町―前野町 相模湾北西部：堂山―中里―谷津―赤羽根―千代―千代、後期に東海西部からの直接的交流（海路）を想定。	5
昭和44年 (1969)	大場磐雄・関俊彦「弥生土器の編年」『新版考古学講座』刊行	前期を黎明期とする。中期３型式、後期４型式。 南関東：三ヶ木―須和田―宮ノ台―久ケ原―朝光寺原―弥生町―前野町	6
昭和47年 (1972)	湯川悦夫・加納俊介「南関東出土の東海系土器とその問題」	東海地域の関東への影響を評価。杉原編年批判。	7
昭和54年 (1979)	岡本孝之「久ケ原・弥生町期弥生文化の諸問題（１）」	久ケ原式と弥生町式の供伴事例から両者の併行論を主張。	8
昭和54年 (1979)	佐原真編『入門講座・弥生土器』刊行	熊野正也、南関東を担当。前期はなし。中期３型式、後期３型式。 須和田―小田原―宮ノ台―久ケ原―弥生町―前野町（杉原編年を踏襲） 問題点、前野町は後期か、古墳時代か。南関東という範囲で編年を統一することは困難。　**〈杉原編年の破綻〉** ➡この後、弥生土器に関して「南関東」という範囲が使われることはない。また、前期から後期までを通して記述することもなくなる。	9
昭和54年 (1979)	『どるめん』23　特集〔南関東の弥生文化〕弥生文化後進地域の諸問題	熊野正也「南関東における弥生文化の特徴　弥生式土器の文様を中心にして」 田村言行「弥生時代後期における南関東の動向　久ケ原・弥生町を取巻く小文化圏」　**〈小地域土器分布圏の把握〉** ➡遺跡立地から独自の生業形態の存在を指摘しているが、全般に渡って土器の分析に終始。分析対象としての土器が地域やその文化を語るという前提。	10 11
昭和62年 (1987)	『弥生文化の研究４　弥生土器Ⅱ』刊行	菊池義次、後期編年の混迷に言及。「地域全体を見ても、はなはだしい矛盾や錯誤が不用意に積み重ねられ来たった結果、収集しがたい混乱が生じ、それが長年月にわたって逐次倍加醸成され続けたために、今日では、もはや救い難い混迷が見られるに至った」。　**〈南関東の後期弥生土器編年の渾沌期〉**	12
昭和62年 (1987)	シンポジウム「欠山式とその前後」開催	東海地方を中心とした欠山式土器の実態を追及。関西、北陸、信州、関東との接点を探る。東海地域編年研究の第一歩。	13
平成２年 (1991)	浜松シンポジウム「東海系土器の移動からみた後期弥生土器」開催	弥生時代後期の土器移動を中心に、各地の編年のすりあわせと地域間交流の実態を把握。相模の土器様相の評価に重大な影響を与えた。	14
平成３年 (1992)	綾瀬市神崎遺跡の発掘調査報告書刊行	東海西部系土器が95％を占める後期の環濠集落。この資料により、東海地方との土器交流、土器の系譜、受容形態、製作技術等の理解が進展する。	15
平成４年 (1993)	新潟シンポジウム「東日本における古墳出現過程の再検討」開催	弥生時代後期から古墳時代前期にかけての広域編年を提示。廻間遺跡を中心とした東日本の編年網が作られる。	16
平成12年 (2000)	東日本シンポジウム「東日本弥生時代後期の土器編年」開催	福島県を中心に、東日本の土器様相の実態を把握。	17
平成13年 (2001)	小田原シンポジウム「弥生後期のヒトの移動」開催	弥生時代の地域間交流について、土器を中心に基礎資料を集成。その社会背景に迫る。相模の土器様相の成り立ちについて理解が深まる。	18
平成14年 (2002)	『弥生土器の様式と編年』東海編　刊行	東海地方の土器様相と編年。関東では相模が組み入れられ、東海各地との土器交流を評価。	19
平成16年 (2004)	明大シンポジウム『南関東の弥生土器』開催	南関東の弥生土器に関する新たな枠組みの提示。研究の現状と到達点。	20

想定している。ただし、資料的制約から神奈川県西部地域の具体像を提示し得なかったために、かえって南関東地方でも東海地方でもない中途半端な存在として取り残されることとなった。また、第1図にみるように、当時は土器の分布範囲と文化圏との整理がついておらず、土器のもつ社会的意味についての理解にも疑問がある。

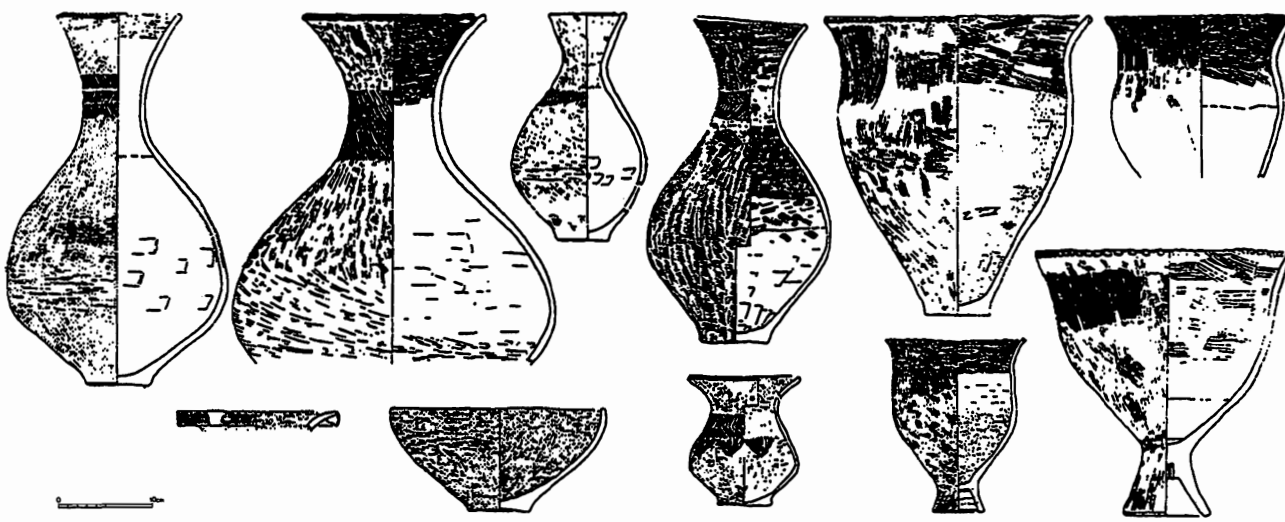
その後、高度経済成長期の大規模発掘調査による大量の資料の蓄積は、より小さな範囲での土器様相の違いを明らかにし（文献9・10）、関東地方での大地域編年を破綻させることとなった。岡本孝之氏により杉原編年への疑問（文献 8）が提示される一方で、従来の考えに固執する意見も根強く、その状況は菊池義次氏の厳しい表現に象徴される（文献 12）。まさに昭和末期は、南関東後期弥生土器研究の渾沌期といえる。

3. 神奈川県西部地域における取り組み

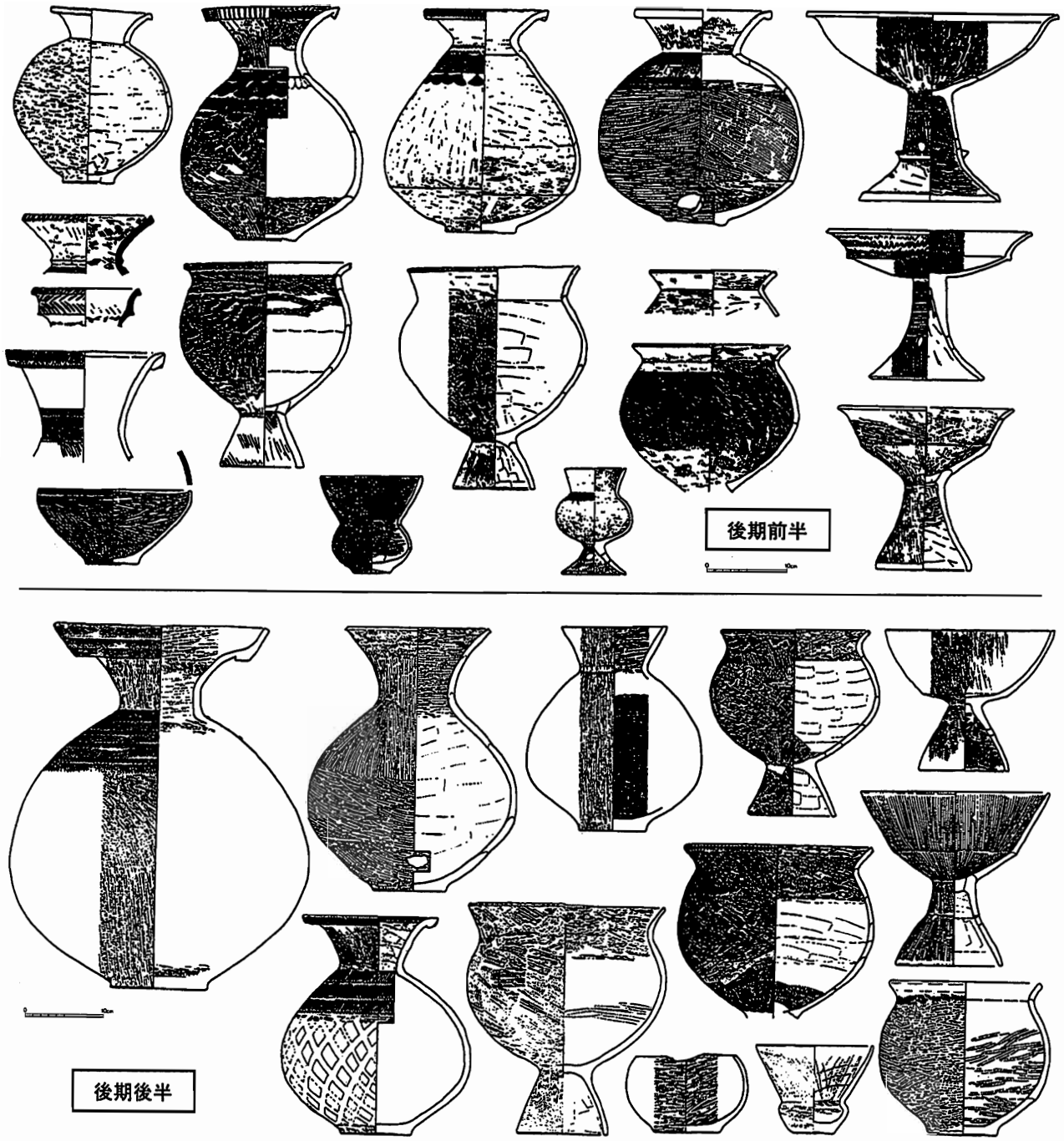
神奈川県西部地域でも土台となる基礎研究がないままに、地域差あふれる多くの土器群が眼前に積まれる事態となった。これに対しては、地元研究者が対処療法的に各遺跡ごとの分析を進めることとなり、この資料の蓄積が以後の地域編年の土台となった。こうしたなか、岡本勇氏は「仮称根丸島式」、或いは「相模湾岸型式」を提唱して、神奈川県西部地域の土器様相を独自に評価しようと試みた（岡本 1978・1986）。しかし、基準となる資料の報告がすぐに刊行されなかったことなどから、地域的な共通理解が深化するには至らなかった。

こうした状況を大きく変えたのが、東海地方の土器研究の進展であった。欠山式シンポ（文献 13）、廻間式土器の提唱（赤塚 1990）、浜松シンポ（文献 14）と現在の研究へ直結する成果が蓄積された。神奈川県西部地域は、東海地方との親縁性の強さからこうした成果をいち早く導入した。また、綾瀬市神崎遺跡の調査成果（文献 15）も、神奈川県西部地域の土器様相の成り立ちを解きほぐすうえで重大な貢献をした。

このような蓄積を得て、平成 13（2001）年には小田原でシンポジウムが開催され、神奈川県西部地域の主要資料の集成と現時点での成果がまとめられた（文献 18）。翌年には『弥生土器の様式と編年　東海編』に相模地域の様相が掲載され（文献 19）、それらの成果は平成 16（2004）年に明治大学で開催された「南関東の弥生土器」シンポに引き継がれている（文献 20）。



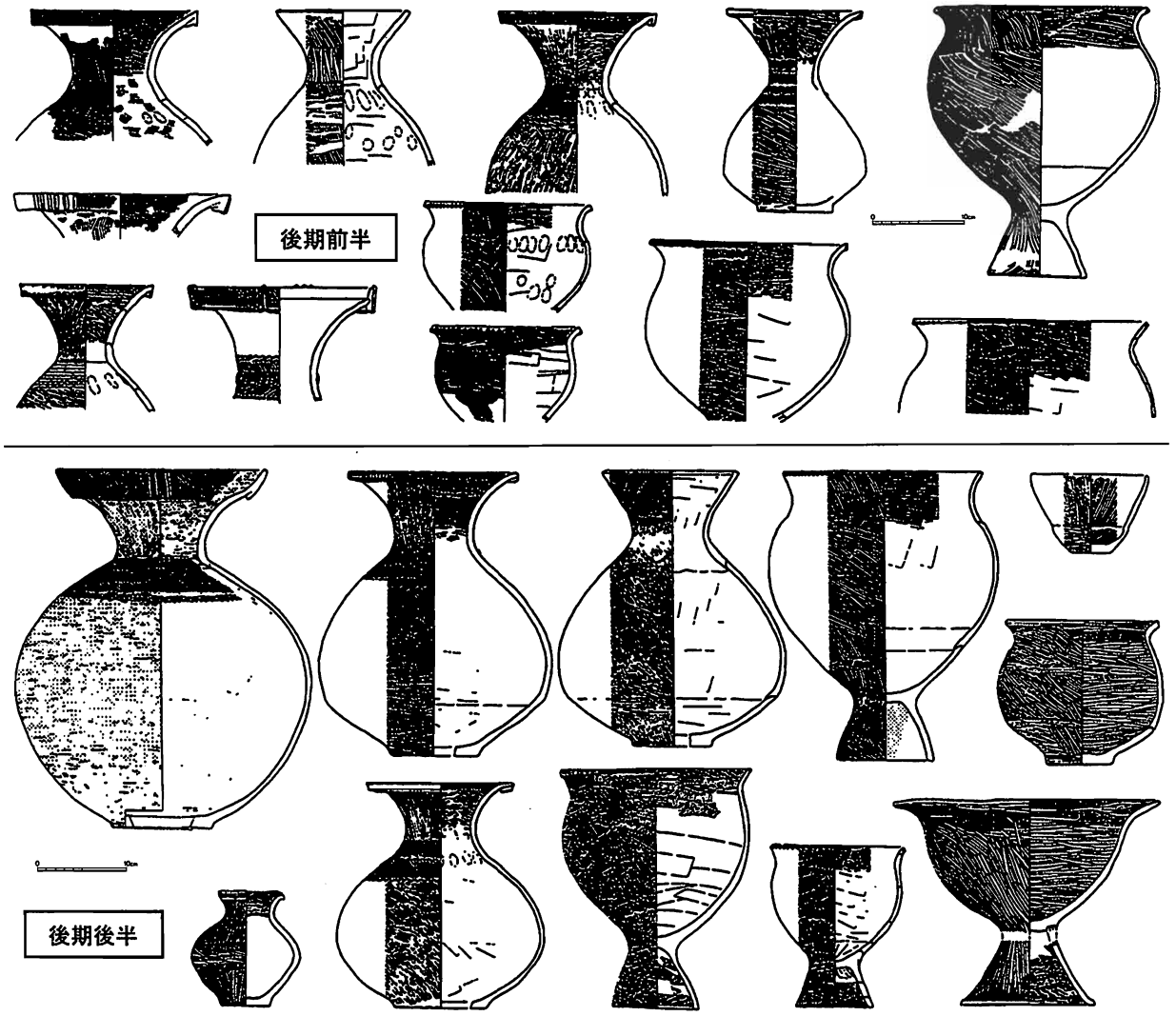
第2図　神奈川県西部地域の中期最末の土器群



第３図　弥生時代後期の土器様相　相模川流域（上段：後期前半、下段：後期後半）

４．神奈川県西部地域の後期弥生土器

次に神奈川県西部地域の後期弥生土器の様相について具体的にみていくことにしよう。まず、前述の「渾沌期」における地域的課題について示しておく。本会の「発表会」にもしばしば登場した海老名市本郷遺跡、平塚市王子ノ台遺跡、秦野市根丸島遺跡、厚木市子の神遺跡、平塚市向原遺跡は、いずれも 50ー100 軒規模の住居址群を検出し、弥生時代後期に始まり古墳時代前期にまで続く集落遺跡である。こうした大規模な集落遺跡の調査にあたって、次の２点の課題が担当者たちを悩ませた。ひとつは中期後半宮ノ台式土器との連続性がうかがえないことであり、二つ目は共通の時期を有しながらも土器様相が大きく異なることであ

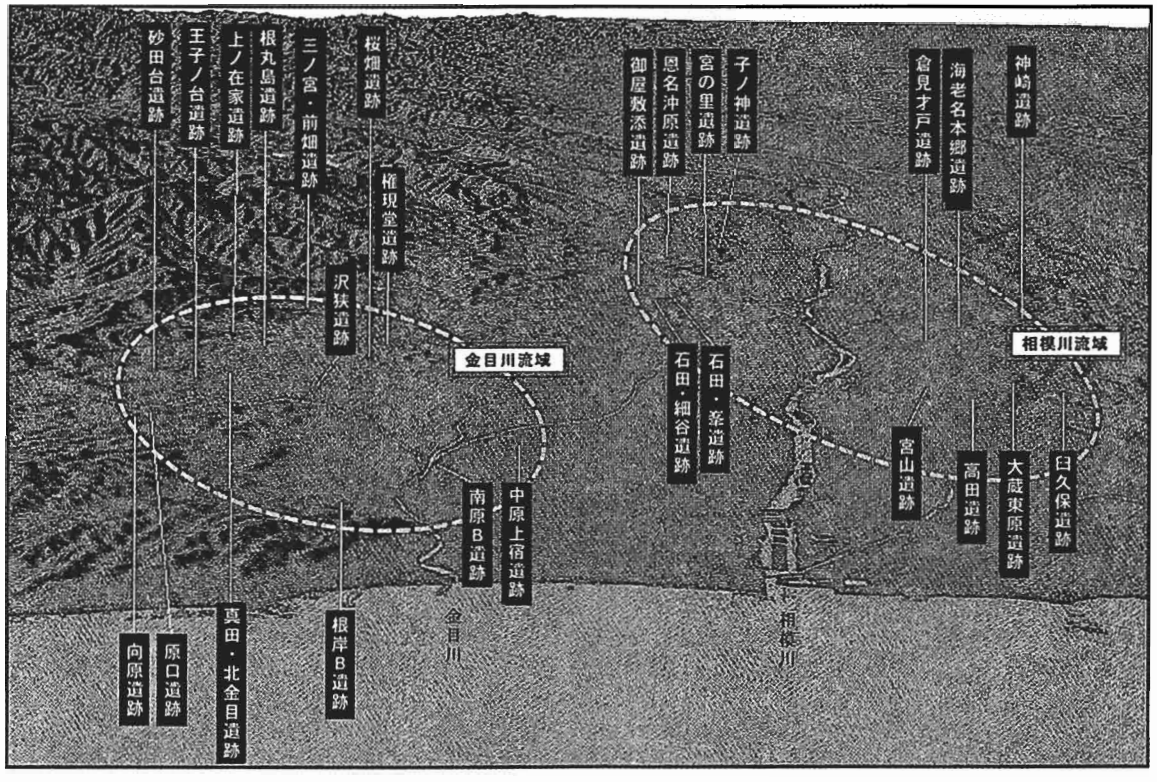


第４図　弥生時代後期の土器様相　金目川流域（上段：後期前半、下段：後期後半）

る。これらの課題に対する取り組みがその後の地域研究の土台となったと言える。このことを意識して具体的な資料についてみてみよう。

第２図は神奈川県西部地域の弥生時代中期後半、宮ノ台式土器の最も新しい一群である。壺と甕と少数の鉢で構成され、壺は頸が細くなだらかに胴部へと続き、頸と胴の区別はない。甕は最大径を口縁部にもち、低い台が付くものもあるが主体は平底である。

次の後期前半については、相模川の両岸域と、大磯丘陵の東を流れる金目川流域で大きく土器様相が異なる。第３図上段が、相模川流域（海老名市、綾瀬市、寒川町、茅ヶ崎市、厚木市、伊勢原市と平塚市の東側）に分布する土器群である。壺は頸と胴の境がくっきりと折れ、櫛描による紋様をもつ。甕は台付で、口縁の先端部は面取りされ、なかにはヨコナデで仕上げられているものもみられる。そして、皿状の坏部と柱状の脚部をもつ高坏も櫛描で飾られている。これらは、愛知県と静岡県が接する東三河、西遠江の土器と同じ特徴をもっており、また、壺と甕と高坏がそれぞれ30%を占める器種構成も変わらない。こうした特徴を有する代表的な遺跡が綾瀬市神崎遺跡であり、出土土器の 95%が東海系土器であるというデータから、これらは三河、西遠江からの移住者が作った土器とも言われている。



第５図　弥生時代後期の土器様相からみた地域区分(相模川流域と金目川流域)

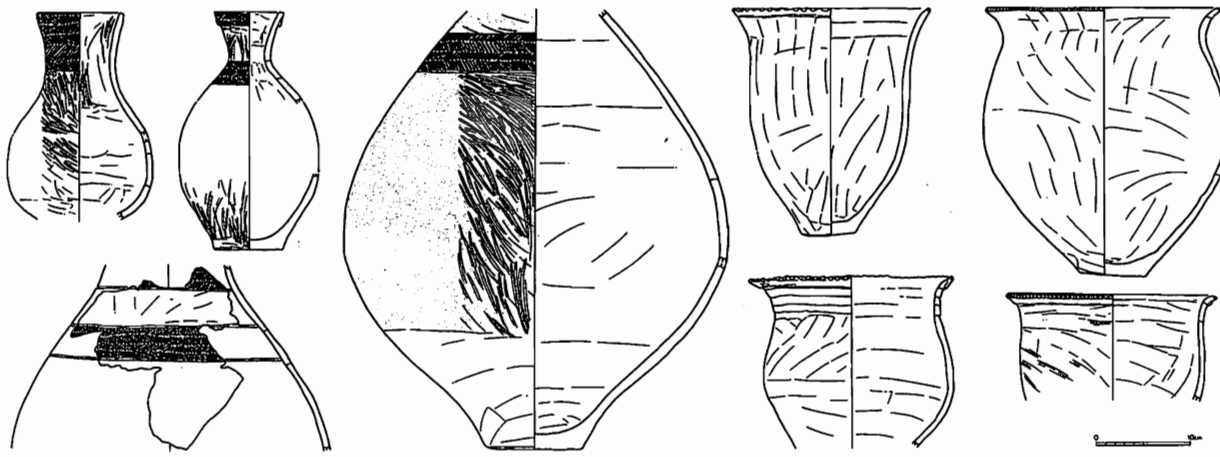
第４図上段は金目川流域の後期前半の土器である。これは平塚市と伊勢原市の西側、秦野市の東側の範囲に分布するもので、直線距離にして十数kmでありながら、相模川流域とは大きく違った様相を呈している（第５図)。壺には口縁部が開くものと内彎するものがあり、主に縄文と櫛の刺突で施文される。甕はほとんどに台が付き、口縁端部はハケによる面取り、端部にはキザミをもつ。高坏はわずかしか出土しない。これらの土器には、静岡県の天竜川から大井川にかけての東遠江と、富士宮市から三島市、沼津市といった東駿河の強い影響をみることができる。

このように、弥生時代中期末（第２図）と後期前半（第３図上段、第４図上段）の土器には、時期的な連続性がみられない。宮ノ台式土器の終焉後、全く別の系譜の土器がもたらされたのである。後者の後期前半における相模川流域と金目川流域の様相差についても、影響を受けた東海系土器の系譜の違いに起因していると考えられる。

続く後期後半についても相模川流域と金目川流域に分けて図示したが(第３図下段、第４図下段)、後期前半に比べてその差は小さくなっている。両者の土器群には、相模川流域の壺の頸の屈曲がやや強いこと、高坏の形態が異なることを除くと大きな違いは見られなくなる。そして、甕の口縁部にヨコナデ仕上げは見られない。これは、相模川流域の土器様相が前代に見られた三河色や西遠江色を急激に失い、金目川流域の土器様相に飲み込まれていくことを意味している。そしてその金目川流域でも、前代には可能であつた東遠江系と東駿河系の識別が難しくなっている。

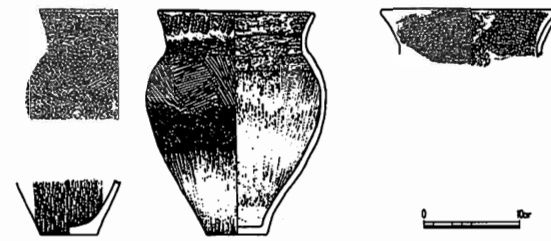
つまり、この段階は金目川流域と相模川流域の土器様相がひとつにまとまっていく過程であり、外来から発生した当地の弥生時代後期の土器様相に相模の独自性が発揮された段階と評価できる。

ここで注意しておきたいことは、相模川流域の後期前半において 30%を占めていた高坏が 10%足らずに減少すること、口縁部のヨコナデ仕上げ



第６図　平塚市真田・北金目遺跡群出土の後期初頭の土器群(19 区 SI004)

や頸の屈曲など先進的な土器製作技術が後退していることである。この時期、日本列島の各地では、土器の器種構成が複雑化し、進歩的な土器製作技術が広く拡散していく傾向にあるが、その意味では当地域のこの現象は特異な事例と言うことができる。



第７図　大磯町馬場台遺跡出土の中部高地系土器

(19 地点 H-17 号住居址)

５. 後期初頭をめぐる新資料

以上のように、神奈川県西部の後期弥生土器は、各時期ごとに異なる地域と交流をもち、それが変容、融合しながら在地化するという非常に複雑なあり方をみせる。しかし、実は私たちが読み解いているのはまだその一部にしか過ぎない。例えば第６図に示した平塚市真田・北金目遺跡群出土の土器群（河合他 2003）は、中期後半の宮ノ台式土器の影響を色濃く残し、それでいて後期の特徴を備えている。つまり、宮ノ台式土器の後継、久ヶ原式最古段階に位置付けられる。その後の東海系起源の後期前半の土器群との系統差が埋められたわけではないが、中期と後期の断絶が後期に食い込んだ時期の出来事であったことを示唆している。

また、第７図には大磯町馬場台遺跡出土の中部高地系土器を示した（立花 2006)。櫛描で施紋した平底の甕は本来神奈川県西部地域にはみられない土器であるが、平塚市の西部から大磯町、小田原市域では破片ながらまとまった数の分布が確認できる。馬場台遺跡例の場合、供伴資料や型式的な特徴から弥生時代後期初頭に位置付けが可能である。また、現時点での類例として山梨県金の尾遺跡の出土土器が挙げられることから、その時期に甲府盆地、中部高地方面との情報交換も盛んであったことが推察される。つまり、後期前半にヒトの移動を含む大規模な情報交換が想定されている当地域ではあるが、それは東海地方だけではなくそれ以外の地域も対象とした広域な地域間交流であった可能性が高い。恐らくこの時期に、土器以外の文物をも含む広域ネットワークの再編があったと考えられる。土器を介してみる地域間交流についても私たちが思うよりはるかに複雑であるに違いない。

６. 神奈川県西部地域の後期弥生土器の評価

社会において土器がもつ意味はさまざまであり、

そこから導き出される歴史像にも自ずと限界がある。弥生時代において土器は日常生活用具のひとつであり、それが当時の文化を代表しうるものではない。まして、政治や経済をどの程度反映しているのかは保証の限りではない。つまり、土器の交流が認められるからといって、当時の社会全体が同じ方を向いていたとは言えないし、土器が違うからといって全くの没交渉であったとも限らない。土器研究にあたっては、そうした特性を踏まえておくことが必要である。

こうした視点で神奈川県西部地域の後期弥生土器を評価してみよう。後期前半の土器が宮ノ台式土器ではなく他地域の土器の系譜をひくこと、それが環濠集落や竪穴住居の形態、穿孔土器をめぐる祭祀のあり方などとも共通性を見いだすことができることは、一連の土器交流が単に土器だけの問題にとどまらないことを示している。つまり、土器が社会の成り立ちと密接に関係している可能性が指摘できる。もちろん、当時の地域間交流はより複雑であり、他の文物のあり方を踏まえて総合的に検討することが必要ではある。ただし、土器から社会へアプローチする道筋を有しているという点で、神奈川県西部地域の後期弥生土器研究は大きな可能性を秘めているのである。

【第１表関連文献】

1　森本六爾・小林行雄　1938・39『弥生式土器聚成図録』正編

2　杉原荘介　1942「上総宮ノ台遺跡調査概報補遺」『古代文化』13-7

3　赤星直忠　1955『日本考古学講座４　弥生文化』河出書房

4　小林行雄・杉原荘介　1958『弥生式土器集成』

5　神沢勇一　1966「弥生文化の発展と地域性　５　関東」『日本の考古学』Ⅲ　河出書房新社

6　大場磐雄・関俊彦　1969「弥生土器の編年」『新版考古学講座４　原史文化（上）弥生文化』　雄山閣

7　湯川悦夫・加納俊介　1972「南関東出土の東海系土器とその問題」『小田原考古学会会誌』５

8　岡本孝之　1979「久ケ原・弥生町期弥生文化の諸問題（１）『異貌』第８号

9　熊野正也　1979「関東南部」『入門講座　弥生土器』Ⅱ　ニュー・サイエンス社

10　熊野正也　1979「南関東における弥生文化の特徴弥生式土器の文様を中心にして」『どるめん』23

11　田村言行　1979「弥生時代後期における南関東の動向　久ケ原・弥生町を取巻く小文化圏」『どるめん』23

12　菊池義次　1987「久ヶ原式・弥生町式・円乗院式土器」『弥生文化の研究４　弥生土器Ⅱ』　雄山閣

13　東海埋蔵文化財研究会　1987『欠山式土器とその前後』

14　立花　実　1991「相模における後期弥生土器編年と東海系土器」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』東海埋蔵文化財研究会

15　小滝　勉・村上吉正　1992『神崎遺跡発掘調査報告書』綾瀬市教育委員会

16　西川修一　1994「相模・多摩丘陵における弥生後期後半ー古墳前期の土器と集落の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』　日本考古学協会新潟大会実行委員会

17　伊丹　徹・池田　治　2000「神奈川県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』　東日本埋蔵文化財研究会

18　西相模考古学研究会　2001『シンポジウム　弥生後期のヒトの移動　資料集』

西相模考古学研究会　2002　『弥生時代のヒトの移動』　六一書房

19　加納俊介・石黒立人編　2002『弥生土器の様式と編年　東海編』　木耳社

20　シンポジウム南関東の弥生土器実行委員会編

2005『南関東の弥生土器』　六一書房

【その他の引用参考文献】

赤塚次郎　1990『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター

岡本　勇　1978『神奈川県史　通史編１　原始・古代・中世』神奈川県

岡本　勇　1986「神奈川のあけぼの」『図説　神奈川の歴史』上　有隣堂

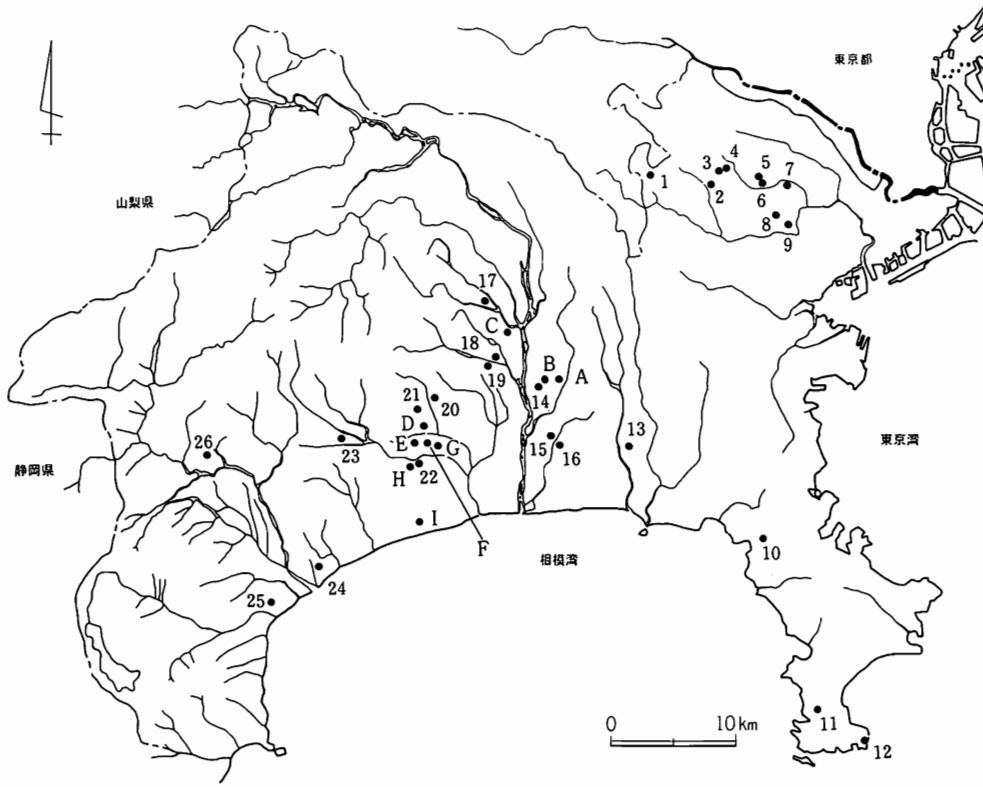
河合英夫他　2003『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書』4　平塚市真田・北金目遺跡調査会

宍戸信悟他　1989・91『砂田台遺跡』Ⅰ・Ⅱ　神奈川県立埋蔵文化財センター

曽根博明他　1987『西相模の土器（本文編）』西相模考古学会

立花　実　2006「大磯町馬場台遺跡出土の甕形土器について」『大磯町史研究』13

横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団　1986『古代のよこはま』



第８図　遺跡の位置

A．綾瀬市神崎遺跡	1．横浜市受地だいやま遺跡	10．逗子市池子遺跡群	19．厚木市御屋敷添遺跡
B．海老名市本郷遺跡	2．横浜市朝光寺原遺跡	11．三浦市赤坂遺跡	20．伊勢原市三ノ宮・前畑遺跡
C．厚木市子ノ神遺跡	3．横浜市赤田遺跡群	12．三浦市間口洞窟	21．伊勢原市坪ノ内・久門寺遺跡
D．秦野市根丸島遺跡	4．横浜市関耕地遺跡	13．藤沢市稲荷台地遺跡群	22．平塚市原口遺跡
E．秦野市砂田台遺跡	5．横浜市大塚遺跡	14．寒川町倉見才戸遺跡	23．秦野市平沢同明遺跡
F．平塚市王子ノ台遺跡	6．横浜市歳勝土遺跡	15．寒川町高田遺跡	24．小田原市中里遺跡
G．平塚市真田・北金目遺跡群	7．横浜市権田原遺跡	16．茅ヶ崎市下寺尾・西方Ａ遺跡	25．小田原市小田原遺跡
H．平塚市向原遺跡	8．横浜市折本西原遺跡	17．厚木市及川遺跡	26．山北町堂山遺跡
I．大磯町馬場台遺跡	9．横浜市新羽大竹遺跡	18．厚木市宮の里遺跡	

テーマ発表　神奈川の遺跡調査をめぐる30年　縄文時代

―貝塚からの情報―

川口　徳治朗

はじめに

神奈川県内には関東地方の縄文式土器の編年基準となった遺跡が多数存在する。早期の夏島式土器をはじめ、晩期の杉田式土器に至る21型式のうち、12型式は貝塚調査から誕生した。

貝塚から得られる多彩な情報は土器編年の確立ばかりでなく、縄文時代の環境、生業、交易など、様々な問題を解明する手掛かりを提供している。ここでは、近年の神奈川県内貝塚の調査と成果を概観してみたい。

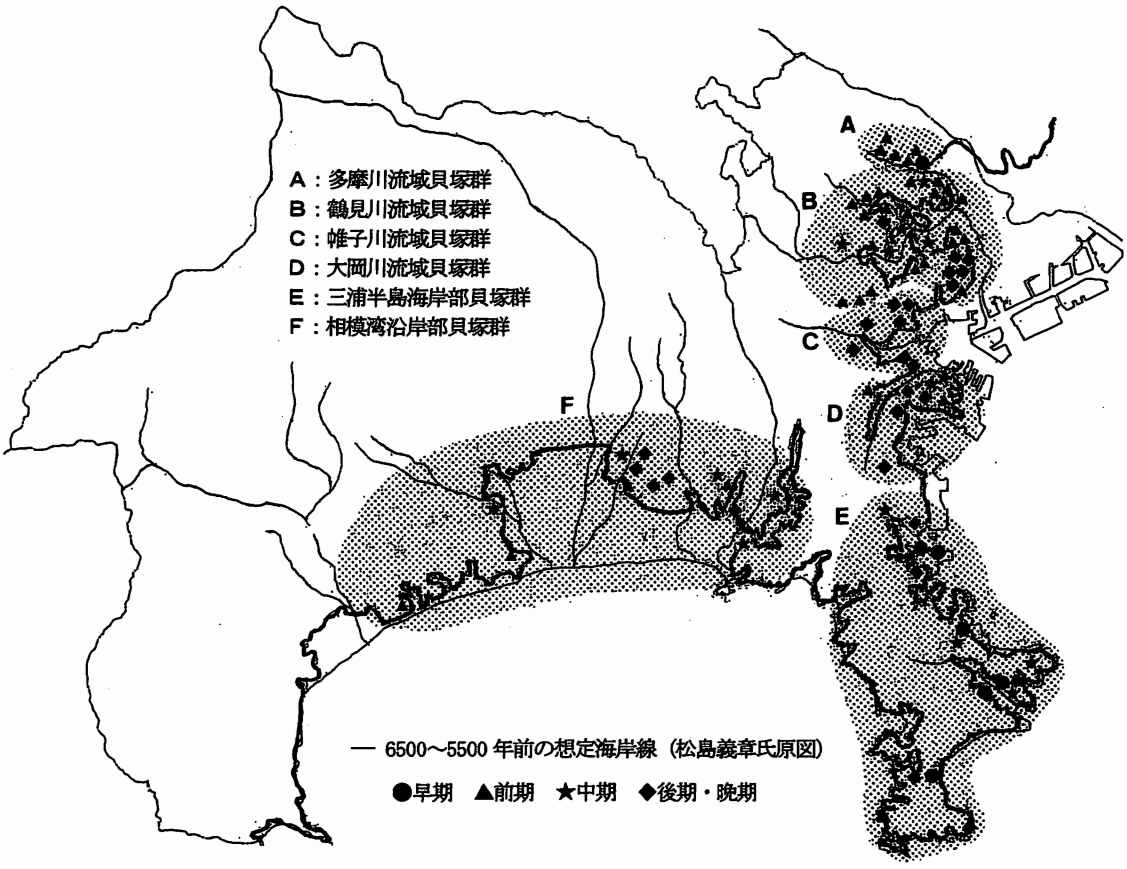
1　神奈川県下の貝塚分布

神奈川県下には縄文時代遺跡が約3100ヵ所存在する。そのうち現在、報告書や遺跡地図、踏査等により存在を知ることができる貝塚は95ヵ所を数える。時期別では早期10、前期38、中期17、後期28、晩期2になる。

地域別の分布では、6群に分類できる。

A：多摩川流域貝塚群

川崎市域を中心に分布する貝塚群で、川崎市子母口貝塚、新作貝塚、影向寺貝塚、窪台貝塚など



第1図　縄文時代主要貝塚分布

早期後半から前期の貝塚が大半を占め、7ヵ所が知られる。貝層はハマグリ、マガキ、ヤマトシジミなどの貝類が主体で、縄文海進期に発達する湾奥の干潟に形成される貝塚の特徴をよく示している。

B：鶴見川流域貝塚群

古鶴見湾に注ぐ河川の流域に形成された横浜市域の貝塚群である。河口より奥域には菊名貝塚南堀貝塚、折本貝塚など前期の貝塚が密集し、河口付近には小仙塚貝塚、別所貝塚、荒立貝塚など後期の貝塚が所在する。県内貝塚の 38%にあたる 36 ヵ所を占め、最も密集度の高い貝塚群である。

C：帷子川流域貝塚群

横浜市域の貝塚群で 11 ヵ所が知られる。河口より奥域には下菅田貝塚、笹山貝塚などの前期の貝塚が所在する。湾口近くには、1906（明治 39）年 N．Gマンローにより神奈川県下初の本格的な発掘調査が行われた三ツ沢貝塚をはじめ、仏向貝塚、池ノ坂貝塚など後期の貝塚が所在する。

D：大岡川流域貝塚群

大岡川流域、古六浦湾に面した横浜市域の貝塚群で、平台貝塚、元町貝塚、稲荷山貝塚、杉田貝塚など前期から晩期まで 11 ヵ所の貝塚が所在する。近年、元町貝塚、杉田貝塚、稲荷山貝塚の調査が行われた。貝層が厚く、貝類、魚類、哺乳類などの動物相と漁撈活動を把握するのに豊富な成果をもたらした。

E：三浦半島海岸部貝塚群

横浜市域の古平潟湾、横須賀市域の古久里浜湾、三浦市域の古金田湾などに面した貝塚群で、16 ヵ所が知られる。古平潟湾側には横浜市称名寺貝塚、青ケ台貝塚、野島貝塚、横須賀市夏島貝塚など早期、中期、後期など著名な貝塚がある。古久里浜湾に注ぐ平作川流域には、早期末葉の海進最高期に形成された横須賀市吉井貝塚をはじめ、江戸坂貝塚、高坂貝塚など中期、後期の貝塚がまとまる。発見から 100 余年を経る三浦市諸磯貝塚は半島東南端に位置する。1996（平成８）年に調査された三浦市間口東洞穴遺跡では、三浦半島の洞穴遺跡で初めて、縄文時代後期の土器が出土した（川上久夫他 1997）。

F：相模湾沿岸部貝塚群

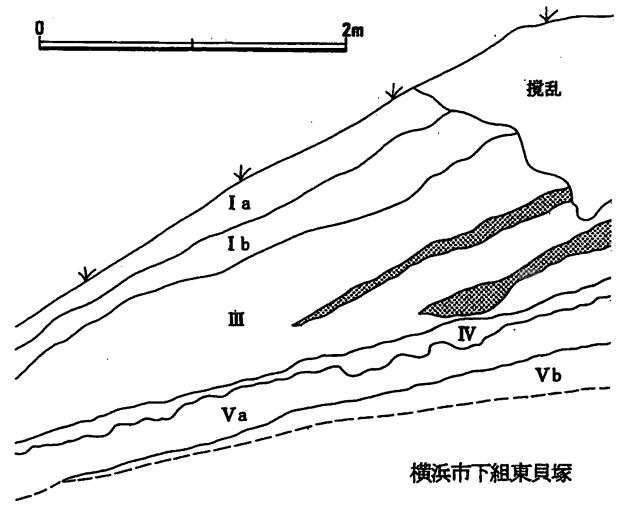
相模湾に注ぐ各河川の流域に形成された小田原、平塚、茅ヶ崎、藤沢、鎌倉などの各市域の貝塚群である。早期は知られないが、前期４、中期４、後期６が所在する。平塚市万田貝塚、茅ヶ崎市堤貝塚、藤沢市遠藤貝塚などダンベイキサゴを主体とする貝塚と、小田原市羽根尾貝塚や茅ヶ崎市西方貝塚のようにヤマトシジミを主体とする貝塚がある。羽根尾貝塚は県内最西部に所在する貝塚で、1998（平成 10）年に調査された（戸田哲也他 2003）。

2　貝塚の形態

斜面貝塚

台地の斜面に形成された貝塚で、居住域から離れたところが選ばれた。早期から晩期まで全時期に認められるが、早期の貝塚の多くは半島状地形の先端斜面に形成された。

層をなすものは長時間を経て堆積したことを示



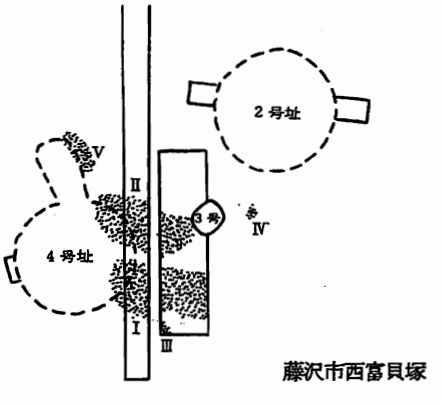
第２図　斜面貝塚

すものである。そこでの上下の貝層は、八木壯一郎氏が川崎市南加瀬貝塚の調査で縄文式土器と弥生式土器の時間差を確認したように（八木壯一郎 1907)、相対的年代の把握を可能にしている。横須賀市夏島貝塚、平坂貝塚、茅山貝塚の斜面貝層は撚糸文土器－無文土器－沈線文土器－条痕文土器の編年的研究に大いに貢献した。

ブロック状をなすものもある。小起伏のある地形の凹所に堆積し、堆積量が肥大化すると連なって層をなすことになる。複数のブロックには多少の時間差が認められる場合があるが、ほぼ同一時期に形成されている。

平坦面貝塚

台地の縁辺部の平坦面および緩斜面に形成された。集落化が進む前期以降の貝塚に多い。茅ヶ崎市久保山Ａ遺跡のように集落内の居住空間に小範囲に形成されるものと、横浜市三ツ沢貝塚、称名寺貝塚、藤沢市西富貝塚、遠藤貝塚のように弧状や半円形の広がりをもって形成されるものがある。久保山Ａ遺跡では３×４ｍの範囲にダンベイキサゴとヤマトシジミの塊が集合し、注口土器、土偶、耳栓が伴出した（成田勝範他 1997)。多量の祭祀的遺物との共伴状況は、この貝塚の性格に特異性を感じさせた。広がりのある形状を形成する貝塚は埋葬人骨を検出することがあり、葬送の場所との関わりを考えさせられる。

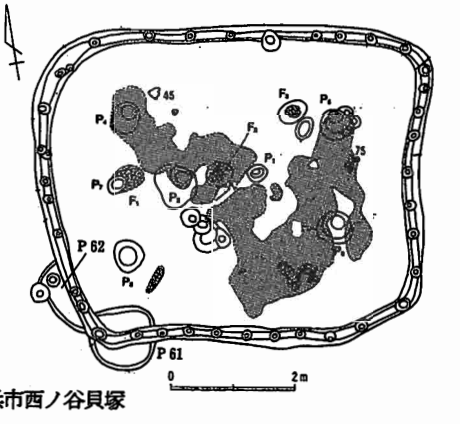


第３図　平坦面貝塚

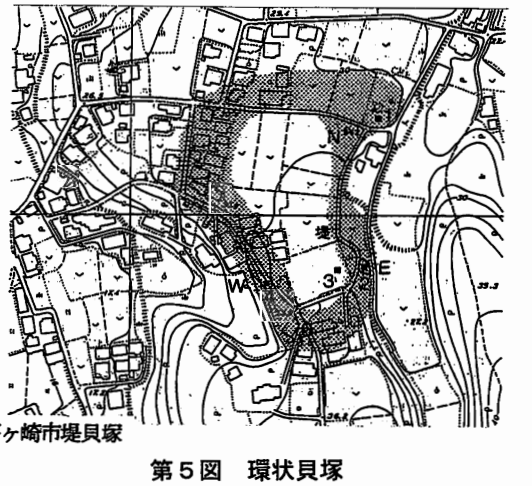
住居址内貝塚

廃絶住居やその窪地に形成された貝塚である。ブロック状に堆積するものが一般的である。住居の廃絶後、短期間のうちに貝を投棄したものと考えられるが、三浦市諸磯貝塚や横浜市西ノ谷貝塚では住居址の柱穴に貝が入り込み、覆土を経て、再び貝層が堆積する例がある（赤星直忠他 1938、忍澤成規 2003)。

茅ヶ崎市西方貝塚、横浜市上台貝塚、寒川町岡田遺跡などのように単数の住居に残される場合と、定型的集落の複数の住居に残される場合がある。複数の場合は半円形や環状の規模の大きい貝塚を形成することになる。前期の横浜市北川貝塚、南堀貝塚、折本貝塚、西ノ谷貝塚、後期の茅ヶ崎市堤貝塚などはこうした形状をとる例である。



第４図　住居址内貝塚

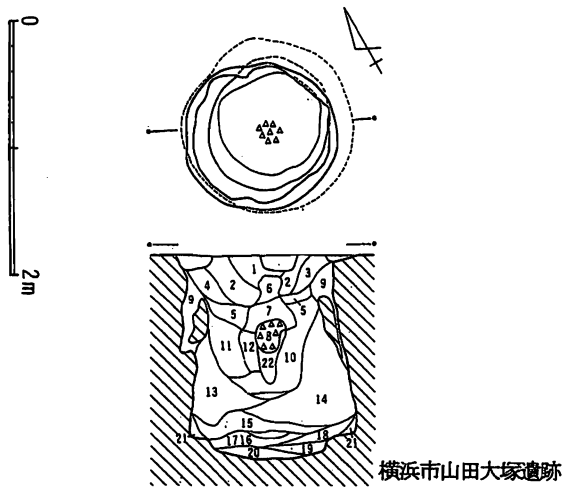


第５図　環状貝塚

土壙内貝塚

集落内の住居間や平坦部に形成された土壙中に埋存する貝塚である。土壙全体を埋め尽くすことはなく、ブロック状に堆積する。

横浜市折本西原遺跡では長径 133～213 cm、短径 93～200 cm、深さ 37～81 cm間の楕円形土壙が７基発見された（岡田威夫他 1988)。このうち貝ブロックが検出されたのは２基で、中期初頭の五領ヶ台式期に所属する。土壙を掘り返して、貝を投棄している。一例は 45×30 cmの範囲に、他の一例は径約 20 cmの範囲にハイガイ、オキシジミを主体に遺存されていた。横浜市山田大塚遺跡にも類例がある（中村若枝 1990)。早期と後期を中心に 85 基の土壙が発見されている。早期は落とし穴、後期は墓壙と貯蔵穴と考えられており、全体の 77.6%は貯蔵穴である。貝ブロックが検出されたのは１基で、堀之内Ｉ式期にあたる。118×121 cmの不正円形、深さ 162 cmの土壙の中ほどから検出されたが、100 個体程度の少量で 90%以上がハマグリであった。折本西原遺跡の場合と同様に土壙の収容量からすると、極めて少ない遺存量である。こうした状況は貝自体の貯蔵目的でなく、別のものを貯蔵するための一材料であったことも考慮すべきかもしれない。

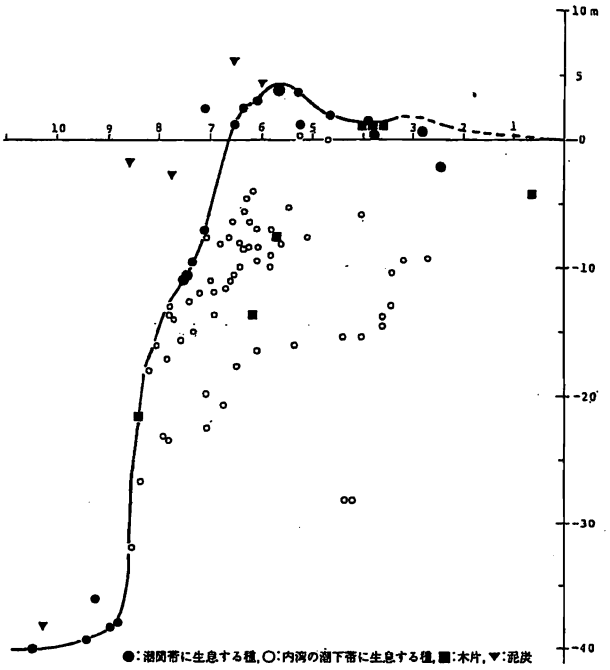


第６図　土壙内貝塚

３　貝層の断面

古環境の復原

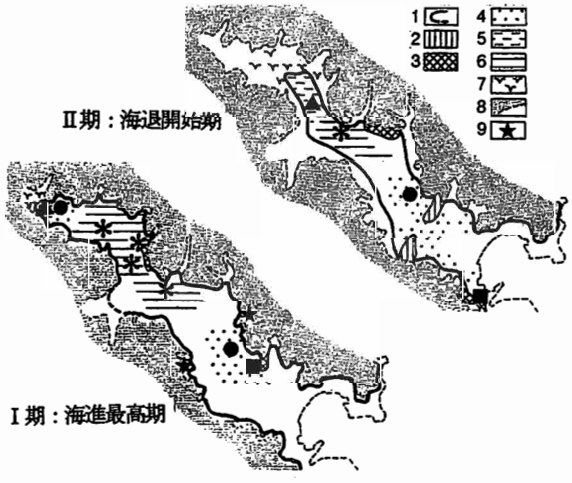
貝塚は当時の海岸線付近の台地上に形成されており、貝層の構成貝類は近くの海況を示していると一般的に考えられている。そのため、貝塚の分布と構成貝類は貝塚形成時の海岸線や古環境を調べるのに有効なものとされる。近年、地質・古生物学の分野からの研究成果が加えられている。自然貝殻層中の貝化石と貝塚の構成貝類を対比して、貝塚形成時の古環境の変化を探ることが可能になってきた（松島義章 1974)。松島氏の報告資料によれば（松島義章 1996)、草創期から早期前葉の海面は緩やかな上昇があり、現在より約－40mの位置にある。早期中葉にかけて急激な上昇となり、約 6500 年前に現在の海水面を超え、早期末葉から前期前半には＋3.5～＋4.4mの高い位置に到達した。海進最高期直後の前期末から中期初めになると低下が始まり、＋1.5mまで下がる。後期にかけては若干上昇をみるが、晩期から弥生期にかけて再び低下し、多少の上下があって現在に至る。



第７図　多摩川・鶴見川下流域から金沢八景平潟湾までの地域における約 15000 年前以降の相対的海面変化曲線（松島 1996)

この成果を踏まえると、早期前葉から海進最高期までの海面は、海抜約－40mから＋4.4mまで上昇を続けたことになる。このことは早期前葉の夏島式期から前期前半の黒浜式期の間に形成された貝塚のうち、海抜約＋4.4m以下の地形上に形成された貝塚は海面上昇のため、海中や海成沖積層の下に埋没あるいは海食作用によって、消滅してしまったことが考えられる。海抜０mに海面が達するのが早期末葉であるとすれば、これ以前に埋没段丘や埋没波食台の地形上に形成された可能性のある貝塚は現在、存在を確認できない。夏島式期や子母口式期の貝塚が少ない理由にあげられるものであろう。

横須賀市吉井貝塚の貝層（赤星直忠 1962）は、海進から海退への環境変化を示す例である。下層は早期末葉には海面上昇が速く、湾奥には泥質の干潟が発達してマガキやハイガイの生息に適した環境がつくられことを示す。上層は中期後葉にかけて上昇が緩み、湾は砂質の干潟に変わり、岬の先端は岩礁海岸化したことを示している（松島義章 1988）。



1 旧海岸線　2 砂堆　3 波食台　4 砂(海成)　5 シルト(海成)
6 粘土(海成)　7 泥炭(陸成)　8 丘陵　9 貝塚　10 干潟群集
11 内湾砂底群集　12 内湾泥底群集　13 岩礁群集

第８図　平作川低地の完新世における古地理の変遷(松島 1988)

生業を導く

貝層から出土する生活遺物は生業や活動域の問題を導いている。貝類や魚類は生息域が規定され、これらの採取、採捕のために生息域へ出向くという人の行為をみることができる。

貝塚は構成貝類の生息域による類別から沿岸性貝塚、内湾性貝塚、汽水性貝塚に大別できる。実際には、異なる生息域の貝類が割合を変えながら混在する場合が多い。近年、貝類や魚類の生息域を示す資料をもとに、生業に関する問題をとりあげた研究が増えつつある。相模湾沿岸部の貝塚群（川口徳治朗 1982、桜井準也 1999）、三浦半島海岸部の貝塚群（釼持輝久 2000）、東京湾沿岸地域の貝塚群（松田光太郎 2006）などがそれで、各地域の貝塚群を形成時期、形成地点、同時期の集落遺跡と関わらせながら採貝・漁撈活動のあり方を検討している。

貝塚からは全時期を通じてシカとイノシシを中心にウサギ、タヌキ、サルなど多くの動物骨が出土する。小田原市羽根尾貝塚で傷痕や破砕痕のあるシカとイノシシを主体とする動物骨が多量に出土した。捕獲後の解体場を彷彿させるものだが、ここでの動物骨の総量は魚骨よりはるかに多く、狩猟の依存度が高い中での漁撈活動であったことが推測される。

木の実など植物採集の形跡は遺存度が低いため全体像がつかめない。確認できるものとしてクルミ、クリ、ドングリ、トチなどの堅果類やヤマノイモ、クズ、ヒシ、ヒョウタンなどがあげられる。羽根尾貝塚の泥炭質包含層から大量のクルミが集中して出土した。これに伴って石皿、凹石、磨石、敲石、礫器など木の実の加工、調理用具と考えられる石器類が多量に出土している。横浜市下組東貝塚をはじめ（戸田哲也他 2006）、多くの貝塚からこうした石器類が普遍的に出土しており、植物採集が通常的に行われていたことが予想される。

交　易

交易に関する資料として、オオツタノハガイ製貝輪と黒曜石について触れる。

オオツタノハガイ製貝輪

神奈川県内出土例は横須賀市吉井貝塚（神沢勇一 1962）と横浜市宮の原貝塚（金子浩昌 1972）に各１例ある。吉井貝塚例は早期末葉、宮の原貝塚例は中期に所属する。オオツタノハガイは潮間帯より水深 10mの岩礁に生息し、現在では伊豆七島、小笠原諸島以南に分布し、奄美諸島、沖縄諸島に生息域の中心がある。吉井貝塚と宮の原貝塚のいずれも、構成貝類の中にオオツタノハガイは含まれていない。この現象は三浦半島以北の関東地方、東北地方の検出例のある諸貝塚でも同様である。このことは、これらの地域がオオツタノハガイの生息する地理的環境になかったことを意味し、オオツタノハガイ製貝輪が製品として南の遠隔地から搬入されたことを示唆している（川口徳治朗 1989）。

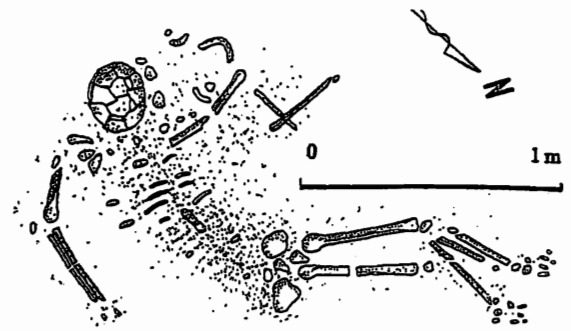
黒曜石

縄文時代を通じて、一般的な石器の素材である。黒曜石は火山岩の一種で、溶岩の珪質分が急冷して固まったものであるから、河原や渓谷に出向けば容易に入手できるというものではない。産出地は限定され、そこから運ばれる黒曜石の道があった。神奈川県内遺跡で出土する黒曜石は信州系産、神津島系産、箱根系産のものがある。平塚市五領ヶ台貝塚（日野一郎他 1970）と横浜市源東院貝塚（坂詰秀一 1954）では大型の板状片や多量の剥片が出土した。五領ヶ台貝塚出土の黒曜石は 70%が神津島系産と考えられている。原石のまま搬入され、貝塚内で製品に加工されたのであろう。

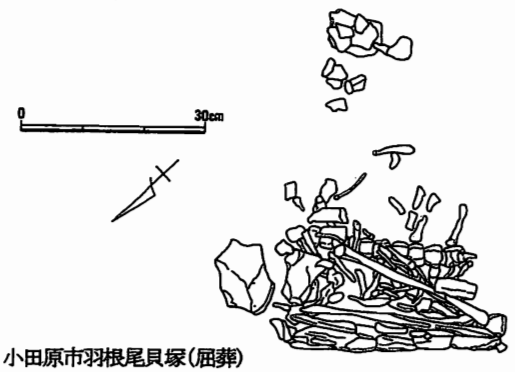
４　葬送のかたち

貝層に関わって葬送の遺構が発見されることがある。神奈川県内最古の人骨出土例は、早期前半の横須賀市平坂貝塚である（岡本勇 1953）。貝層下のローム層面より膝関節を僅かに屈曲し、俯臥の姿勢をとって出土した。鈴木尚氏はこの骨を鑑定し、身長 163 cm以上の熟年男性で、歯の磨滅痕が激しく、幼年から栄養失調を繰返し、骨骼に老年性の変化がみられるとした（鈴木尚 1953）。

前期の人骨出土例は平塚市万田貝塚と小田原市羽根尾貝塚にある。万田貝塚では獣骨や魚骨と共に頭蓋骨、下顎骨などが出土した（山崎直方ほか 1925）。羽根尾貝塚では貝層上面より、やや散乱状態で、手足を強く折り曲げた屈葬のかたちで出土した。明瞭な掘り込みや副葬品は確認されていない。中期の明確な出土例は横浜市称名寺貝塚群のＩ貝塚である（金子浩昌 1984）。３体が出土し、中期末葉に所属する。１体は貝層間の土層を掘り込んで、頭骨を上に各部所の骨を折り重ねた状態で埋葬されていた。二次埋葬と考えられ、成人女性骨である。他の２体は別々の貝層から出土した。いずれも成人男性の下顎骨のみの出土である。



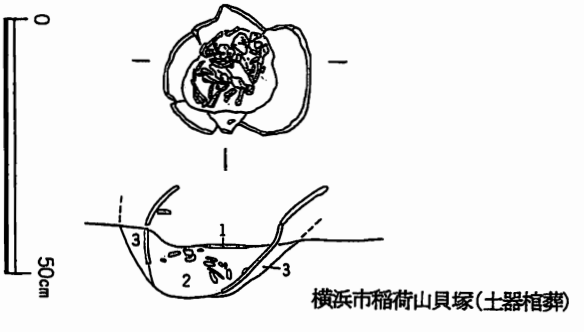
横須賀市平坂貝塚



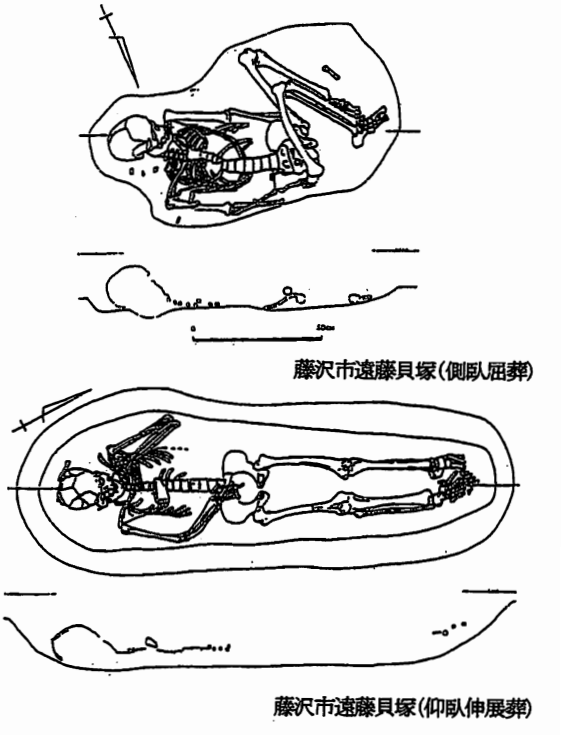
小田原市羽根尾貝塚(屈葬)

第９図　埋蔵人骨（１）

後期になると出土例が多い。1906（明治39）年にN.Gマンローが横浜市三ツ沢貝塚の発掘で４体の人骨を発見している。２体は伸展葬、２体は頭蓋骨のみである。称名寺貝塚群のD貝塚で16体、H貝塚で１体出土している。D貝塚出土例のうち12体は貝層下の砂層より、約22㎡の範囲中にまとまって出土し、集合墓地の様相を呈していた（吉田格他 1968)。男性５体、女性２体、性別不明５体で、熟年が多く６体、壮年３体、幼児２体、胎児１体であった（小片保 1968)。埋葬の形態は仰臥伸展葬が２体、仰臥屈葬３体、土器中に胎児骨破片の入ったもの１体であった。熟年男性で仰臥屈葬の１体は下顎に抜歯がみられた。横浜市稲荷山貝塚からは６体が出土している（松田光太郎他 2002)。そのうち３体が埋葬形態を知ることができる。１体は仰臥伸展葬の成人女性で、頭部を消失しているが､脚部は貝層中から出土した。他の２体は深鉢形土器中に埋納されていた。共に胎児骨あるいは新生児骨が入っていた。称名寺貝塚でも同様に胎児骨の入る埋葬例が確認されている｡この貝塚からは鉢形土器中にイヌ骨が入る例、倒置の鉢形土器に貝殻が入る例、掘り方に埋設された深鉢形土器中に灰が入る例などがある。これらが葬送と関わるものなのか注目される。大磯小学校遺跡からも微量な貝類が散在する包含層で２体の人骨が出土している。１体は詳細が不明であるが、1976（昭和51）年の調査では頭部を鉢形土器で被った状態で出土した（鈴木一男 1976)。土器は口縁部を下に向け、頭蓋骨、頚骨、鎖骨を被い、完全遺体の頭部までを被う埋葬形態であったと考えられている（森本岩太郎他 1976)。この人骨は壮年男性で、左上顎に抜歯が認められた。茅ヶ崎市堤貝塚と藤沢市遠藤貝塚にも出土例がある。堤貝塚は混土貝層中より頭蓋骨と大腿骨が散乱状態で出土した（岡本勇 1968)。遠藤貝塚では貝層中より１体、貝層下より３体が出土した（寺田兼方他1993)。貝層中の１体は散乱状態での出土で、熟年男性の下肢骨であった（森本岩太郎 1993)。貝層下の３体は深さ 25 cm前後の楕円形土壙内に埋葬されていた。２体は側臥と仰臥の屈葬のかたちをとり、120×60 cmと 120×70 cmの土壙内に埋葬されていた。いずれも壮年男性骨で抜歯されていた。別の１体は190×60 cmの土壙内に仰臥伸展葬のかたちで埋葬され、胸中央部には10×６cm大の河原石が置かれていた。壮年女性骨で、これも抜歯されていた。



第10図　埋蔵人骨（２）



第11図　埋蔵人骨（３）

おわりに

神奈川の縄文文化について、貝塚情報から概観してみた。縄文遺跡の約３％の貝塚資料だけでは、縄文文化を語りきれない。しかし、貝塚情報なくしては解明できないこともある。古環境の復原、生業に関わる活動域、葬送などの問題がそれである。近年、自然科学分野の参加があって、こうした研究はかなり進んでいる。一方で貝塚が関わる遺構、遺物の考古学的分野の研究は更に精査する必要がある。既に調査が終わり、庫に収められた貝塚資料がある。新たな視点での研究は、これらの資料をもう一度とり出して新たな情報資料として復活させることになる。なお、本発表に際し、「神奈川の貝塚に学ぶ会」の諸氏より資料提供を受けた。お礼を申し上げる。

引用・参考文献

戸田哲也他　2003「羽根尾貝塚」羽根尾工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

川上久夫他　1997「間口東洞穴遺跡」松輪間口東海蝕洞穴遺跡調査団

八木壯一郎　1907「中間土器（弥生式土器）の貝塚調査報告」東京人類学会雑誌第22巻250号

成田勝範・冨永富士夫　1997「芹沢・久保山Ａ遺跡」第８回茅ヶ崎市遺跡調査発表会　発表要旨

赤星直忠・酒詰仲男　1938「神奈川県三浦郡三崎町諸磯貝塚に於ける竪穴住居址発掘に就いて」史前学雑誌第第10巻３号

忍澤成規2003「西ノ谷貝塚Ｊ57号住居跡内貝層の調査」『西ノ谷貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告33

岡本孝之　1994「第三の貝塚」湘南考古学同好会々報54

岡田威夫・水澤裕子編　1988「折本西原遺跡－Ⅰ」折本西原遺跡調査団

中村若枝　1990「山田大塚遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XI

松島義章　1974「神奈川県にみられる縄文海進最高期の海」神奈川県博物館協会会報第32号

赤星直忠　1962「横須賀市吉井城山第一貝塚調査概報（一）」横須賀市博物館研究報告（人文科学）６

澤真澄・松島義章・澤　祥　1988「三浦半島平作川低地の完新世の古地理」『神奈川の自然と人文』伊倉退蔵先生退官記念論文集

松島義章　1996「貝類群集による完新世の環境変遷－横浜市南部金沢八景の平潟湾を例として－」関東平野４

川口徳治朗　1982「相模湾沿岸地域の縄文時代貝塚出土の構成貝類について」鎌倉第40号

桜井準也　1999「貝塚出土の動物遺存体からみた活動域－相模湾沿岸の縄文貝塚を事例として－」東国歴史考古学研究所紀要第１集

釼持輝久　2000「三浦半島古久里浜湾における縄文時代の漁撈について－自然環境・魚介類・漁撈具の関係を中心として－」考古学論究第７号

松田光太郎　2006「縄文前期の東京湾における漁撈の様相」神奈川考古第42号

戸田哲也他　2006「下組東貝塚　発掘調査報告書」玉川文化財研究所

川口徳治朗　1989「縄文時代貝塚出土の貝製品に関する用途的研究」昭和63年度科学研究費補助金研究成果報告書

神沢勇一　1962「横須賀市吉井城山第一貝塚の骨角牙器・貝製品（一）」横須賀市博物館研究報告（人文科学）６

金子浩昌　1972「骨角牙器品と貝製品」『宮の原貝塚』武蔵野美術大学考古学研究会

日野一郎他　1970「平塚市五領ヶ台貝塚調査報告」平塚市文化財調査報告書第９集

坂詰秀一　1954「鶴見川中流の石器時代遺蹟調査概報(1)　横浜市港北区源東院貝塚」銅鐸10

岡本勇　1953「相模・平坂貝塚」駿台史学第３号

鈴木尚　1953「平坂人の骨骼」駿台史学第３号

山崎直方・八幡一郎・中谷治宇二郎　1925「相模国中郡旭村万田貝殻坂遺跡」人類学会雑誌第40巻５号

金子浩昌他　1984「称名寺Ⅰ貝塚発掘調査報告」称名寺貝塚発掘調査団

吉田格・比留間博　1968「横浜市称名寺貝塚調査概報」武蔵野第47巻2･3号

小片保　1968「称名寺貝塚人骨所見概報」『横浜市称名寺貝塚調査概報』武蔵野第47巻2･3号

松田光太郎・大塚健一・中村賢太郎　2002「稲荷山貝塚」かながわ考古学財団調査報告131

鈴木一男　1976「大磯小学校遺跡」大磯町埋蔵文化財発掘調査報告書第１集

森本岩太郎・小片丘彦・平本嘉助　1976「大磯小学校遺跡出土の人骨について」『大磯小学校遺跡』大磯町埋蔵文化財発掘調査報告書第１集

岡本勇　1968「堤貝塚」文化財資料第二集

寺田兼方・澤田大多郎　1993「遠藤貝塚」藤沢市西部開発地域内埋蔵文化財発掘調査団

森本岩太郎　1993「遠藤貝塚出土人骨について」『遠藤貝塚』藤沢市西部開発地域内埋蔵文化財発掘調査団

テーマ発表　神奈川の遺跡調査をめぐる30年　旧石器時代

―石器の遺跡間接合と住居状遺構の発見―

鈴木（すずき）　次郎（じろう）

1．はじめに

旧石器時代の研究はいまだ歴史が浅く、これまでに実施された主要な遺跡調査の大半が過去30年に行われたものであり、研究が大きく進展したのも最近のことである。

ここでは、これまでの本県の遺跡調査・研究について、①重層遺跡の調査と石器群の編年研究、②石器の遺跡間接合、③新発見の各種生活遺構を取り上げ、その成果と課題を概観することにしたい。

また、この30年の間には、日本考古学界にぬぐい去ることのできない大きな汚点を残した遺跡捏造事件も起こった。本県の遺跡調査・研究は、幸いにしてこの事件には直接関係しなかったが、この事件は、旧石器時代研究の問題だけではなく、教科書の内容などにも直接影響し社会問題ともなった大事件であり、まず最初に取り上げることにしたい。

2．遺跡捏造事件について

日本列島に3万年前を遡る「前期旧石器文化」が存在したかどうかについては、1960年代後半に盛んに論争が繰り広げられたが、1976・1979年に行われた宮城県「座散乱木」の調査によって「前期旧石器文化」が確実に存在するという決着がなされた。その後、宮城県「馬場壇A」・「高森」などの調査により旧石器文化の起源は数十万年前の原人段階にまで遡るとされた。そして、北海道から関東地方までの広範囲から多数の「同種の遺跡」が発見され、本県に隣接する東京都多摩ニュータウンにおいても調査が行われ、武蔵野ローム層下部から「石器」が出土したと報告された。

1980年代後半になると、この時代の研究は大方の研究者に受け入れられ、1990年代には約十五万年前を境に「前期旧石器時代」と「中期旧石器時代」に分けられるなど編年研究も発表された。また、宮城県「上高森」や埼玉県「小鹿坂」では「石器埋納遺構」や「建物遺構」なども発見・報告され、その高度な文化内容が注目された。

2000年11月、報道機関により「上高森」での遺跡捏造の瞬間が映像によって暴かれた。これまで発見された「前期・中期旧石器時代遺跡」のほとんどの調査に捏造の映像に映し出された人物が関与していたことから、日本考古学協会を中心に学界と行政の協力により綿密な検証作業が行われた（日本考古学協会 2003 他）。その結果、「座散乱木」以降調査された「前期・中期旧石器時代遺跡」のほとんどが縄文時代の石器を埋め込み捏造された可能性が極めて高いという結論が出され、遺跡捏造が20年余りにわたり継続的に行われていたことが明らかにされた。そして、教科書の内容は書き替えられ、歴史博物館では展示内容の変更を迫られた。

遺跡捏造事件がここまで重大で深刻な問題になったのは、もちろん捏造を行った本人に最大の責任があることは言うまでもないが、長年チームを組んで一緒に調査を行ってきた関係者と、さらには、こうした調査結果を無批判に受け入れていた私を含む多くの研究者と学界全体に責任があり、背景としては常に最古・最大といったトピックス

的な話題を追求するマスコミの姿勢もあったと考えられる。幸い、本県はこの遺跡捏造事件の直接的な影響は受けていないが、こうした遺跡捏造は今後ともまったくありえないとは言えず、常に調査内容に対する確認・検証といった批判的な姿勢が求められる。

なお、検証作業が終了した現在、日本列島に人類が最初に居住したのはいつのことかあらためて問題提起されている。南関東では、綾瀬市吉岡遺跡群Ｄ区Ｂ５層や東京都中山谷遺跡Ｘ層下部など立川ローム層基底部の石器群が約４万年前とされ、その下層の武蔵野ローム層からは石器の出土は確認されていない。南関東以外でこの年代を遡る可能性のある石器群は、遺跡捏造と無関係の遺跡やその後の新たな調査例を含め、岩手県金取遺跡、長野県石子原遺跡・竹佐中原遺跡、長崎県入口遺跡、宮崎県後牟田遺跡などがあるが、これらの石器群の評価はいまだ確定していない。

３．重層遺跡の調査と石器群編年研究の進展

1977年7月～12月に調査が行われた綾瀬市寺尾遺跡（第２回発表会）は、本県における重層遺跡の大規模な発掘調査の先駆けとして注目される。特に、ＡＴ直下から多量に出土した黒曜石製ナイフ形石器を中心とする石器群や、ローム層上部から出土した土器と石斧を伴う槍先形尖頭器石器群は、それぞれ関東地方のⅥ層段階のナイフ形石器石器群と御子柴系石器群の標識的な資料として位置づけられている（神奈川県教育委員会 1980）。その後、大和市下鶴間長堀遺跡（第４回発表会）、座間市栗原中丸遺跡（第６回発表会）、海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡・相模原市橋本遺跡（第７回発表会）、大和市長堀南遺跡・藤沢市代官山遺跡（第８回発表会）、大和市月見野遺跡群上野遺跡第１地点（第９回発表会）、相模原市中村遺跡（第10回発表会）など、重層遺跡の大規模な調査が毎年のように報告され、膨大な資料が蓄積された。そして、相模野台地に厚く堆積する関東ローム層の出土層位にもとづき石器群の編年研究が進められ、他地域にはみられない精緻な相模野編年が確立された。その成果と課題については、2001年３月の神奈川県考古学会考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」において詳細に報告されていることから（神奈川県考古学会　2001）、誌面の関係もありここでは省略する。

４．石器の遺跡間接合とその意味するもの

2000年７月、綾瀬市吉岡遺跡群Ｂ区（第２次調査）の石器と藤沢市用田鳥居前遺跡（第21回発表会）の石器が接合した。これは、両遺跡から同じＢ１層下部の石器群が出土しており、しかも両遺跡の整理作業が同じ調査機関により同じ施設内で並行して行われていたという好条件が揃っていたとはいえ、２㎞も離れた別遺跡の石器が３個体も接合したということは、旧石器時代の遺跡群のあり方を理解するうえで画期的な出来事である（かながわ考古学財団 2002、2003）。

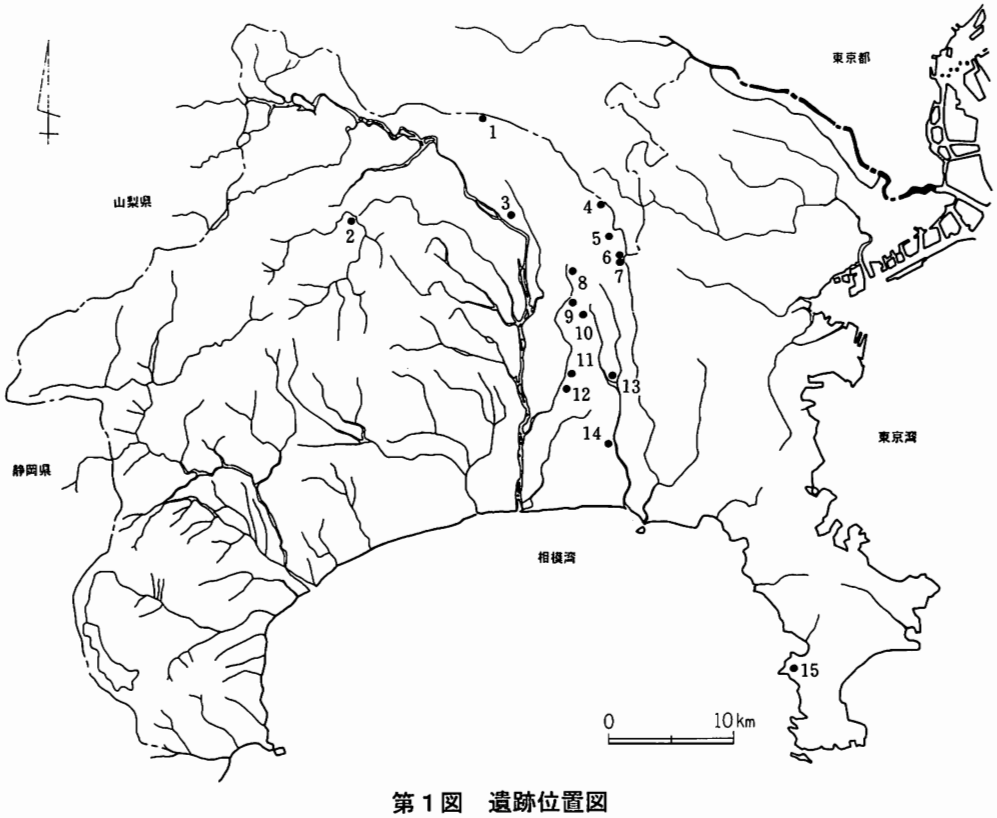
遺跡から出土した全石器を原石の母岩別（個体別資料）に分けて接合作業を試みるという石器群の分析方法は、1966年と1973年に調査が行われた埼玉県砂川遺跡の報告を契機として本格的に始められた。

ナイフ形石器文化後半の石器群は、通常、数箇所のブロックとよばれるまとまりをなして出土するが、各ブロックの出土石器を原石母岩ごとの個体別資料に分けて観察すると、他の遺跡やブロックで製作され持ち込まれた石器と、そのブロック内で製作され残された石器の二種類の石器群から構成される。そして、ブロック内で製作された石器の一部は、他のブロックや遺跡外に持ち出されて使用されている。このように、石器製作作業という行為をとおしてブロック間の石器の供給と移

動の関係が明らかにされたが、こうした石器の供給と移動の関係は、ブロックをこえた遺跡単位でも存在すると想定されていた。また、大規模な遺跡から発見される多数のブロックは、個体別資料の共有関係や石器・礫の接合関係などがみられ、相互に強い結びつきが認められる数箇所のユニットとよばれるブロック群に分けることができる。こうしたユニットは、一集団が同時に居住した集落規模を示し、各ユニットは、集団が回帰的に移動する遊動生活によって繰り返し居住した結果、残されたものと考えられている。

ここで吉岡遺跡群Ｂ区と用田鳥居前遺跡についてみてみると、両遺跡は、ともに目久尻川東岸の丘陵上に立地し、南北に約２キロメートルの距離を隔てて位置する（第１図）。

吉岡遺跡群Ｂ区の遺物群Ⅳ（Ｂ１層）では、２ブロックないし３ブロックからなるユニット１箇所が礫群１基を伴って発見され、ナイフ形石器など合計 732 点の石器群が出土している。この石器群は、38 の母岩（個体別資料）に分けられ、11 以上の母岩で盛んに石器製作作業を行っていたことが明らかにされたが、このうち３母岩について用田鳥居前遺跡の石器との接合関係が確認されたのである。接合関係の認められた個体別資料のうち硬質細粒凝灰岩を石材とする母岩№Ⅳ１は、ナイフ形石器・剥片類・石核など合計 212 点の石器



第１図　遺跡位置図

1．相模原市橋本遺跡
2．清川村宮ヶ瀬遺跡群
3．相模原市田名向原遺跡
4．相模原市中村遺跡
5．大和市月見野上野遺跡
6．大和市下鶴間長堀遺跡
7．大和市長堀南遺跡
8．座間市栗原中丸遺跡
9．海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡
10．綾瀬市寺尾遺跡
11．綾瀬市吉岡遺跡群
12．藤沢市用田鳥居前遺跡
13．藤沢市代官山遺跡
14．藤沢市№211 遺跡
15．横須賀市打木原遺跡

から構成され、その接合資料をみると人頭大に近い大形の河原礫を3個体以上に分割して剥片生産を行いナイフ形石器などを製作している。そして、分割した個体（石核）の一部と素材剥片や加工された石器の一部が遺跡外に持ち出されており、用田鳥居前遺跡から出土したナイフ形石器1点と剥片類3点がこの母岩と接合した。また、黄玉石（碧玉）の母岩№Ⅳ3と珪質頁岩の母岩№Ⅳ20は、前者がナイフ形石器や剥片類など28点、後者が剥片類12点の石器から構成され、吉岡遺跡群B区では、ともにわずかな剥片生産と石器の加工が行われただけで石核などが遺跡外に持ち出されており、用田鳥居前遺跡から出土した黄玉石の彫器1点・剥片2点と珪質頁岩の剥片1点がそれぞれの個体に接合した。

一方、用田鳥居前遺跡第Ⅳ文化層（B1層）では、互いに個体別資料の共有関係や石器の接合関係が認められない3箇所のユニットと大型炭化材の集中が1箇所発見されている。第3・4石器集中地点とよばれる2ブロックから構成されるユニットは、散漫な礫群2基を伴い、ナイフ形石器など合計45点の石器が出土している。このうち叩石と台石を除く28点の石器は11の母岩（個体別資料）に分けられ、2個体でわずかな剥片生産の痕跡を残すだけで、大半は吉岡遺跡群B区など他の遺跡において製作された石器であり、この遺跡に移動してきた際に持ち込まれたものである。

このように、吉岡遺跡群B区と用田鳥居前遺跡の石器の接合は、旧石器時代の集団が目久尻川に沿って遊動生活を行っていたことを具体的に証明するものであり、個体別資料分析によって集団が遺跡間を回帰的に移動したとする仮説を裏付ける重要な証拠といえる。

5．各種生活遺構の発見とその評価

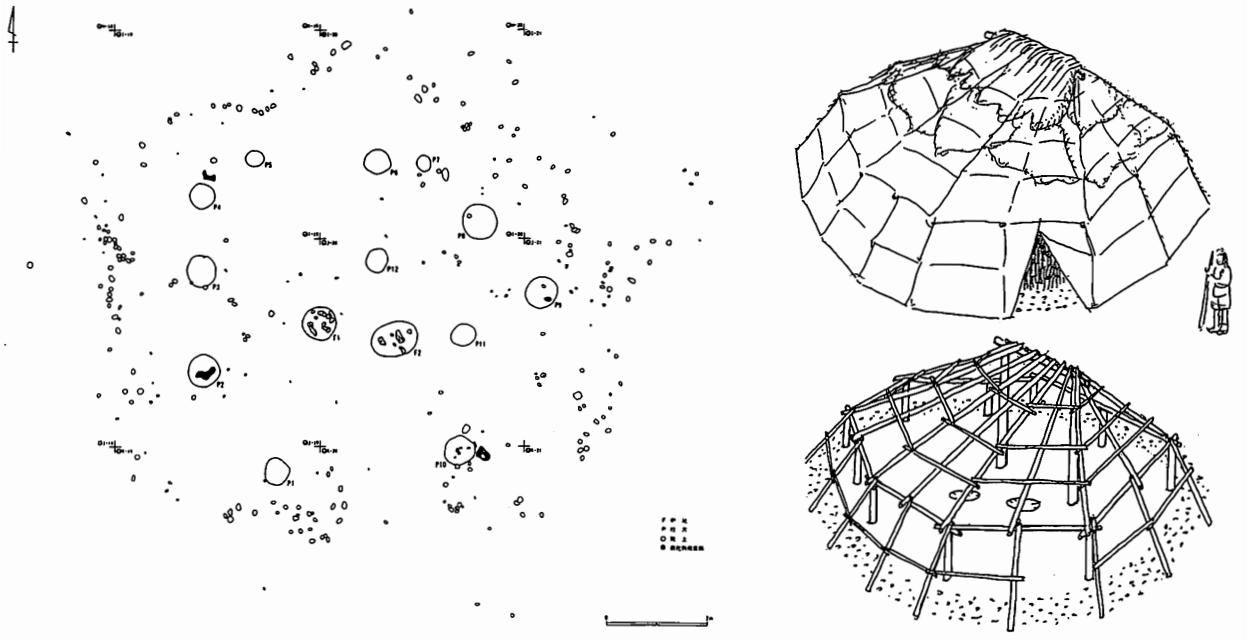
旧石器時代の遺跡では、焼けた河原礫が集合した礫群を除き、縄文時代以降の遺跡にみられる竪穴住居址などの生活遺構が発見されることはきわめて少ない。多くの場合、石器と石器の製作途上で生じた石片などの出土によって生活の場所（遺跡）であることが判明する。しかしながら、これまでの30年間の遺跡調査により、少数例ながら明確な生活遺構が発見された遺跡もあり、旧石器時代の生活文化を知る重要な情報を提供している。以下、これまで発見された主な生活遺構を取り上げ、その提起する問題点について述べることにしたい。

住居状遺構

平成9年2月～8月に調査が行われた相模原市田名向原遺跡（第21回発表会）は、相模川を臨む陽原段丘上に立地するナイフ形石器文化終末期の遺跡であり、全国的にも稀少な住居状遺構が発見されたことから、平成11年1月に国史跡に指定され保存がはかられた。その後、平成13年7月～8月には、史跡整備を目的とした調査が実施されている（相模原市教育委員会 2003、2004）。

住居状遺構は、竪穴の存在こそ確認されなかったが、径10mほどの外周円礫によって外部と画され、その内部を径6m前後に巡る10箇所の柱穴、中央に位置する柱穴と炉址各2箇所が確認されている。外周円礫が住居の内外を画することは、遺物分布状態によって示され、多量に出土した石器や剥片類は外周円礫の内部に限定して分布しており、壁材の存在も想定される。また、柱穴の配置からは、2本の棟持柱を中心に10本の柱によって屋根を支えた住居が想定され、内部に2基の炉をもつ（第2図）。

外周円礫の性格は明らかにされていないが、富士玄武岩を主な石材とする磨石状円礫が多く、円礫とともに石核や大形剥片なども分布する。また、遺構内部からは、200点近い槍先形尖頭器を中心に、ナイフ形石器、掻器、削器、楔形石器等の石



第２図　田名向原遺跡の住居状遺構とその復元案（相模原市教育委員会 2004）

器とおもに槍先形尖頭器の製作時に生じた 2,500 点をこえる多量の剥片類が出土している。調査時の掘り下げは、柱穴や炉址が確認された遺構面までしか及んでいないことから、住居状遺構にはさらに多量の石器が残されていると考えられる。

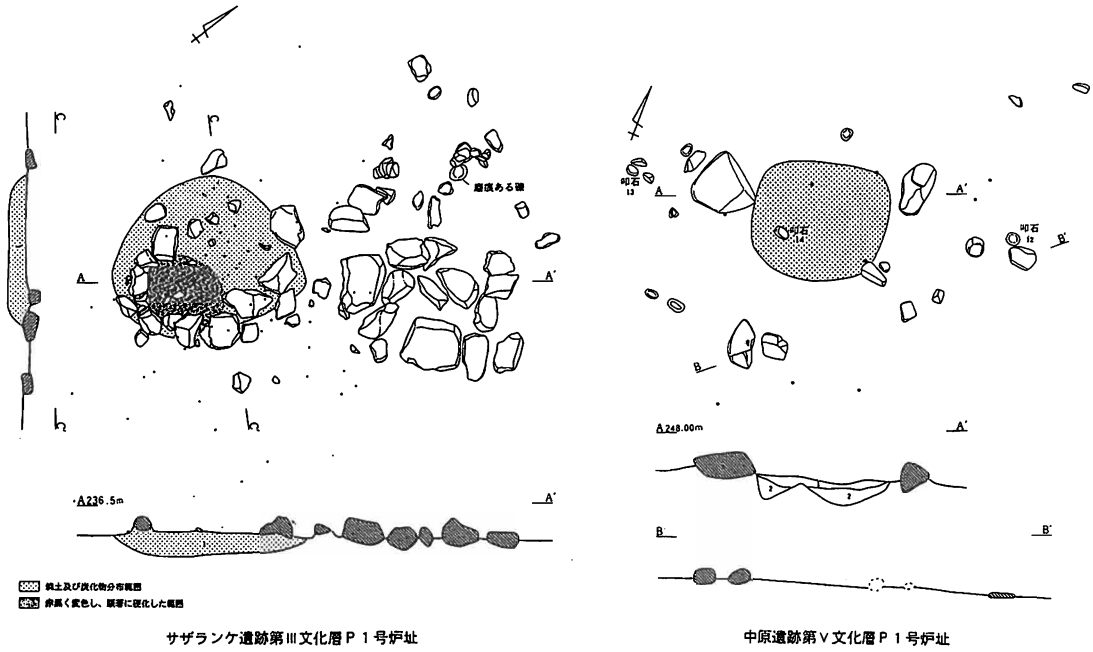
次に、田名向原遺跡と住居状遺構の性格について検討してみよう。

田名向原遺跡の住居状遺構では、槍先形尖頭器を中心とした石器製作作業を盛んに行っていたことが明らかにされたが、住居状遺構と時期を同じくする槍先形尖頭器を中心とした石器群は、住居状遺構の周辺からも数箇所のブロックを形成して出土しており、各ブロックでも槍先形尖頭器などの石器製作作業が行われている。また、ブロックに隣接して礫群も発見されている。こうした遺跡のあり方は、住居状遺構を除けば相模野台地の遺跡群にごく普通にみられるもので、田名向原遺跡は、回帰的な遊動生活を行っていた集団が数回にわたり少しずつ場所を替えてユニットを形成したと考えられる。こうした中で、住居状遺構は建物施設として堅固に作られ、槍先形尖頭器の製作作業を長期間行っていたとみなされる。槍先形尖頭器は、黒曜石を主要石材とするが、その黒曜石産地をみると信州蓼科を中心に信州和田峠、信州諏訪、伊豆柏峠、箱根畑宿、北関東高原山など各地の黒曜石がみられ、石器製作作業は何回にもわたって断続的に行われたと想定される。田名向原遺跡が残された時代は、遺跡が立地する陽原段丘（塩田面）が形成された直後で、住居状遺構は川面とほとんど高低差のないまさに川べりに構築された建物であったことと、長期間にわたり断続的に建物が使用されたと考えられることから、住居状遺構は、秋に遡上するサケなどを対象とした季節的な河川労働に関係した番屋的な施設で、槍先形尖頭器は漁撈活動にも使用された可能性が考えられる。

石囲い炉

1985 年 7 月～1995 年 3 月に調査が行われた清川村宮ヶ瀬遺跡群（第 14 回発表会）では、複数の遺跡から石囲い炉が発見された（第３図、かながわ考古学財団 1996 他）。

Ｌ１Ｈ層から槍先形尖頭器石器群を伴って発見されたサザランケ遺跡の石囲い炉は、20 点余りの拳大から幼児頭大の河原礫を「Ｕ字形」ないし「コ



第３図　宮ヶ瀬遺跡群の石囲い炉

の字形」に配し、1.0m×0.7mの規模をもつＰ１号炉址など２基確認された。炉址の内部からは焼土と炭化物が検出され、中央部のローム層は赤黒く変色して硬化しているのが特徴的に観察された。２基の炉址は、ともに石器と剥片類が集中したブロックを形成しており、炉の傍らで槍先形尖頭器等の石器製作作業を行っていたことを示している。

Ｂ１層下部では、中原遺跡から１基、上原遺跡から２基の石囲い炉がナイフ形石器石器群を伴って発見されている。これらの炉址は、サザランケ遺跡のＰ１号炉址とは異なり、焼土と炭化物が検出された周囲に拳大から幼児頭大あるいは人頭大の河原礫を散漫に配したもので、上原遺跡では、このほか礫を伴わず焼土と炭化物だけが検出された炉址（地床炉）１基も発見されている。いずれも焼土が確認された範囲は長径 70 cm前後の楕円形をなし、中心部は赤黒く変色して硬化したローム層が特徴的に観察され、炉址は石器が分布するブロック内またはブロックに隣接して位置している。

石囲い炉は、県内では宮ヶ瀬遺跡群以外に検出例は知られないが、県域をこえて西方に隣接する箱根山麓や愛鷹山麓の遺跡群から 10 例報告されており、その時期は、宮ヶ瀬遺跡群と同様のナイフ形石器文化後半を中心に、ＡＴ相当層のナイフ形石器文化前半から細石刃文化まで広範に及ぶ。県内では、石囲い炉が宮ヶ瀬遺跡群以外から発見されていないことは、はたして地域的な特徴としてとらえうるのか、あるいは宮ヶ瀬遺跡群の場合、ローム層堆積の条件などが相模野台地と異なって焼土等の検出が容易だったのか、今後検討を要する。宮ヶ瀬遺跡群では、炉址中央部のローム層はいずれも赤黒く変色して硬化していることが観察されており、今後の旧石器時代遺跡の調査では、こうした特徴の観察が炉址検出のキーポイントとなりうる。

大形炭化材

1994 年 4 月～1998 年 12 月に調査が行われた藤沢市用田鳥居前遺跡（第 21 回発表会）からは、大形炭化材が発見された（かながわ考古学財団 2002）。

炭化材が発見されたＢ１層では、50m×30mの範囲に１～２ブロックから構成されるユニットが３箇所確認され、その西側から大型炭化材が集中

して発見された。炭化材は、1.6m×0.8mの範囲に５箇所の集中部(固まり)をなして出土したが、樹種はすべてトウヒ属の材である。中央の第３集中部は、分厚い板状の材が直立した状態で出土し、その下部からは明瞭なピットが検出されている。これらの炭化材の周辺からは石器や焼け礫などは出土しておらず、炭化材には明確な加工痕跡も認められないことから確実な人為施設とは断定できないものの、ピットの存在と炭化材の出土状態から板状の材を掘立柱状に建ててあったものが落雷などによる火災によって崩れ落ちて炭化した可能性が考えられる。

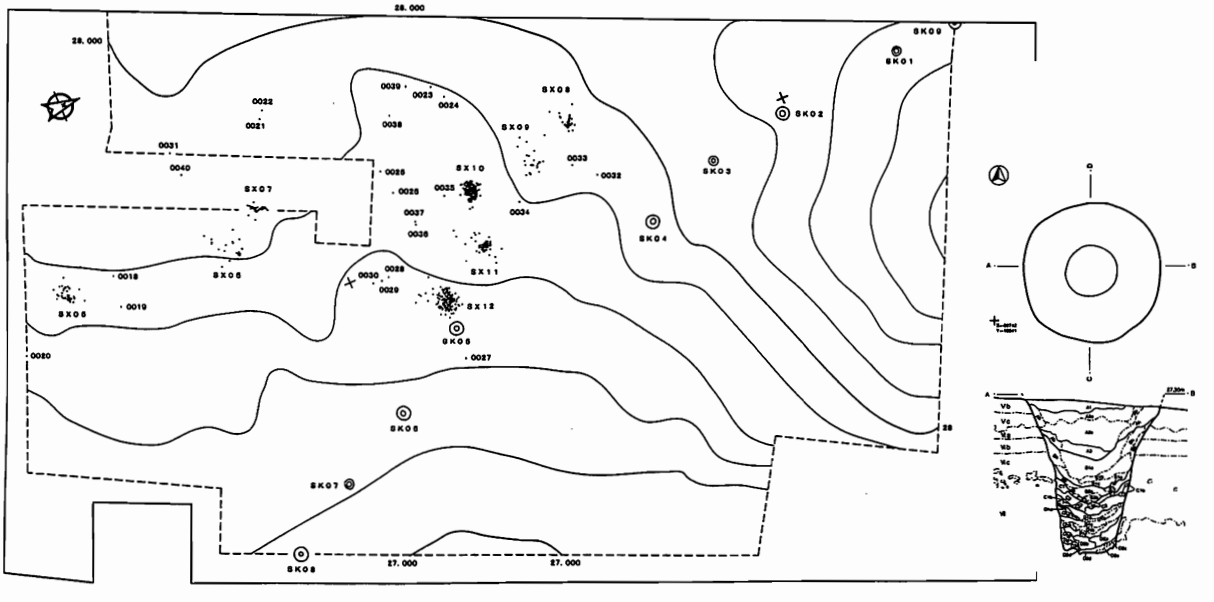
用田鳥居前遺跡のＢ１層から発見された３箇所のユニットは、相互に石器の接合関係や母岩の共有関係が認められず、それぞれ異なった時期に残されたことが想定される。それは、同じ集団が回帰的な遊動生活を行ったことによるもので、掘立柱状の施設が存在したとするならば、それは繰り返し同じ地点に戻るためのランドマーク的な性格をもったものと考えられる。

陥穴状土坑群

2000 年 10 月～2001 年 3 月に調査が行われた横須賀市打木原遺跡（第 25 回発表会）からは、陥穴状土坑群が発見された（第４図、横須賀市教育委員会 2002)。

陥穴状土坑が検出された層位は、ＡＴ下位のＢ３層下部～Ｂ４層上部で、土坑は、確認面で径 1.0～1.5m、坑底で径 0.4～0.6m、深さ 1.1～1.6m の断面逆台形の円形をなし、10m前後の間隔をおいて４基ないし５基がほぼ南北に直線状あるいは緩やかな弧状をなして配置されている。打木原遺跡では、この９基のほか 1986 年～1989 年に行われた確認調査においても同様の陥穴状土坑が２基発見されている。

県内の旧石器時代遺跡においてこうした陥穴状土坑は、同じ三浦半島の佐島の丘遺跡群一本松遺跡とがんだ畑遺跡で発見されているが、相模野台地ではまったく発見例がない。これに対して、静岡県の箱根山麓と愛鷹山麓では、打木原遺跡と同じ特徴をもつ陥穴状土坑群が多数発見されている。それらは、やはりＡＴ下位のＢＢⅢ層から検出され、円形の陥穴状土坑が数mの間隔を置いて直線状あるいは弧状に並び、尾根や谷地形を横断する配置が特徴的にみられる。こうした陥穴状土坑群



第４図　打木原遺跡の陥穴土坑とその配置図

については、地形に沿って動物を追い込み陥穴で捕獲する狩猟方法などが考えられている（今村2004)。

打木原遺跡では、幅 500mをこえる平坦な台地の中央一部が調査されただけで、現状においては、こうした陥穴状土坑群が長井台地全体にどのように配置されているのか明らかにされていない。しかし、これまでは石器資料しかなかった旧石器時代の生業を知る手掛かりとして陥穴状土坑群も加わり、徐々にではあるが旧石器時代の生活の内容が解明されつつある。

石器石材採取・選別遺構（？）

2000年7月～9月に調査が行われた藤沢市№211遺跡（第25回発表会）では、相模原段丘直下の低位段丘上に形成された礫層崩壊地の調査が行われ、その末端部について硬質細粒凝灰岩など礫層起源の石器石材を採取・選別した遺構と想定された。その根拠として、礫種や礫の大きさ等が崩落礫層の中心部と異なり選択性が働いているとみなされること、試し割りを行ったと考えられる分割された礫やハンマーに使用した叩石と考えられる礫が存在することなどが指摘された。しかし、崩落礫層の末端部という場所を考慮すると、これらはいずれも自然の営力で形成された可能性も考えられ、製品として持ち込まれた一部の石器を除けば確実に人為的な遺構・遺物であるとは断言できない。

6．まとめ

小稿では、旧石器時代研究でもっとも関心の高い石器群の編年研究についてはあえて多くをふれず、近年注目された石器の遺跡間接合や各種の生活遺構の評価を中心に遺跡の構造や居住様式などの研究状況を紹介した。これは、最近の旧石器時代研究の動向を反映したもので、近年ようやく編年研究以外の多様な研究が活発に行われるようになった。今後の課題としては、藤沢市№211 遺跡の調査で提起されたような石器石材の採取・選別遺跡がどのようなかたちで存在するのか探索・検討する必要があることなどがあげられる。

参考文献

今村啓爾 2004「箱根南西山麓先土器時代陥穴の使用方法」考古学研究 51－1

神奈川県教育委員会 1980『寺尾遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告 18

神奈川県考古学会 2001『相模野旧石器編年の到達点』

かながわ考古学財団 1996『吉岡遺跡群Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告 7

かながわ考古学財団 1996『宮ヶ瀬遺跡群Ⅵ』かながわ考古学財団調査報告 8

かながわ考古学財団 1998『公開セミナー記録集「用田バイパス関連遺跡群ローム層出土の炭化材」「旧石器時代の住居状遺構を探る」』

かながわ考古学財団 2002『用田鳥居前遺跡』かながわ考古学財団調査報告 128

かながわ考古学財団 2003『吉岡遺跡群Ⅹ』かながわ考古学財団調査報告 153

相模原市教育委員会 2003『田名向原遺跡Ⅰ』相模原市埋蔵文化財調査報告 30

相模原市教育委員会 2004『田名向原遺跡Ⅱ』相模原市埋蔵文化財調査報告 31

日本考古学協会 2003『前・中期旧石器問題の検証』

横須賀市教育委員会 2002『打木原遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書 10

神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表遺跡一覧の作成について

1977 年６月 26 日に横浜市の開港記念会館で開催された「神奈川県遺跡調査・研究発表会」は今年で 30 回を数える。当初は準備委員会形式で行われていた発表会も、第 15 回からは神奈川県考古学会が中心となって引き継ぎ、無事 30 年間途切れることなく継続されてきた。

発表会は、原則として前年度県内において実施された発掘調査の中で注目される調査研究について報告を行ってきている。調査発表に比べ研究発表が少ないとの指摘もあるが、本発表会の目的は、多くの人に遺跡調査の情報をいち早くお伝えすることが大きな役目の一つであると思われる。

今回、30 回という節目を迎えるにあたって、これまでの発表内容の一覧を作成することで、本会のあゆみを振り返る機会となればと考えた。一覧作成の結果、全部（誌上発表も含む）で 365 件の発表があり、毎年 12 件平均で行われていることになる。この 30 年間における県内考古学の進展は目を見張るものがあるが、それらについては、時代ごとのテーマ発表ならびに資料を参照願いたい。

ところで、この発表会に取り上げられる調査は、前述したとおりその年の代表であり、いわばごく一部である。神奈川県におけるここ数年の発掘調査件数の平均はおよそ 240 件であり発表会で取り上げているのはおよそ５％位であり、調査されても人々の目に触れることがない遺跡が数多くあることになる。また、発表されたものについても、その調査部分が開発に伴う事前調査である場合、記録保存という名の下に消滅してしまっているものが大半である。言い換えると、発表された遺跡の中で現状保存されているのは、史跡などを除くと、ごくわずかであることを忘れてはならない。したがって、少しでも多くの遺跡調査情報を知らせる機会を作る必要があるが、近年では、本発表会などの影響を受けて、各市町村や地域単位での遺跡調査発表会が開催されているところもあり、それぞれの地域でのきめ細かい報告が増加している。こうした事実を踏まえ、改めて本発表会の果たしてきた役割や、今後の責任を見据えていかなければならないと思われる。

本一覧が、神奈川県考古学史の研究や文化財保護を考える上で参考になれば幸いである。

＊本表作成については発表会担当（佐々木健策・吉田政行・阿曽正彦・大村浩司）が協議して行った。作成実務は吉田が担当し、長岡文紀氏、かながわ考古学財団、副会長岡本孝之の協力を得た。なお、前文の文責は大村にある。

No.	年月日	回次	順番	市町村	発表遺跡	発表者
1	19770626	1	1	横浜市	亀谷狐穴遺跡	江藤昭
2	19770626	1	2	横浜市	池辺第１４遺跡	坂上克弘
3	19770626	1	3	厚木市	林天神遺跡	杉山博久・山本守男
4	19770626	1	4	横浜市	殿ヶ谷遺跡	榊原松司
5	19770626	1	5	藤沢市	川名新林左遺跡・川名新林右遺跡	寺田兼方・中嶋登
6	19770626	1	6	川崎市	下作延福ノ円横穴古墳	東原信行
7	19770626	1	7	横浜市	矢崎山遺跡	坂本彰
8	19770626	1	8	横須賀市	鴨居養護学校遺跡	小出義治・秋元佑恭
9	19770626	1	9	川崎市	新作池谷遺跡	竹石健二・藤巻正信
10	19770626	1	10	秦野市	尾尻遺跡第Ⅱ地点	柳川清彦
11	19770626	1	11	海老名市	本郷遺跡ＳＯＥ－Ⅱ地区	吉田章一郎・合田芳正
12	19770626	1	12	川崎市	影向寺遺跡（２次）	久保常晴・伊東秀吉
13	19770626	1	13	鎌倉市	中世遺構について	大三輪龍彦
14	19770626	1	14	小田原市	小田原城香沼屋敷址	金子皓彦・青木豊
15	19780625	2	1	綾瀬町	寺尾遺跡	鈴木次郎・白石浩之
16	19780625	2	2	横浜市	花見山遺跡	鈴木重信・坂本彰
17	19780625	2	3	藤沢市	石川山田A地点遺跡	寺田兼方・中嶋登
18	19780625	2	4	横浜市	勝田第６・16遺跡	今井康博
19	19780625	2	5	横浜市	新羽大竹遺跡	上田薫
20	19780625	2	6	横浜市	仏向町遺跡	江藤昭
21	19780625	2	7	平塚市	十七ノ域遺跡	小島弘義・明石新
22	19780625	2	8	横須賀市	なたぎり遺跡Ｃ地点	小出義治・滝沢亮
23	19780625	2	9	秦野市	根丸島遺跡	曽根博明・福田敏一
24	19780625	2	10	海老名市	本郷遺跡（８次）	本郷遺跡調査団（村田正憲）

No.	年月日	回次	順番	市町村	発表遺跡	発表者
25	19780625	2	11	平塚市	神明久保遺跡	日野一郎・石井克己
26	19780625	2	12	鎌倉市	中世遺構について(若宮大路・二ノ鳥居)	斉木秀雄
27	19780625	2	13	小田原市	小田原城銅門跡	金子皓彦
28	19780625	2	14	川崎市	馬絹古墳	小川裕久・村田文夫
29	19790701	3	1	大和市	上和田城山遺跡	中村喜代重
30	19790701	3	2	厚木市	下荻野子合頭遺跡	江藤昭
31	19790701	3	3	横浜市	紅取遺跡	神澤勇一
32	19790701	3	4	横浜市	二ノ丸遺跡（チ３）	富永富士雄
33	19790701	3	5	横浜市	清水ヶ丘遺跡（仮称）	横浜市埋蔵文化財調査団(石井
34	19790701	3	6	横須賀市	鴨居上ノ台遺跡	塚田順正
35	19790701	3	7	横須賀市	長井小学校校庭内遺跡Ｂ地点	小出義治・滝沢亮
36	19790701	3	8	横浜市	三保杉沢遺跡	大川清・四本和行
37	19790701	3	9	川崎市	下作延日向横穴墓群	伊東秀吉・大坪宣雄
38	19790701	3	10	平塚市	向原遺跡	中田英
39	19790701	3	11	鎌倉市	材木座小谷	斉木秀雄
40	19800629	4	1	大和市	一般国道246号大和・厚木バイパス地域内遺跡	中村喜代重
41	19800629	4	2	川崎市	菅生水沢遺跡	野中和夫・竹石健二
42	19800629	4	3	横浜市	神隠丸山遺跡（ル１・２）	伊藤郭・坂本彰
43	19800629	4	4	相模原市	下溝稲荷遺跡	江藤昭
44	19800629	4	5	平塚市	王子台遺跡	近藤英夫・望月幹夫
45	19800629	4	6	横浜市	折本西原遺跡	石井寛
46	19800629	4	7	藤沢市	石名坂遺跡	寺田兼方・中嶋登
47	19800629	4	8	横須賀市	蓼原遺跡	神明地区埋蔵文化財調査団(大塚真弘)
48	19800629	4	9	横浜市	富士塚遺跡群	大川清・水野順敏
49	19800629	4	10	平塚市	諏訪前遺跡	日野一郎・杉山博久・井上洋一・大村浩司
50	19800629	4	11	横浜市	東耕地遺跡	山本暉久・柳川清彦
51	19800629	4	12	川崎市	新作小高台遺跡Ⅲ区	増子章二
52	19800629	4	13	鎌倉市	極楽寺旧境内	玉林美男
53	19800629	4	14	小田原市	小田原城評定所曲輪跡	金子皓彦
54	19810705	5	1	大和市	一般国道246号大和バイパス地域・上草柳第３地点遺跡	中村喜代重
55	19810705	5	2	綾瀬市	早川天神森遺跡	岡本孝之
56	19810705	5	3	秦野市	平沢同明遺跡	杉山博久・松浦宥一郎・設楽博己
57	19810705	5	4	横浜市	綱崎山遺跡	山口隆夫
58	19810705	5	5	横浜市	市道高速２号線No.６遺跡	桜井清彦・岡田威夫・藤井和夫
59	19810705	5	6	横須賀市	内原遺跡	大塚真弘
60	19810705	5	7	小田原市	久野下馬下遺跡	杉山博久・栗原一也・加藤成一
61	19810705	5	8	川崎市	久地西前田横穴墓群	野中和夫・竹石健二
62	19810705	5	9	海老名市	本郷遺跡ＫＯＥ－Ｉ地区(９次)	後藤喜八郎
63	19810705	5	10	平塚市	向原遺跡	中田英
64	19810705	5	11	横浜市	富士塚地区遺跡群長者原遺跡	大川清・水野順敏
65	19810705	5	12	鎌倉市	雪ノ下・南御門遺跡	河野眞知郎
66	19810705	5	13	平塚市	四之宮下郷・上郷	小島弘義
67	19820711	6	1	座間市	栗原中丸遺跡	大上周三・鈴木次郎・上田薫・服部実喜
68	19820711	6	2	大和市	縄文草創期遺跡(上野遺跡)	戸田哲也・曽根博明
69	19820711	6	3	横浜市	師岡貝塚	神澤勇一
70	19820711	6	4	横須賀市	久里浜伝福寺裏遺跡	赤星直忠・大塚真弘
71	19820711	6	5	川崎市	金程向原遺跡群	竹石健二・野中和夫
72	19820711	6	6	横浜市	受地だいやま遺跡	奥田直栄・菊池誠一
73	19820711	6	7	横浜市	大原遺跡（新吉田第７）	坂本彰・鈴木重信
74	19820711	6	8	横浜市	稲荷前16号墳	甘粕健・山口隆夫
75	19820711	6	9	横浜市	虚空蔵山遺跡	大川清・近藤真佐夫・水野順敏・斉藤啓子
76	19820711	6	10	小田原市	諏訪の原古墳群総世寺裏古墳	柳川清彦
77	19820711	6	11	平塚市	四之宮高林寺遺跡	小島弘義
78	19820711	6	12	鎌倉市	裏八幡西谷遺跡	山本暉久・服部実喜
79	19820711	6	13	鎌倉市	千葉地遺跡	手塚直樹
80	19831030	7	1	海老名市	柏ヶ谷長ヲサ遺跡	中村喜代重・諏訪間順
81	19831030	7	2	相模原市	橋本遺跡	青木豊・金山喜昭・土井永好

No.	年月日	回次	順番	市町村	発表遺跡	発表者
82	19831030	7	3	横浜市	三の丸遺跡	伊藤郭・今井康博・坂上克弘・倉沢和子
83	19831030	7	4	横浜市	帷子峯遺跡	鳴原靖彦・土井義行・百瀬忠幸
84	19831030	7	5	座間市	中原・加知久保遺跡	金子皓彦・浅野寛
85	19831030	7	6	横浜市	黒須田・大場第１地区遺跡群	大川清・水野順敏・渡辺務
86	19831030	7	7	横浜市	山王山遺跡	河野喜映
87	19831030	7	8	横浜市	八千代田遺跡	浅川利一・相原俊夫
88	19831030	7	9	藤沢市	大源太遺跡	吉田章一郎・今津節生
89	19831030	7	10	藤沢市	片瀬大源太遺跡	寺田兼方・澤田大多郎
90	19831030	7	11	川崎市	影向寺址	伊東秀吉・竹石健二・野中和夫
91	19831030	7	12	鎌倉市	蔵屋敷遺跡	小川裕久・玉林美男・服部実喜
92	19831030	7	13	綾瀬市	宮久保遺跡	國平健三
93	19840701	8	1	大和市	長堀南遺跡	戸田哲也・小林義典・麻生順司
94	19840701	8	2	藤沢市	代官山遺跡	上田薫・砂田佳弘
95	19840701	8	3	横浜市	北川貝塚	坂本彰・鈴木重信
96	19840701	8	4	横浜市	能見堂遺跡	小宮恒雄・山口隆夫・石井寛
97	19840701	8	5	厚木市	下依知大久根遺跡	江藤昭・北川吉明・大塚靖夫
98	19840701	8	6	伊勢原市	比々多第一地区遺跡群	滝澤亮・坂口滋皓
99	19840701	8	7	伊勢原市	小金塚古墳	久保哲三・後藤喜八郎
100	19840701	8	8	横須賀市	なたぎり遺跡Ｃ地点・Ｄ地点	滝澤亮・長谷川厚
101	19840701	8	9	三浦市	海外海蝕洞穴	海外洞穴遺跡調査団
102	19840701	8	10	綾瀬市	宮久保遺跡	國平健三
103	19840701	8	11	茅ヶ崎市	西久保上ノ町遺跡	富永富士雄・大村浩司
104	19850602	9	1	川崎市	山口台遺跡群・上台遺跡	大川清・北原實徳・地福勉
105	19850602	9	2	横浜市	上行寺東やぐら群	戸田哲也・小林義典・田代郁夫
106	19850602	9	3	横浜市	古梅谷遺跡	小宮恒雄・伊藤郭・坂本彰・石井寛
107	19850602	9	4	横浜市	上恩田遺跡群杉山神社遺跡	大川清・水野順敏・近藤真佐夫・宮重俊一
108	19850602	9	5	横浜市	殿屋敷遺跡群Ｃ地区	戸田哲也・河合英夫・田村良照
109	19850602	9	6	鎌倉市	手広八反目遺跡	吉田章一郎・永井正憲
110	19850602	9	7	横須賀市	溝尾遺跡	小出義治・稲村繁
111	19850602	9	8	藤沢市	大庭城址公園内遺跡	寺田兼方・加藤信夫・山上英誉
112	19850602	9	9	大和市	月見野遺跡群上野遺跡第１地点	相田薫
113	19850602	9	10	平塚市	四之宮・真土地区における最近の考古学的成果と墨書文字	小島弘義
114	19850602	9	11	小田原市	小田原城二の丸中堀	塚田順正・諏訪間順
115	19850602	9	12	小田原市	国府津三ツ俣遺跡	市川正史
116	19860706	10	1	相模原市	中村遺跡	小出義治・中三川昇・伊藤恒彦
117	19860706	10	2	川崎市	岡上小学校遺跡	竹石健二・野中和夫・野崎欽五・澤田大多郎
118	19860706	10	3	横須賀市	泉遺跡	軽部一一・中村勉
119	19860706	10	4	逗子市	沼間３丁目遺跡	小出義治・大坪宣雄
120	19860706	10	5	鎌倉市	長谷小路南遺跡	大三輪龍彦・斎木秀雄
121	19860706	10	6	横浜市	釜台町上星川遺跡	滝澤亮・高木宏和
122	19860706	10	7	伊勢原市	坪の内久門寺遺跡	中村喜代重
123	19860706	10	8	海老名市	本郷遺跡ＧＩＮ－Ｅ地区	江島秀木
124	19860706	10	9	秦野市	草山遺跡	大上周三
125	19860706	10	10	松田町	からさわ古窯址群	吉田章一郎・清水信行
126	19860706	10	11	藤沢市	南鍛冶山遺跡	寺田兼方・中嶋登
127	19860706	10	12	鎌倉市	今小路周辺遺跡(御成小学校内)	吉田章一郎・河野眞知郎
128	19870816	11	1	座間市	中丸遺跡	金子皓彦・浅野寛
129	19870816	11	2	横浜市	西之谷大谷遺跡	滝澤亮・林原利明・加藤久美
130	19870816	11	3	横浜市	西ノ谷貝塚	坂本彰
131	19870816	11	4	横浜市	三枚町遺跡	田村良照
132	19870816	11	5	秦野市	桜土手古墳群	日野一郎・久保哲三・吉田章一郎・小出義治・山本守男
133	19870816	11	6	相模原市	矢掛・久保遺跡	柳谷博
134	19870816	11	7	鎌倉市	由比ヶ浜中世集団墓地遺跡	大三輪龍彦・大河内勉
135	19870816	11	8	小田原市	小田原城三の丸(大蓮寺排水路)	諏訪間順
136	19870816	11	9	松田町	松田城址	杉山幾一・安藤文一・大森則明
137	19870816	11	10	鎌倉市	山王堂遺跡	斎木秀雄
138	19870816	11	11	横浜市	赤田地区遺跡群No.７・９遺跡	大川清・青木健二・吉田好孝・渡辺務

No.	年月日	回次	順番	市町村	発表遺跡	発表者
139	19870816	11	12	松田町	松田町・からさわ横穴墓群	清水信行・村上始
140	19870816	11	13	横須賀市	横須賀市・ひる畑遺跡	浅川利一・河合英夫
141	19870816	11	14	秦野市	秦野市・砂田台遺跡	宍戸信悟
142	19870816	11	15	横浜市	北川表の上遺跡（ル１４）	倉沢和子・坂上克弘・坂本彰・鈴木重信
143	19880904	12	1	平塚市	権現堂遺跡	日野一郎・小島弘義・青地俊朗
144	19880904	12	2	中郡二宮町	倉上横穴墓群	栗原一也・矢納健志・上原正人・井辺一徳
145	19880904	12	3	小田原市	小田原城下・欄干橋遺跡（外郎邸）	諏訪間順
146	19880904	12	4	厚木市	吾妻坂古墳	江藤昭・吉田寿
147	19880904	12	5	厚木市	宮の里遺跡	浅川利一・河合英夫・田村良照・迫和幸
148	19880904	12	6	海老名市	本郷遺跡第20次（ＫＥ区）	稲生典太郎・合田芳正
149	19880904	12	7	藤沢市	高倉滝ノ上遺跡	寺田兼方
150	19880904	12	8	鎌倉市	玉縄城遺跡	大河内勉
151	19880904	12	9	横浜市	金沢文庫遺跡	山本暉久・服部実喜
152	19880904	12	10	横浜市	上台の山遺跡	坂上克弘
153	19880904	12	11	大和市	長堀北遺跡	滝澤亮・小池聡
154	19880904	12	12	相模原市	下溝遺跡	岡本勇・三ツ橋和正
155	19880904	12	13	茅ヶ崎市	居村（Ｂ）低湿地遺跡	富永富士雄・大村浩司
156	19890903	13	1	藤沢市	慶應義塾藤沢校地内遺跡	小林謙一・関根唯充・五十嵐彰
157	19890903	13	2	川崎市	黒川地区遺跡群・宮添遺跡・他の遺跡	玉口時雄・大坪宣雄・碓井三子
158	19890903	13	3	藤沢市	ナデッ原遺跡	戸田哲也
159	19890903	13	4	寒川町	県営岡田団地内遺跡	戸田哲也・小林義典・迫和幸
160	19890903	13	5	伊勢原市	三ノ宮・宮ノ前遺跡	難波明・諏訪間伸
161	19890903	13	6	横浜市	大棚杉山神社遺跡	伊藤郭・石井寛
162	19890903	13	7	厚木市	及川遺跡	日野一郎・江藤昭・吉田寿
163	19890903	13	8	横浜市	上の山遺跡	坂上克弘・小宮恒雄
164	19890903	13	9	小田原市	三ツ俣遺跡（Ｆ地区）	山本暉久・谷口肇
165	19890903	13	10	海老名市	大谷向原遺跡（Ｂ地区）	滝澤亮・加藤久美
166	19890903	13	11	鎌倉市	二階堂国指定史跡永福寺跡	福田誠
167	19890903	13	12	小田原市	史跡小田原城二の丸中堀	塚田順正・大島慎一
168	19900930	14	1	清川村	宮ヶ瀬遺跡群の先土器時代遺跡	鈴木次郎・砂田佳弘
169	19900930	14	2	相模原市	勝坂遺跡	青木豊・内川隆志
170	19900930	14	3	秦野市	寺山遺跡	安藤文一・及川一茂
171	19900930	14	4	平塚市	王子ノ台遺跡（西区）	常木晃・秋田かな子・田尾誠敏
172	19900930	14	5	藤沢市	慶應義塾藤沢校地内遺跡	五十嵐彰・菅沼圭介
173	19900930	14	6	逗子市	池子遺跡群	山本暉久
174	19900930	14	7	横浜市	権田原遺跡	鈴木重信・倉沢和子・小宮恒雄・坂上克弘・坂本彰
175	19900930	14	8	茅ヶ崎市	石神遺跡	富永富士雄・小竹実佳子
176	19900930	14	9	大磯町	北中尾横穴墓群	鈴木一男・國見徹
177	19900930	14	10	海老名市	相模国分尼寺跡	滝澤亮・林原利明
178	19900930	14	11	平塚市	新町遺跡	日野一郎・明石新・青地俊朗・若林勝司
179	19900930	14	12	鎌倉市	下馬周辺遺跡	大河内勉
180	19900930	14	13	小田原市	小田原城三の丸堀関連遺跡	戸田哲也・小林義典
181	19910929	15	1	清川村	宮ヶ瀬遺跡群北原（No.9）遺跡長福寺址	市川正史・長谷川正
182	19910929	15	2	箱根町	元箱根石仏・石塔群	伊藤潤
183	19910929	15	3	鎌倉市	由比ヶ浜中世集団墓地遺跡	原廣志
184	19910929	15	4	茅ヶ崎市	浜之郷石原Ｂ遺跡	大村浩司・宮下秀之
185	19910929	15	5	川崎市	県史跡馬絹古墳	服部隆博
186	19910929	15	6	横浜市	上矢部町冨士山古墳	佐藤安平・伊藤郭
187	19910929	15	7	綾瀬市	神崎遺跡	小滝勉・村上吉正
188	19910929	15	8	逗子市	池子遺跡群No.１－Ａ地点弥生時代旧河道	山本暉久
189	19910929	15	9	相模原市	田名塩田原遺跡群	滝澤亮・小池聡
190	19910929	15	10	藤沢市	柄沢遺跡群１－Ｅ・Ｆ地点（縄文時代草創期）	戸田哲也
191	19910929	15	11	綾瀬市	上土棚遺跡第3次	中村喜代重
192	19920927	16	1	厚木市	東町遺跡	平本元一
193	19920927	16	2	鎌倉市	今小路西遺跡（御成小学校内）	河野眞知郎
194	19920927	16	3	山北町	河村城跡	石丸熙・関恒久・安藤文一
195	19920927	16	4	鎌倉市	大倉幕府周辺遺跡群	馬渕和雄
196	19920927	16	5	海老名市	相模国分寺跡　相模国分尼寺跡	滝澤亮・須田誠

No.	年月日	回次	順番	市町村	発表遺跡	発表者
197	19920927	16	6	逗子市	池子遺跡群No.4地点	長谷川厚・山本暉久
198	19920927	16	7	伊勢原市	石田・細屋遺跡	中村喜代重
199	19920927	16	8	寒川町	倉見日本鉱業（株）新ひかり社宅内遺跡	木村勇・田村良照
200	19920927	16	9	秦野市	東開戸遺跡	安藤文一
201	19920927	16	10	小田原市	小田原市内における関東ローム層の調査	山口剛志・諏訪間順・戸田哲也・小林義典
202	19920927	16	11	綾瀬市	吉岡遺跡群	白石浩之・砂田佳弘
203	19930919	17	1	藤沢市	南葛野遺跡	須田英一
204	19930919	17	2	大井町	第一東海自動車道No.35遺跡	西川修一・天野賢一・伊藤宏憲
205	19930919	17	3	小田原市	久野２号墳	山内昭二・野崎欽五・西山博章
206	19930919	17	4	秦野市	太岳院遺跡	大倉潤
207	19930919	17	5	海老名市	相模国分寺塔跡	須田誠
208	19930919	17	6	三浦市	新井城跡	武藤康弘
209	19930919	17	7	平塚市	山王Ａ遺跡	日野一郎・上原正人
210	19930919	17	8	横浜市	観福寺北遺跡（関耕地地区）	浅川利一・田村良照
211	19930919	17	9	横須賀市	小荷谷遺跡	中三川昇
212	19930919	17	10	清川村	宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷遺跡	近野正幸・岩崎修
213	19930919	17	11	横浜市	綱崎山横穴墓群	鹿島保宏・鈴木重信
214	19940925	18	1	大和市	月見野遺跡群上野遺跡第5・6地点	滝澤亮・小池聡
215	19940925	18	2	伊勢原市	第一東海自動車道No.14（三ノ宮・下谷戸）遺跡	宍戸信吾・立川直之・松田光太郎・三瓶祐司
216	19940925	18	3	南足柄市	塚田遺跡	安藤文一
217	19940925	18	4	平塚市	原口遺跡	長谷川厚・長岡文紀
218	19940925	18	5	横須賀市	大塚古墳群（吉井・池田地区遺跡群内）	玉口時雄・大坪宣雄・北爪一行
219	19940925	18	6	横浜市	大場横穴墓群Ｆ・Ｇ・Ｈ横穴墓群	大川清・吉田好孝・渡辺務
220	19940925	18	7	川崎市	下麻生古墳群	北原實徳
221	19940925	18	8	海老名市	国分尼寺北方遺跡	伊東秀吉・大坪宣雄・萩上由美子・小林克利
222	19940925	18	9	茅ヶ崎市	居村Ｂ・前ノ田遺跡	富永富士雄
223	19940925	18	10	鎌倉市	若宮大路周辺遺跡群	田代郁夫・原廣志・佐藤仁彦
224	19940925	18	11	小田原市	本町・　小田原城三の丸掘	戸田哲也・小林義典
225	19950923	19	1	相模原市	横山５丁目遺跡	大坪宣雄・長澤邦夫
226	19950923	19	2	清川村	宮ヶ瀬遺跡群北原（No.10・11北）遺跡	市川正史・能嶋政義・恩田勇・冨永樹之
227	19950923	19	3	横浜市	阿久和宮腰遺跡	戸田哲也・中山良
228	19950923	19	4	三浦市	油壺遺跡	須田栄一
229	19950923	19	5	藤沢市	若尾山遺跡	継実
230	19950923	19	6	伊勢原市	第一東海自動車道No.14（三ノ宮・下谷戸）遺跡	宍戸信吾・飯田純友・宮坂淳一・櫻井真貴・三瓶祐司・畠中俊明
231	19950923	19	7	川崎市	久本横穴墓群	後藤喜八郎
232	19950923	19	8	平塚市	構之内遺跡	日野一郎・上原正人
233	19950923	19	9	鎌倉市	国指定永福寺跡	福田誠
234	19950923	19	10	山北町	河村城関連遺跡	安藤文一
235	19950923	19	11	小田原市	三の丸小学校内遺跡（小田原城三の丸・藩校集成館跡）	戸田哲也・小林義典・香川達郎・中村哲也
236	19960923	20	1	茅ヶ崎市	西久保遺跡群	富永富士雄・大村浩司・宮下秀之・藤井秀男
237	19960923	20	2	小田原市	小田原城下・欄干橋町遺跡第Ⅳ地点	山口剛志
238	19960923	20	3	海老名市	No.47遺跡	瀬田哲夫
239	19960923	20	4	鎌倉市	北条小町邸跡（泰時・時頼邸）	馬渕和雄
240	19960923	20	5	横浜市	藪根不動原遺跡	横山太郎
241	19960923	20	6	平塚市	沢狭遺跡	戸田哲也・小林義典・香川達郎
242	19960923	20	7	小田原市	羽根尾横穴墓群	田村良照
243	19960923	20	8	三浦市	赤坂遺跡	中村勉
244	19960923	20	9	津久井町	青根馬渡遺跡群No.４遺跡	河野喜映・池田治
245	19960923	20	10	横須賀市	大塚東遺跡	大坪宣雄・北爪一行
246	19960923	20	11	茅ヶ崎市	臼久保Ａ遺跡	松田光太郎・田村裕司・井辺一徳・阿部友寿
247	19970914	21	1	藤沢市	用田バイパス関連遺跡群	栗原伸好
248	19970914	21	2	相模原市	田名向原No.４遺跡	麻生順司
249	19970914	21	3	小田原市	御組長屋（No.101）遺跡第Ⅱ地点	戸田哲也・小林義典
250	19970914	21	4	三浦市	松輪間口東海触洞穴遺跡	剱持輝久
251	19970914	21	5	小田原市	千代仲の町遺跡第Ⅳ地点	諏訪間順・手島咲子

No.	年月日	回次	順番	市町村	発表遺跡	発表者
252	19970914	21	6	厚木市	船子・宮の前遺跡	中村喜代重
253	19970914	21	7	川崎市	久地西前田横穴墓群	竹石健二・澤田大多郎・野崎欽五・野中和夫
254	19970914	21	8	川崎市	橘樹郡衙関連遺跡	河合英夫
255	19970914	21	9	鎌倉市	由比ガ浜南遺跡	齋木秀雄
256	19970914	21	10	小田原市	史跡小田原城跡二の丸住吉堀	塚田順正・大島慎一
257	19970914	21	11	平塚市	高間原遺跡	秋田かな子・田尾誠敏・嶺岸維津子・宮田明子
258	19970914	21	12	小田原市	小田原城下町遺跡	小林竜一・上石統子・諏訪間順
259	19970914	21	13	海老名市	史跡相模国分寺跡僧坊跡	須田誠
260	19981115	22	1	大和市	大和市（仮）配水池内遺跡	戸田哲也・麻生順司
261	19981115	22	2	城山町	新小倉橘関連遺跡	櫻井真貴・畠中俊明
262	19981115	22	3	川崎市	多摩区No.61遺跡	呉地英夫
263	19981115	22	4	南足柄市	五反畑遺跡	安藤文一
264	19981115	22	5	鎌倉市	史跡東勝寺跡	菊川英政
265	19981115	22	6	二宮町	天神谷戸遺跡	中田英・高村公行・峰治・村上吉正
266	19981115	22	7	鎌倉市	若宮大路周辺遺跡群	宮田眞
267	19981115	22	8	小田原市	小田原城三ノ丸東堀跡	諏訪間順
268	19981115	22	9	鎌倉市	中世鎌倉における発掘調査の現状と課題	斎木秀雄
269	19981115	22	10	小田原市	久野下馬下遺跡第Ⅳ地点	小林義典
270	19981115	22	11	鎌倉市	宇津宮辻子幕府跡	原廣志
271	20000912	23	1	綾瀬市	上土棚笹山遺跡	矢島國雄・小滝勉
272	20000912	23	2	伊勢原市	田中・万代遺跡	恩田勇・井辺一徳
273	20000912	23	3	小田原市	中里遺跡第Ⅰ地点	戸田哲也
274	20000912	23	4	逗子市	池子桟敷戸遺跡	若松美智子
275	20000912	23	5	葉山町・逗子市	長柄・桜山第１・第２号墳	桝渕規彰
276	20000912	23	6	厚木市	ホウダイヤマ遺跡	平本元一
277	20000912	23	7	平塚市	広川・公所遺跡群	大川清・渡辺務・宮重俊一・増田誠
278	20000912	23	8	平塚市	真田・北金目遺跡群	若林勝司
279	20000912	23	9	伊勢原市	成瀬第二地区遺跡群	香川達郎
280	20000912	23	10	津久井町	津久井城址御屋敷跡	近藤英夫・小柳美樹・野口浩史・伊藤梨香・野坂優介・山根航
281	20000912	23	11	箱根町	箱根旧街道畑宿一里塚	伊藤潤
282	20001001	24	1	藤沢市	No.106遺跡	桜井準也・増渕和夫・松葉礼子
283	20001001	24	2	大和市	上草柳第３地点南遺跡	織笠昭・會田信行・上小澤桂一
284	20001001	24	3	小田原市	羽根尾貝塚	戸田哲也・舘弘子
285	20001001	24	4	綾瀬市	道場窪遺跡	矢島國雄・小滝勉
286	20001001	24	5	逗子市	地蔵山遺跡群	土屋浩美
287	20001001	24	6	寒川町	高田遺跡	中村喜代重
288	20001001	24	7	平塚市	真田・北金目遺跡群	上原正人・川端清倫
289	20001001	24	8	厚木市	登山古墳群	平本元一
290	20001001	24	9	秦野市	西大竹尾尻遺跡群	霜出俊浩・須田弥生
291	20001001	24	10	茅ヶ崎市	香川・下寺尾遺跡群下寺尾地区	中村哲也
292	20001001	24	11	鎌倉市	北条小町邸跡	森孝子
293	20001001	24	12	箱根町	大芝遺跡	伊藤潤・谷口肇
294	20001001	24	13	逗子市・葉山町	長柄・桜山第１・第２号墳	柏木善治
295	20001001	24	14	川崎市	千年伊勢山台遺跡	河合英夫
296	20011013	25	1	横須賀市	打木原遺跡	佐藤明生
297	20011013	25	2	藤沢市	No.211遺跡	桜井準也・松山敬一朗・鈴木啓介・中川真人
298	20011013	25	3	横浜市	稲荷山貝塚	松田光太郎
299	20011013	25	4	横浜市	杉田貝塚	山田仁和
300	20011013	25	5	平塚市	真田・北金目遺跡群	中嶋由紀子・渡辺清史
301	20011013	25	6	海老名市	秋葉山古墳群第１～３号墳	押方みはる・山口正憲
302	20011013	25	7	葉山町	三ヶ岡遺跡	（財）かながわ考古学財団(長谷川厚)
303	20011013	25	8	小田原市	永塚下り畑遺跡	齋木秀雄・降矢順子
304	20011013	25	9	秦野市	東田原中丸遺跡	霜出俊浩
305	20011013	25	10	鎌倉市	鎌倉大仏周辺	福田誠

No.	年月日	回次	順番	市町村	発表遺跡	発表者
306	20011013	25	11	横須賀市	向井将監正方夫妻の墓	中三川昇
307	20011013	25	12	平塚市	構之内遺跡第４地点	大野悟
308	20011013	25	13	鎌倉市	史跡建長寺境内	宮田眞
309	20011013	25	14	平塚市	平塚市の遺跡概要	平塚市教育委員会
310	20021124	26	1	綾瀬市	上土棚南遺跡	矢島國雄・小滝勉
311	20021124	26	2	横須賀市	佐島の丘遺跡群高原・高原北遺跡	横山太郎
312	20021124	26	3	中井町	比奈窪中屋敷横穴墓群	三瓶裕司
313	20021124	26	4	寒川町	宮山中里遺跡	市川正史・井澤純・吉田政行・渡辺外
314	20021124	26	5	逗子市	延命寺遺跡	松山敬一朗
315	20021124	26	6	茅ヶ崎市	国指定史跡旧相模川橋脚	大村浩司
316	20021124	26	7	横浜市	史跡称名寺境内旧伽藍跡	（財）横浜市ふるさと歴史財団
317	20021124	26	8	津久井町	津久井城跡	野口浩史・近藤英夫
318	20021124	26	9	小田原市	小田原城三の丸杉浦平太夫邸跡	木村吉行・井関文明
319	20021124	26	10	小田原市	小田原城総構伝肇寺西第Ｉ地点	山口剛志
320	20021124	26	11	横須賀市	猿島遺跡群	野内秀明
321	20021124	26	12	秦野市	稲荷木遺跡	天野賢一
322	20031019	27	1	藤沢市	遠藤山崎遺跡	戸田哲也
323	20031019	27	2	川崎市	万福寺遺跡群No.１遺跡	北原實徳・今泉克巳
324	20031019	27	3	横浜市	茅ヶ崎・西ノ谷貝塚	坂本彰
325	20031019	27	4	平塚市	真田・北金目遺跡群	上原正人
326	20031019	27	5	川崎市	犬蔵地区遺跡群元石川－１遺跡	宮重俊一
327	20031019	27	6	茅ヶ崎市	下寺尾西方Ａ遺跡	宍戸信悟・村上吉正
328	20031019	27	7	厚木市	飯山久保古墳群	平本元一・中村喜代重
329	20031019	27	8	鎌倉市	無量寺跡	森孝子
330	20031019	27	9	鎌倉市	五合桝遺跡（仏法寺跡）	福田誠
331	20031019	27	10	小田原市	史跡小田原城跡馬屋曲輪	大島慎一
332	20031019	27	11	三浦市	ヤキバの塚遺跡	藤山龍造・渡辺直哉・朽木量・須田英一・桜井準也
333	20031019	27	12	厚木市	神の山古墳	北条芳隆
334	20041003	28	1	茅ヶ崎市	芹沢大久保Ｃ遺跡・Ｄ遺跡	高橋和
335	20041003	28	2	横浜市	矢崎山西遺跡	武部喜充
336	20041003	28	3	茅ヶ崎市	小出川関連遺跡	小川岳人
337	20041003	28	4	鎌倉市	大倉幕府周辺遺跡群	斉木秀雄
338	20041003	28	5	横須賀市	かろうと山古墳	稲村繁
339	20041003	28	6	厚木市	中依知遺跡	植山英史
340	20041003	28	7	海老名市	社家宇治山遺跡	宮坂淳一・村上吉正・渡辺清史
341	20041003	28	8	平塚市	湘南新道関連遺跡	柏木善治
342	20041003	28	9	山北町	河村城跡	安藤文一
343	20041003	28	10	小田原市	小田原城下本町遺跡第Ⅲ地点	諏訪間順・北条ゆうこ
344	20041003	28	11	横浜市	第二代横浜駅	青木祐介
345	20041003	28	12	城山町	川尻石器時代遺跡	中川真人
346	20041003	28	13	海老名市	秋葉山古墳第４号墳	向原崇英
347	20051023	29	1	秦野市	平沢同明遺跡	戸田哲也
348	20051023	29	2	横浜市	北門１号墳	滝澤亮
349	20051023	29	3	厚木市	吾妻坂古墳	西川修一
350	20051023	29	4	海老名市	相模国分寺跡	須田勉
351	20051023	29	5	川崎市	推定橘郡衙（千年伊勢山台）遺跡	河合英夫
352	20051023	29	6	平塚市	湘南新道関連遺跡	柏木善治
353	20051023	29	7	鎌倉市	北条義時法華堂跡	松尾宣方
354	20051023	29	8	津久井町	津久井城跡	近藤英夫・野口浩史・佐藤昌彦・米山あかね
355	20051023	29	9	小田原市	三の丸元蔵堀	吉田浩明
356	20061119	30	1	平塚市	万田貝殻坂貝塚	戸田哲也・中村哲也
357	20061119	30	2	小田原市	千代南原遺跡	渡辺千尋
358	20061119	30	3	鎌倉市	若宮大路周辺遺跡群	宮田眞
359	20061119	30	4	三浦市	がんだ畑遺跡	山田仁和
360	20061119	30	5	横浜市	下組東貝塚	戸田哲也・迫和幸
361	20061119	30	6	横浜市	元町貝塚	橋本昌幸
362	20061119	30	7	平塚市	湘南新道関連遺跡	柏木善治
363	20061119	30	8	茅ヶ崎市	小出川河川改修関連遺跡群	小川岳人
364	20061119	30	9	川崎市	上麻生日光台遺跡	渡辺務・宮重俊一
365	20061119	30	10	小田原市	(仮)早川石切丁場群	三瓶裕司・依田亮一・新開基史・永井淳

第30回　神奈川県遺跡調査・研究発表会

発表会担当役員　◎大村浩司・阿曽正彦・佐々木健策・吉田政行

第30回　神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨

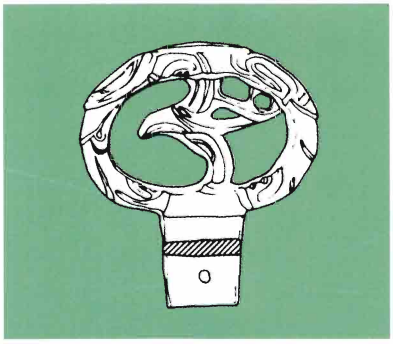
編　集　第30回　神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表会担当

発　行　神奈川県考古学会

発行日　2006年（平成18年）11月19日

印　刷　光写真印刷株式会社　TEL　03－3732－0161

担当して初の三桁越えです。ご多忙な中、原稿執筆いただいた皆様にお礼申し上げます。また、木村さん、臼田さん、神田さん、宮川さん、秋内さん、松岡さんなど多くの方々にご協力いただきました。あらためて感謝いたします。記念すべき30回。さて当日は、どれだけ多くの方が足を運んで下さっているか～？（Masa “I was exhausted” Y.）



第１回調査・研究発表会で報告された
藤沢市川名新林右遺跡出土の環頭把頭